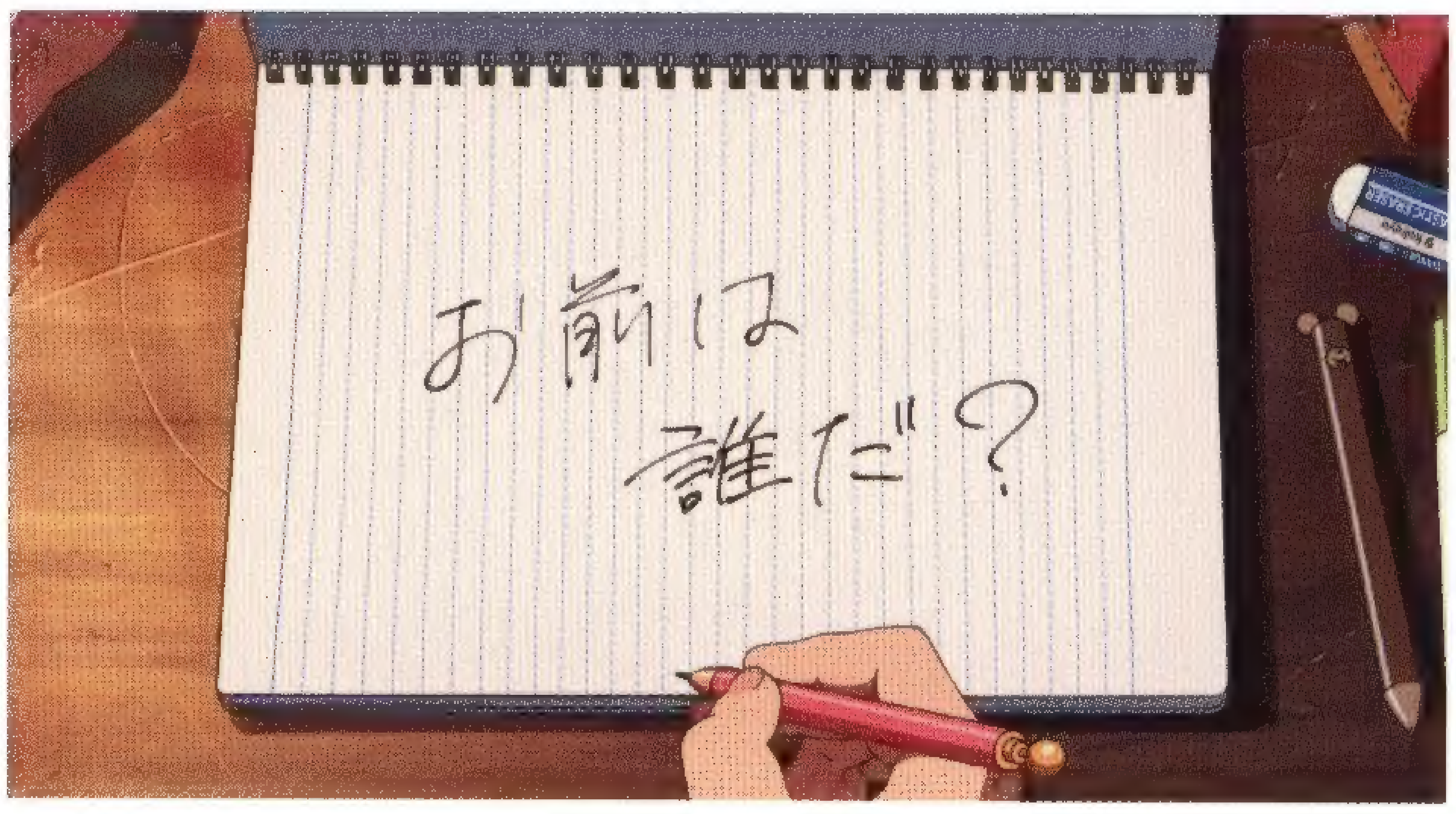

君の名は。
your name.
新海誠監督作品
君の名は。
公式ビジュアルガイド
角川書店


君の名は。
your name.
新海誠監督作品
君の名は。
公式ビジュアルガイド
角川書店



新海誠監督作品

君の名は。

your name.

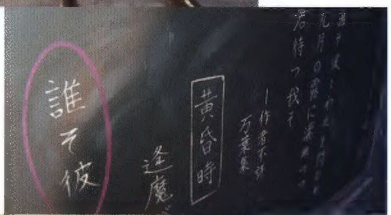
公式ビジュアルガイド



朝、目が覚めると、なぜか泣いている。
そういうことが、時々ある。
見ていたはずの夢は、いつも思い出せない。
ただ――
ただ、なにかが消えてしまったという感覚だけが、
目覚めてからも長く残る。

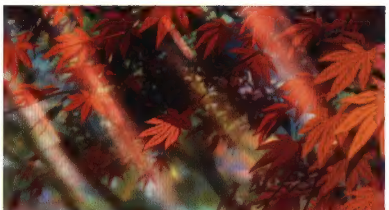

ずっとなにかを、誰かを探している。
そういう気持ちにとりつかれたのは、
たぶんあの日から。
あの日。星が降った日。
それはまるで——
まるで、夢の景色のように。
ただひたすらに、美しい眺めだった。





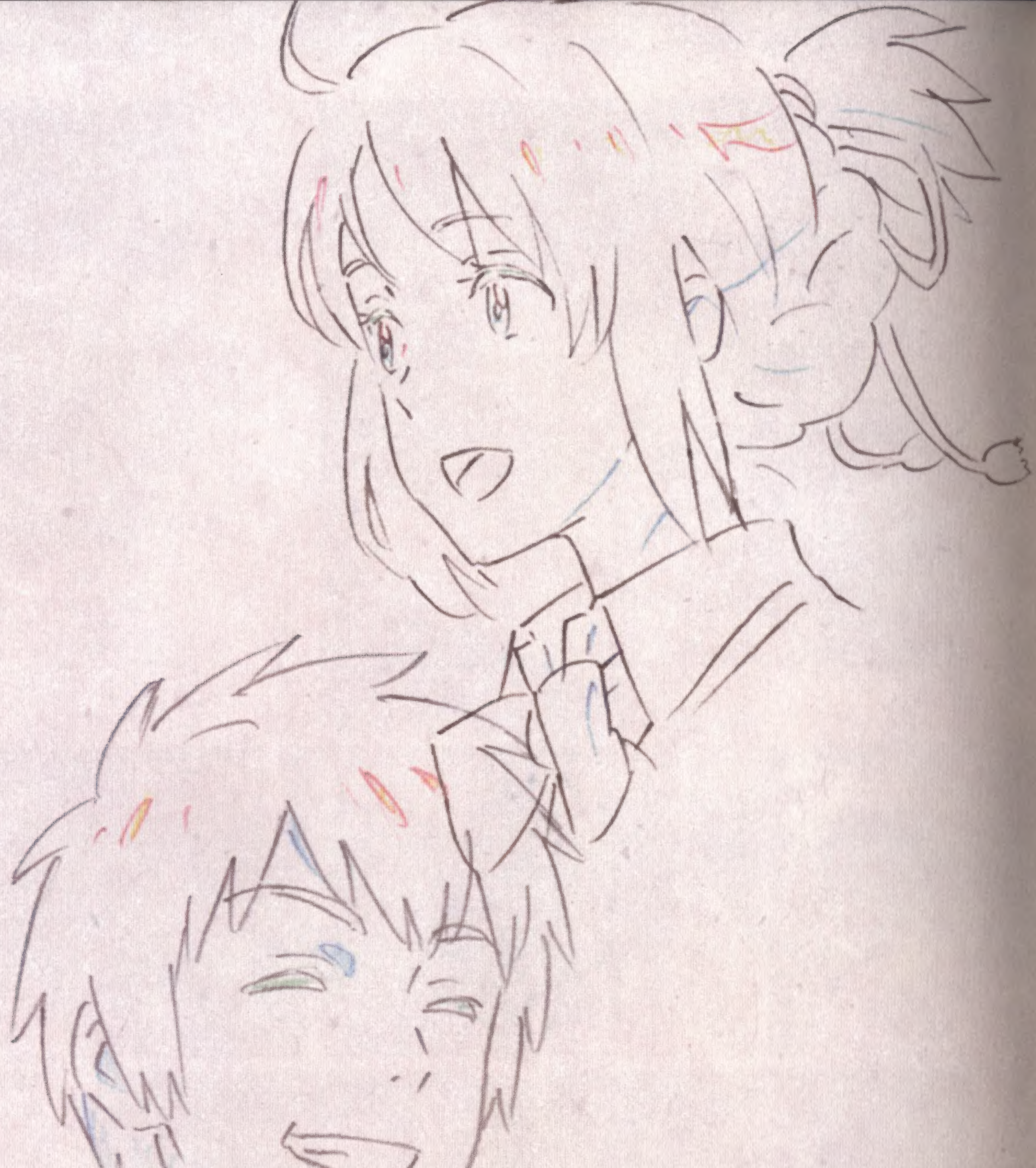


CONTENTS









VISUAL STORY

作品のストーリーを順に追って全てご紹介。
アニメで見たあの名シーンを誌上でもう一度、ご堪能ください。

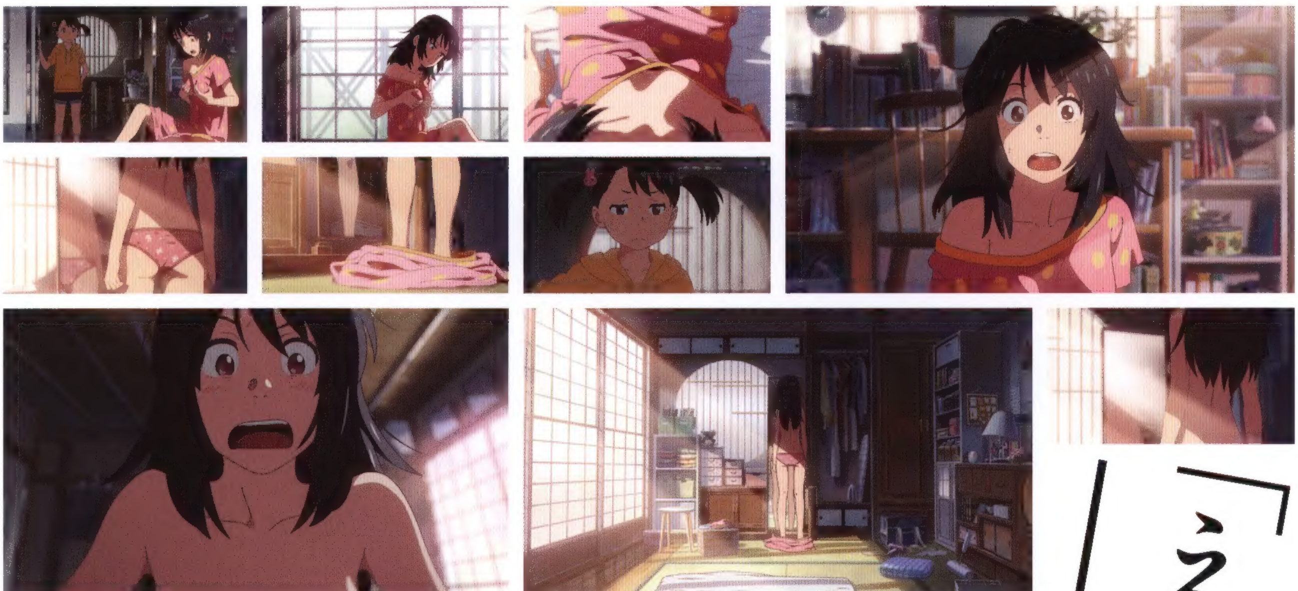




「……覚えて、ない？」



瀧が目を覚ましたのは、畳の上に敷かれた布団の上。目覚める直前、誰か女の子の声が聞こえた……？



自分を「お姉ちゃん」と呼ぶ声にせきたてられて起きた瀧。鏡の前でパジャマを脱ぐと、目の前に女の子の裸が……！

「え――!!」

東京に暮らす男子高校生の立花瀧は、ある朝、目が覚めると、どこかの見知らぬ部屋にいた。

見下ろすと、そこにあるのはパジャマ姿の女の子の身体。これは夢……？ 寝ぼけた頭でそう考えながら、自然に胸へ手をのばしていた。

それは実は宮水三葉の身体。そこは山深い田舎町・糸守に暮らす女子高校生、三葉の部屋だった。

翌朝、三葉は、もとの三葉に戻っていた。

妹の四葉も祖母の一葉も、いつもと変わらない三葉にほっとした様子だったが、三葉にはなんのことだかわからなかった。

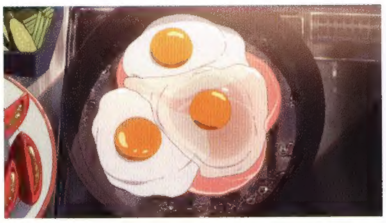
いつものようにご飯を食べて、いつものように器用に髪を編んで組紐で結び、いつものように妹と学校に向かった。

「……今日は、普通やな」



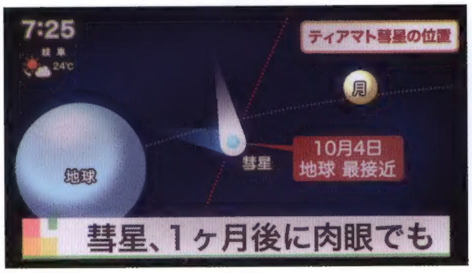


朝の食卓に遅れて加わる三葉。自分の茶碗にご飯をよそいながら、「食べすぎかな?」とつぶやく。その様子はいつも通り。













防災無線放送から町長選挙の話題が流れ出すと、一葉がスピーカーの電源を抜き、三葉がテレビの電源を入れる。テレビでは千年に一度の周期で巡ってくるティアマト彗星のニュースが流れていた。



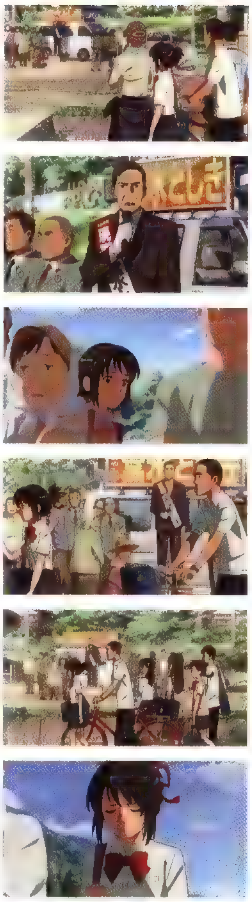




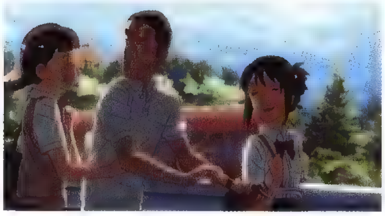


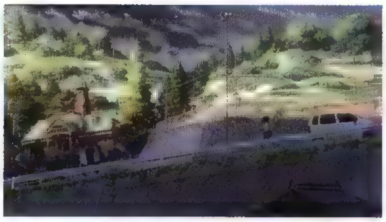






演説中の父に「胸張って歩かんか!」と注意され、その場にいた同級生たちにからかいの目で見られながら、三葉は立ち去る。







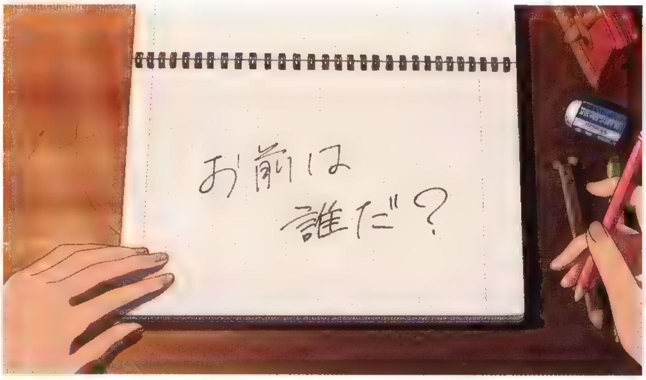
「三葉、今日は髪、ちゃんとしとるね」
「なんの話?」

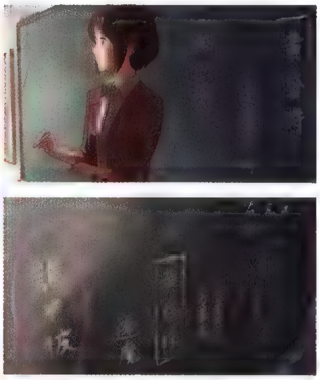


「今日は髪、ちゃんとしとるね」「ありゃ絶対狐憑きやな」早耶香と勅使河原に昨日のことを言われても、三葉にはなんの話かわからない。



「黄昏時」の語源となっている「誰そ彼」という言葉について語られる古典の授業。それは糸守の方言では「カタワレ時」と言われている。





高校へ向かう途中、三葉が友人の名取早耶香と勅使河原克彦に会うと、ふたりも今日の三葉はいつもの三葉だと、昨日の三葉はおかしかったと話した。

しばらく歩くと、三葉たちは選挙演説を聞いている一群に出くわした。演説をしているのは、町長である三葉の父親、宮水俊樹。次期の選挙にも出馬しているのだ。

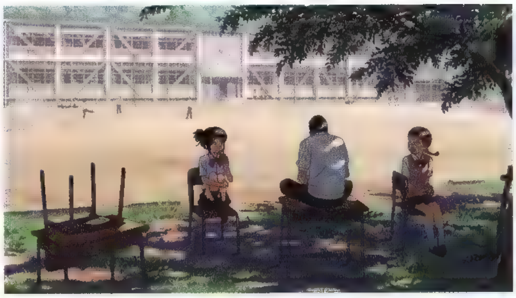
そして、三葉は、学校で古典の授業を受けているときに、ふと気づく。自分のノートに身に覚えのない筆跡があることに……。

早耶香と勅使河原は、昨日の三葉は、まるで記憶喪失になったみたいだったと言う。自分の机やロッカーさえも忘れていたのだ、と。

ストレスじゃないか、と早耶香に問われて、三葉は嘆いて見せた。

「もうあたし、この町いややー。狭すぎるし濃すぎるし、さっさと卒業して、早く東京行きたいわー」







別の人として生きる夢を見ていたような気がするという三葉に、勅使河原が叫ぶ。「わかった。それって……前世の記憶!」

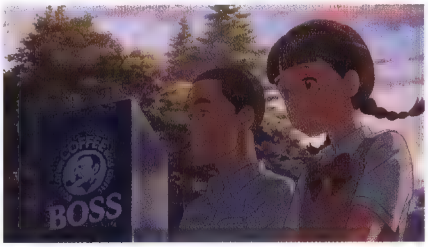
「ずっと変な夢を見とったような気がするんやけど……」



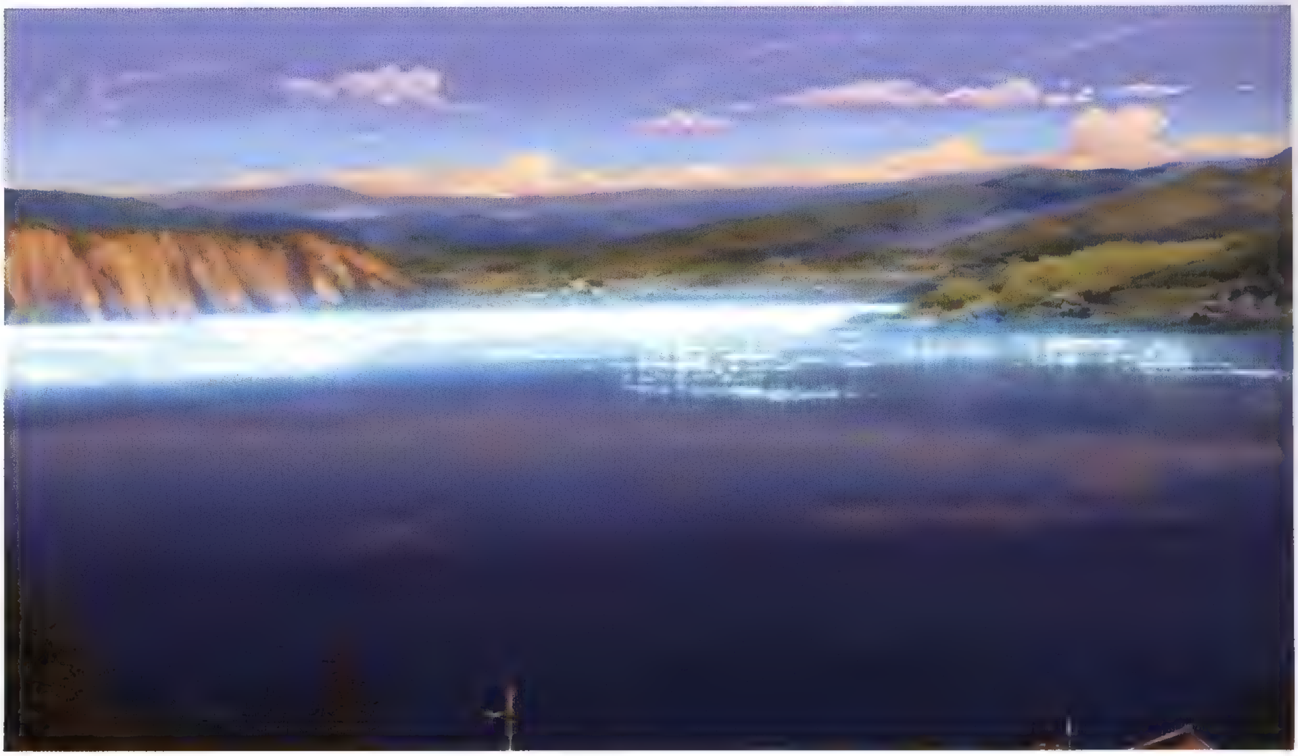


「あの子もホント大変やよね」三葉が帰ったあと、早耶香と勅使河原は、宮水神社の家系に生まれたものとしての役割がある三葉のことを慮る。



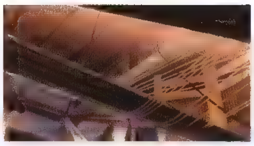






組紐作りをやりたがる四葉に、一葉は「まだ早い」とぴしゃり。もっと糸の声を聞きなさいと言い聞かせる。



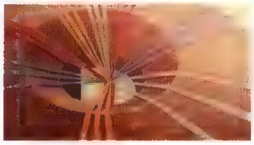








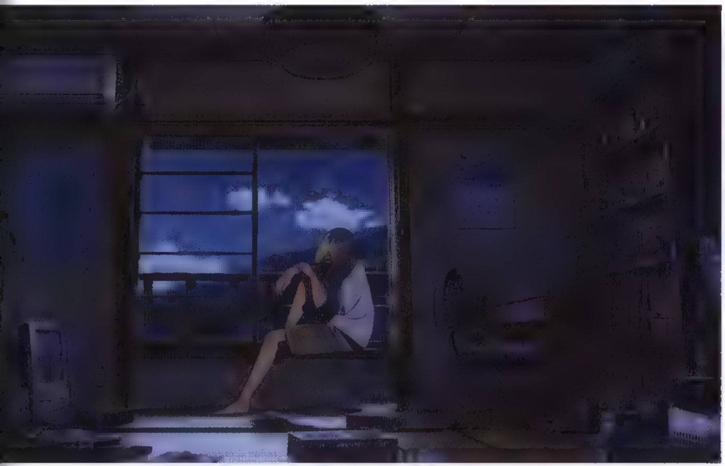






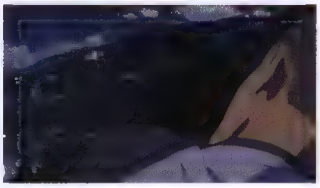


「ずーっと糸を巻いとると、
じきに人と糸との間に感情が流れ出すで」











三葉の父は勅使河原の家で、地元の建設業を営む勅使河原の父と酒を酌み交わしていた。「腐敗の臭いがするなぁ」勅使河原は皮肉をつぶやいた。

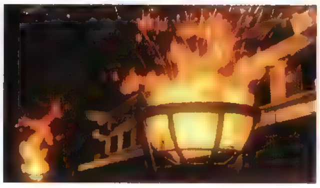
代々、宮水神社に仕えてきた宮水家。

父親が神職を捨てて家を出たため、三葉と四葉は、神主の一葉のもとで巫女としての仕事を担い、暮らしている。

糸守千年の歴史が刻まれている組紐作りもそのひとつであり、三葉は、ある儀式に使う組紐を組んでいた。

それは宮水神社の巫女として神楽を舞い、御神体に奉納する口噛み酒を仕立てる儀式。

とても神聖な儀式だが、思春期まっさかりの三葉にとっては、気が重いものでもあった。







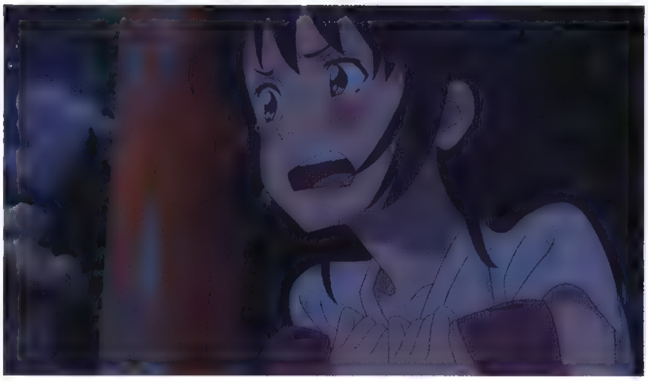


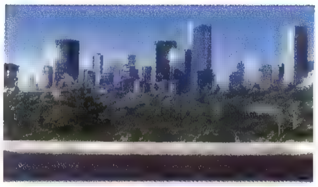

「世界最古の酒なんやって」

米を噛んで自身の唾液と混ぜ、枡の中にゆっくりと吐き出して組紐で綴じる。これを御神体に奉納して自然発酵させるのが口噛み酒だ。

「来世は東京のイケメン男子にしてくださ――――――い!」

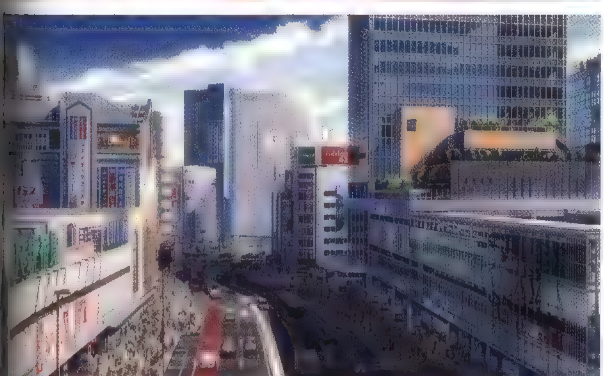
儀式を同級生たちに見られて、その工程に眉をひそめられたことに気づき、三葉は落ちこむ。そして、今の自分とはまったく違う人生に憧れるのだった。



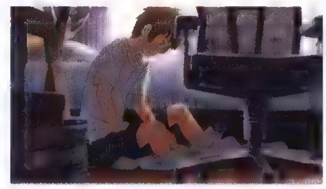


「東京やぁ……！」

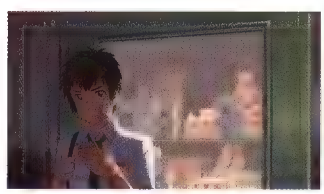
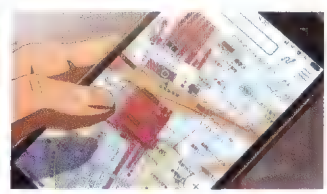










ベッドに寝慣れていない三葉は、アラームに煽られて盛大に床へ落ちた。男の子の身体になっている自分に気づき顔を赤らめて着替える。


瀧になった三葉は、新宿駅から人で溢れかえる交差点へ出て、感嘆の声を漏らし、高揚した表情を浮かべる。

ある朝、目が覚めると、山深い田舎町・糸守に暮らす女子高校生だった宮水三葉は、どこかの見知らぬ部屋にいた。

目の前には男子用の制服がかかっていて、狭い部屋にはいろいろな本が並んでいた。「どこ？」寝ぼけたままつぶやいて俯くと、自分の身体にあったはずのものがなくて、なかったはずのものがあった。

「うわあ！」

鏡を覗くと、そこには見たことのない少年の顔があった。

それは立花瀧の顔。

そこは東京の都心に暮らす瀧の部屋だった。

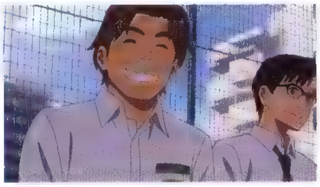
瀧の中に入った三葉は、わけがわからないまま、瀧の父親を見送り、自分も学校へ向かうために部屋を出る。

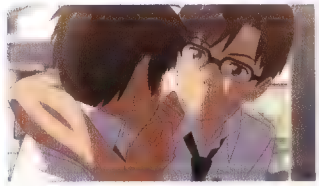
すると、マンションのドアの先には東京の街が広がっていて……。

心を奪われた三葉は、ドキドキしながら街に出る。途中道に迷い、昼休みにようやく瀧の通う学校へたどり着いた。

しかも、放課後には友人たちと憧れのカフェへ寄り道。リアルで素敵な夢だと思って、三葉はこの時間を謳歌しはじめる。





登校早々、瀧の友人の藤井司と高木真太と昼食をとることに。ふたりはドギマギする瀧に首をひねりつつ、弁当を忘れた瀧に即席サンドイッチをつくってくれた。






カフェの内装に興味を示す高木と司を尻目に、三葉はパンケーキの値段に目を丸くする。そして、瀧のバイト先からの呼び出しが入り——。



「……あのー、俺のバイト先ってどこやっけ?」

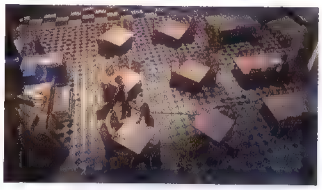
ピザに楊子が刺さっていたといいがかりをつけられている瀧を奥寺先輩が助ける。けれど、奥寺先輩はその客にスカートをカッターで切りつけられてしまう。

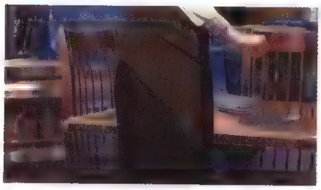













「今日のきみのほうがいいよ」



奥寺先輩をスタッフルームに連れていき、「スカート、脱いでください」と言い放つ瀧。奥寺先輩は驚きながらも、瀧がスカートを繕うついでに施したかわいい刺繍に喜ぶ。

瀧の中に入った三葉は、瀧のバイト先に向かった。

そこはたくさんの人が集うカジュアルなイタリアンレストランで、瀧はウェイターを担当していた。

でも、なにもかもがはじめての三葉はてんてこ舞い。ミスを重ねたあげく、悪意ある客にからまれてしまい、それをフォローしてくれたのが、バイト先の先輩でマドンナ的存在である大学生の奥寺ミキだった。

しかし、その客の嫌がらせで奥寺先輩のスカートが切られてしまう。

そこで瀧の中の三葉は、先輩のスカートを手早く繕う。いつもと違う雰囲気の瀧に、奥寺先輩も興味を示していく。

バイトから瀧のマンションに帰った三葉は、瀧のスマートフォンのデータの中に奥寺先輩の写真を見つけ、瀧の気持ちに気づいて微笑む。

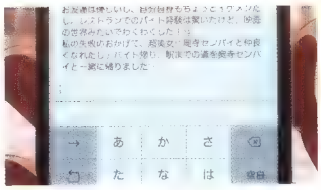
そして、あまりによく出来た夢に、感心するのだった。



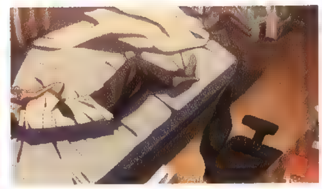


「よく出来た夢やなぁ」

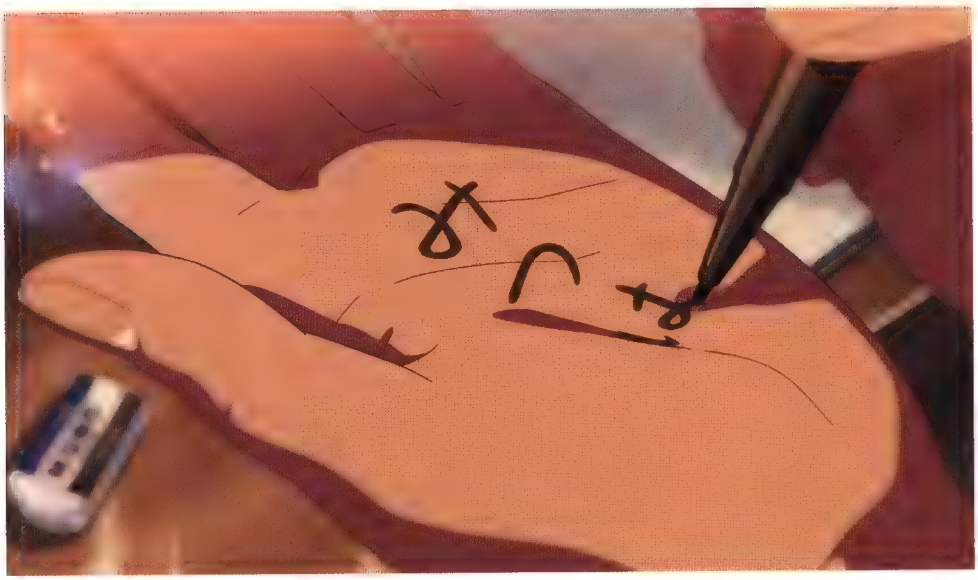
瀧はスマホのアプリで日記をつけていた。三葉はそこに、今日一日のこと、奥寺先輩と仲良くなれたことなどを打ち込んだ。





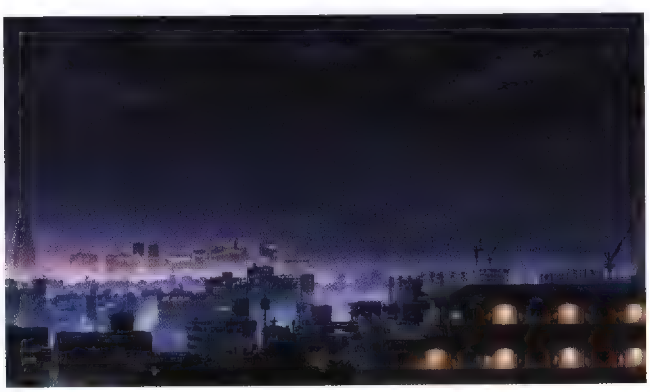


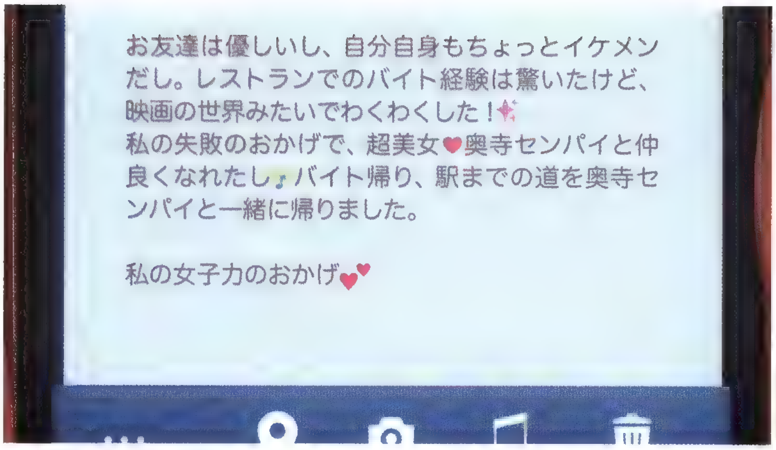
「片想いかな……?」





ふと、三葉のノートに書かれていた「お前は誰だ?」の文字を思い出して、三葉は瀧の手のひらに自分の名前を書き込んだ。







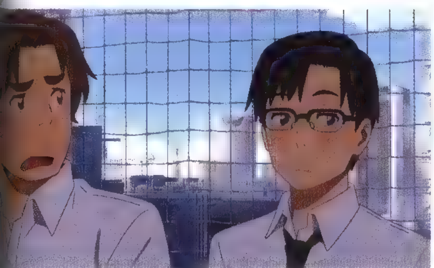


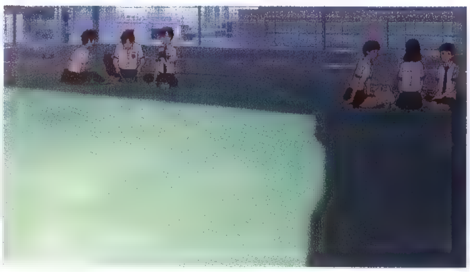
父親との朝の食卓で、奥寺先輩と一緒に帰ったと記されているスマホの日記を見て、瀧は目を丸くする。

「なんだこれ!?」

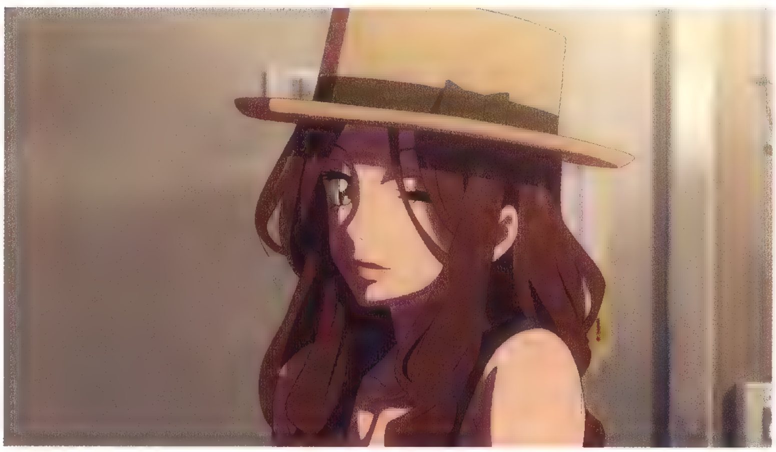


「バイトがある」といって早々に立ち去った瀧を見送って「あいつ、今日は普通だな」と高木がいうと「昨日はなんか……かわいかった」と司がつぶやく。

















昨日、奥寺先輩と一緒に帰っただろうと同僚に詰め寄られる瀧。そこへ奥寺先輩が登場し、瀧に向かって親密そうなウインクを投げかけた。

次の朝、瀧は、もとの瀧に戻っていた。

瀧は、左の手のひらに書かれた「みつは」の文字やスマートフォンに打ち込まれている日記を読んで、驚きの声をあげる。

学校での司や高木、バイト先の奥寺先輩や同僚たちの瀧への反応も、明らかにいつもと違っていた。

何かがおかしい。

この違和感は同じく、三葉も感じていた。

目覚めると、左腕には、瀧によって書き連ねられたメッセージ。

学校にいくと、三葉を見る同級生たちの目が明らかに変わっている。

「昨日のアレは、目立ったもんなぁ」

何があったのか早耶香から教えてもらって、三葉は愕然とする。

陰口を叩く同級生たちを挑発するような大胆な行動をとっていたのだ。

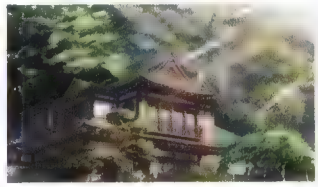
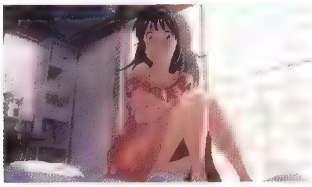
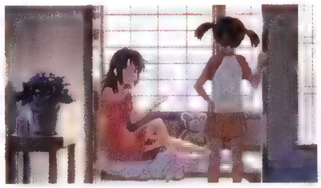
そして、瀧と三葉は気づく。

ふたりは夢の中で入れ替わっていて、今まで夢だと思っていたことのすべては、本当の出来事だったのだ、ということに——。

「今日もよろしくね。ね、たーきくん」

「今日はおっぱい触っとらんにん」



四葉の言葉から推測し、もしかして自分のおっぱいが触られていたんじゃないか、と気づいて三葉は慌てる。







町長選に絡めて三葉を揶揄する会話が耳に入ったため、三葉の中の瀧は、不敵な笑みを浮かべて悪口を言う同級生を見つめながら机を蹴り倒した。



「これってもしかして、本当に……」

「――私、夢の中であの男の子と」

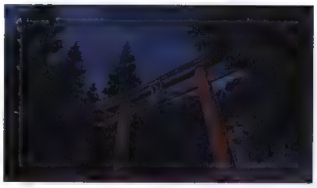
「――俺は、夢の中であの女と」

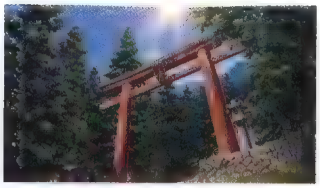
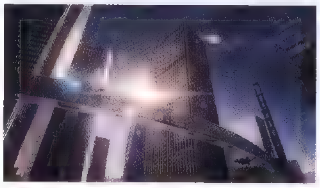
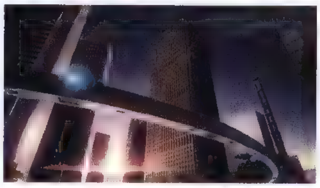
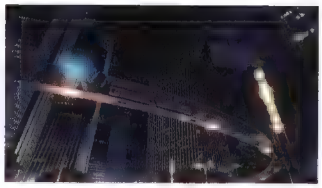
「入れ替わってる!?」





三葉のノートに書き綴られた見知らぬメモ。瀧のスマホに打ち込まれた三葉の東京生活日記。それぞれがそれぞれに気づいて、ハッとするのだった。

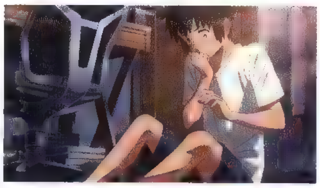


『なにが起きているのか、だんだんわかってきた。
瀧くんは東京に住む
同い歳の高校生で――』




『ど田舎暮らしの三葉との
入れ替わりは不定期で、
週に2、3度、ふいに訪れる。
トリガーは眠ること。原因は不明』






『入れ替わっていたときの記憶は、
目覚めるとだんだん
不鮮明になってしまう』







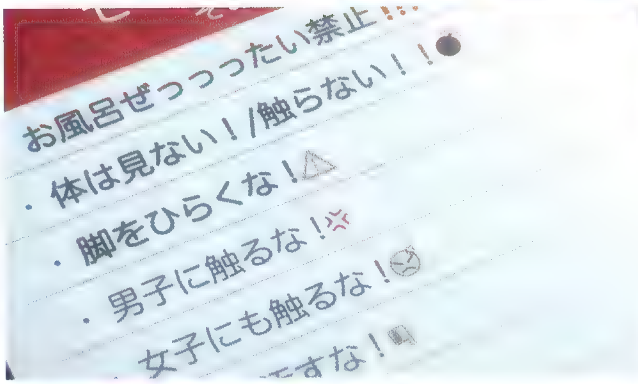


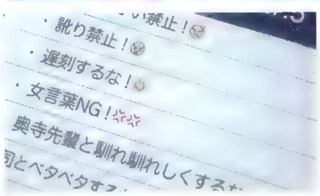



『それでも、俺たちは確かに入れ替わっている。
周囲の反応がそれを証明している。
だから――』



『だから、
私たちはお互いの生活を守るため、
ルールを決めた。入れ替わってしまっている
ときの注意点や、守るべき禁止事項』





『それから、
入れ替わった日の
出来事を携帯に残すこと』











『この謎現象を
とにかく
乗りきるために
協力し合うこと』



『……それなのに、
あの男は！』

『……それなのに、
あの女は！』



『男子の視線、スカート注意！ 人生の基本でしょう?』

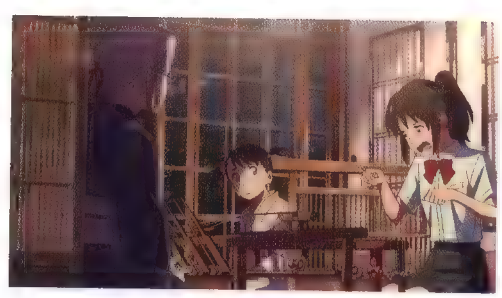


『人の金を無駄遣いすんな!』

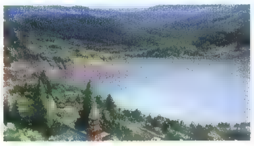


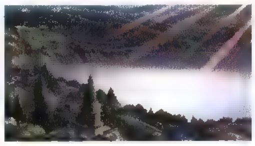
『組紐とか、これ無理だろ!』

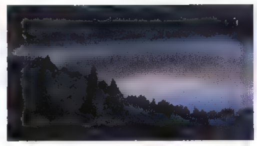
『あなたバイト入れすぎー!』

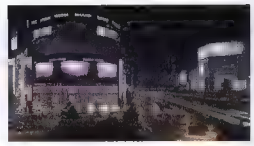










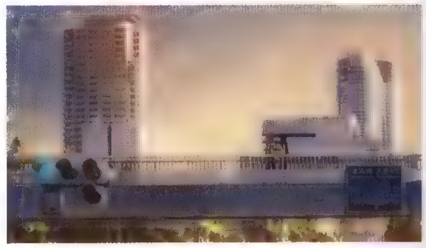




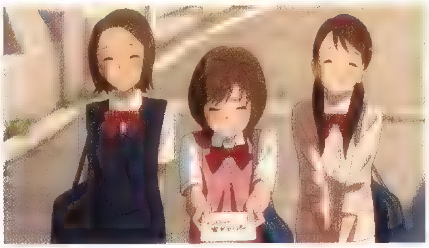
『今日は帰り道に奥寺先輩とお茶。きみたちの仲は順調だよ』



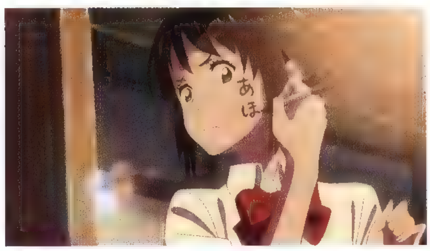
『ちょっと瀧くん、なんで女子に告白されてるの⁉』



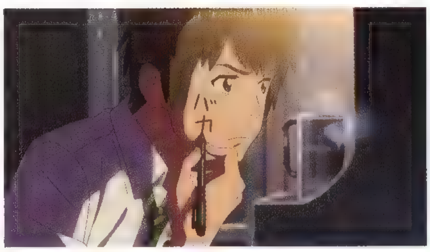
『てめえ二葉、俺の人間関係変えるなよ！』



『お前、俺に人生預けたほうがモテるんじゃね』



『うぬぼれないでよね！彼女もいないくせに』



『お前だって、いねえじゃねえか』

『私は――』

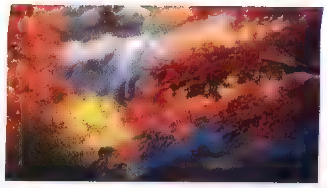


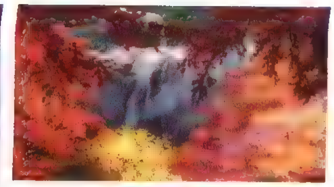


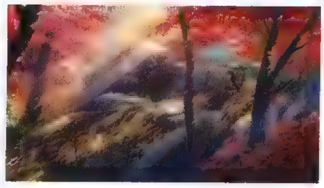
『俺は――』

『いないんじゃなくて作らないの！』

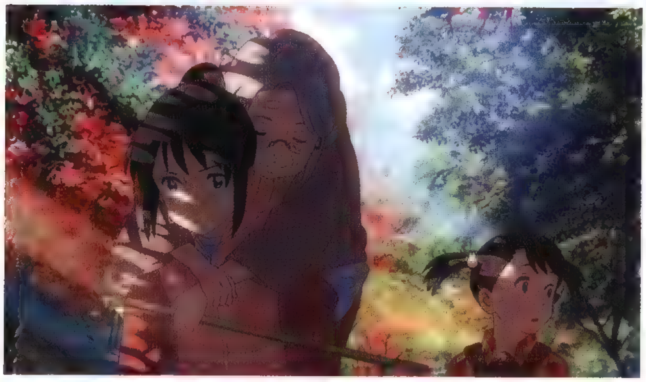




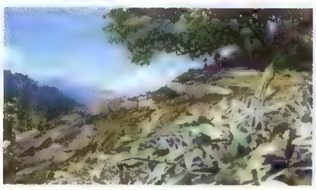


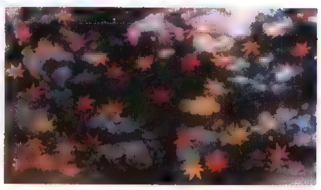


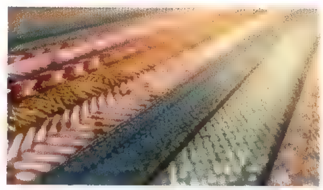
一葉がムスビという概念について話す。氏神様のことを産霊(むすび)と呼び、糸をつなげることも人を繋げることも時間が流れることもすべてムスビで神の力であり、組紐も神の業であり時間の流れそのものを表しているのだ、と。

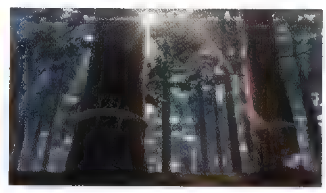


「よりあつまって形を作り、
捻れて絡まって、ときには戻って、
途切れ、またつながり。
それがムスビ。
それが時間」









瀧と三葉は、たびたび入れ替わりながら、自分の生活と相手の生活を交互に過ごした。

そんな日々に慣れてきたある日、三葉に入った瀧は、奉納のために一葉と四葉と宮水神社の御神体へと向かうことになる。

御神体の元は山の上。昔、火事で古文書が焼けてしまったため、その謂れは定かではなかったが、奉納は神様と人間をつなぐ大事なしきたりなのだと、一葉は三葉と四葉に伝えた。

「あんたらの一等大切なもんを、引き替えにせにゃならんよ」

一葉が言う。御神体に供える口噛み酒のことだ。

瀧には何のことかわからないまま、けれど、三葉のことを想いながら従い、御神体へ入っていった。

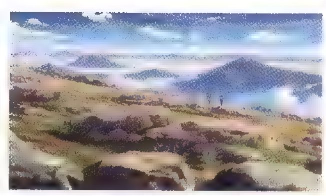
奉納を終えると、あたりは黄昏時になっていた。

「もう、カタワレ時やねえ」

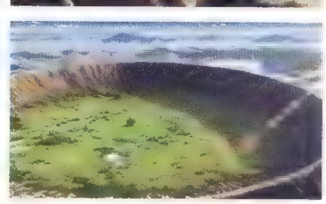
四葉が言った。





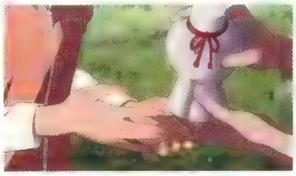
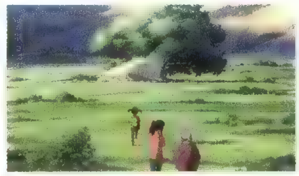






山頂につくとそこはカルデラ状の地形になっていて、小川を越えた中央に、宮水神社の御神体である巨石と巨木が見える。

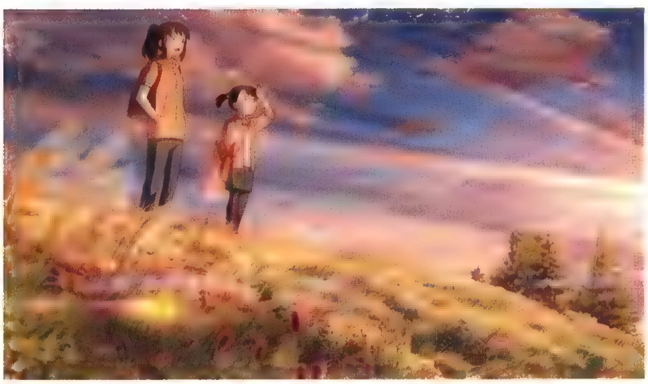
「ここから先はカクリヨ」

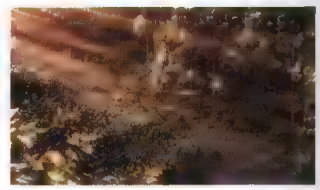





『三葉の、半分……』

口噛み酒は「あんたらの半分」なのだと一葉に言われ、瀧は手の中にある三葉の半分をじっと見つめた。





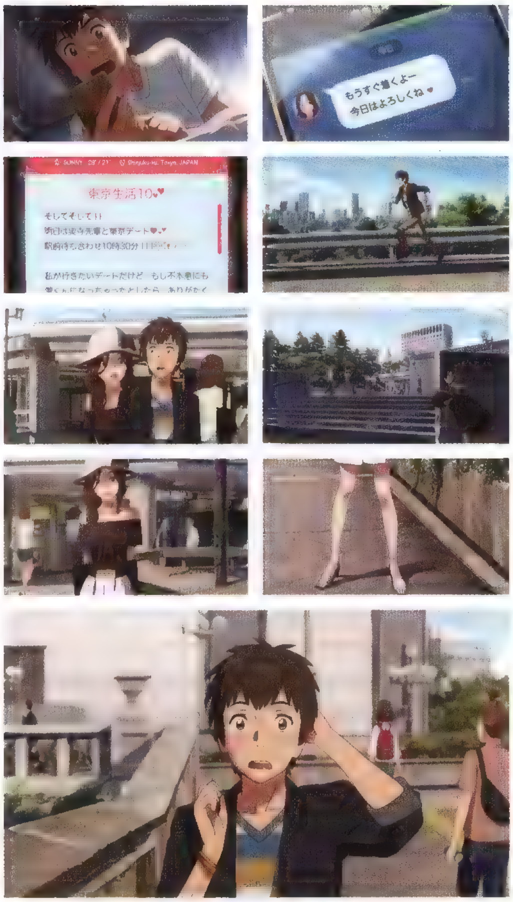

「彗星、見えるかなあ?」と空を見上げる四葉の傍らで、三葉に一葉が声をかけた。まるで三葉の中の瀧を見透かしているような目をして……。



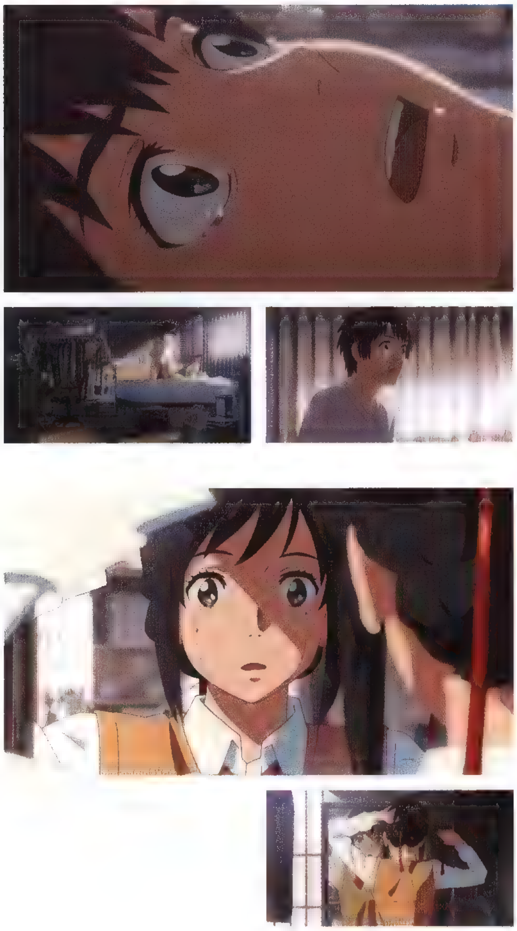
「あんた今、夢を見とるなぁ?」

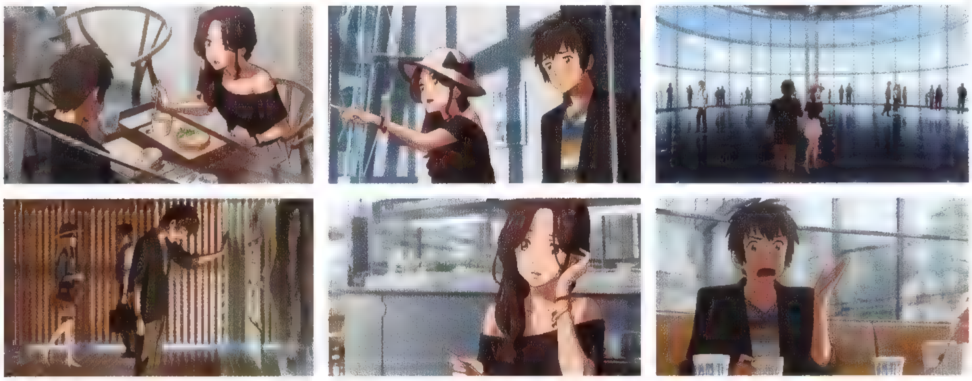


「デートお!?」



大慌てで待ち合わせ場所の駅前に走る瀧。そこに大人っぽく綺麗な奥寺先輩が現れて……。ドキドキしっぱなしのデートがはじまる。





三葉の考えたデートプランをこなしながら、瀧は緊張して、会話を続けられずにいた。三葉はスマホに瀧を助けるリンク集を残してくれていたが、からかうような内容で……。

瀧が目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。なぜか目から涙が零れる。

するとそこへ奥寺先輩からのメッセージが届く。

なんと、三葉が勝手にデートの約束をしていて、もうすぐ待ち合わせの時間なのだった。

いきなりはじまった奥寺先輩との初デート。けれど、会話が続かず……。

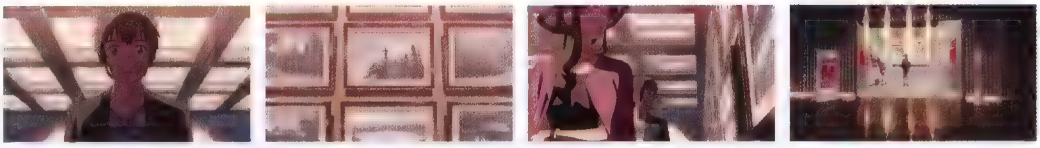
ただ、美術館の中のある展示に、瀧は目を奪われる。並んでいるのは飛騨の写真。それは、三葉が暮らす町に似ていた。

奥寺先輩とのデートは、結局、うまく噛み合わないままで終わった。

帰り道、瀧は、三葉に直接電話しようとして、スマートフォンの中にメモされている緊急連絡先をひらいた。

「会話が、全然続かねえ……」

「今日は、なんだか別人みたいね」







デート中、瀧が心を奪われたのは、奥寺先輩ではなく、飛騨の風景だった。デートに誘ってくれたときとは様子が違う瀧を、奥寺先輩は静かに見つめる。



「きみは昔、私のことがちょっと好きだったでしょ? そして今は、別の好きな子がいるでしょう?」



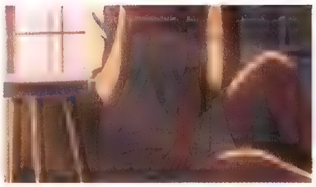
晩ご飯に誘う瀧に、今日は解散しようと告げる奥寺先輩。瀧の心が以前とは違うことを感じた奥寺先輩は、瀧の気持ちを察して伝えるが……。

『デートが終わる頃には、ちょうど空に彗星が見えるね』





スマホのメモに彗星のことを書き込んでいる三葉に「何言ってんだ、こいつ」とつぶやく瀧。それから、おもむろに三葉の電話番号へ発信するが……。





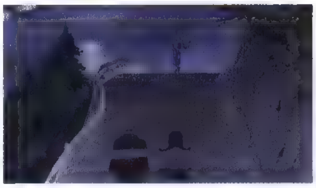

「ヘンかな……？」



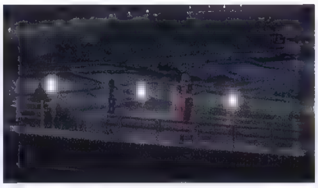




電話での三葉の声が暗かったと心配する勅使河原。そこへばっさりと髪を切った三葉が現れて、早耶香と勅使河原は、驚いて固まった。



三葉の様子に失恋かと動揺して早耶香に耳打ちする勅使河原。三葉は神社へ向かう坂を上りながら、星を見上げて、静かな表情で歩いていた。





スマートフォンが鳴り、三葉が出ると、相手は勅使河原だった。

それは、珍しく学校をサボった三葉の様子を窺う電話だった。

今日は宮水神社の祭りの日であり、千年に一度の周期で巡ってくるティアマト彗星が、一番明るく見えるといわれている日。

それから、三葉は、早耶香と勅使河原との待ち合わせに浴衣姿で向かった。

けれど、その髪はばっさりと切られていて……。

三葉は驚く早耶香と勅使河原になんとなく切っただけと伝えて、神社への坂を上っていった。

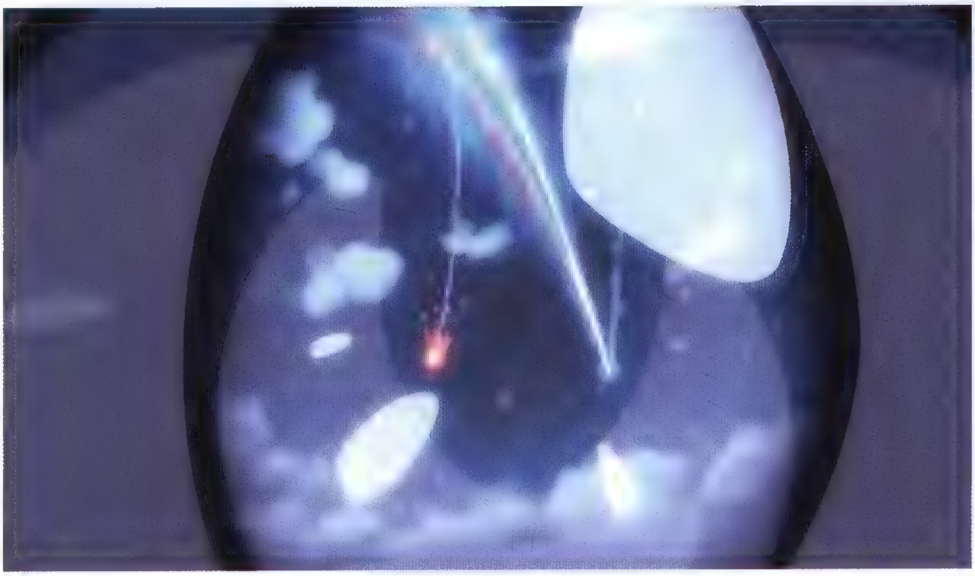
すると、美しい星空に、彗星が輝く尾をひいて流れていくのが見えて――。

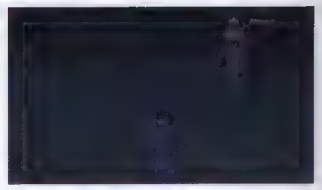


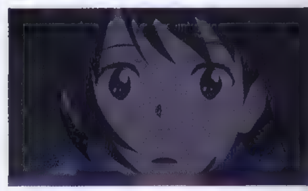


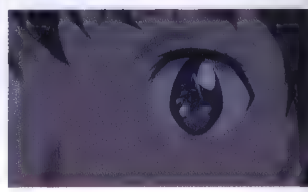
「なあなあ、
見えるよ!」

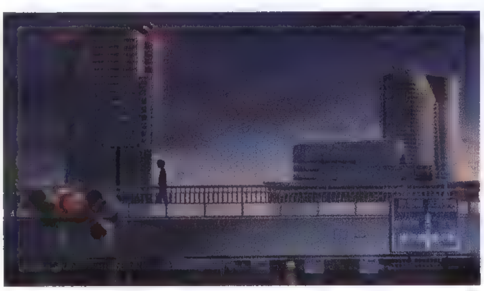














『――この日以降、
なぜかもう二度と、
俺と三葉との
入れ替わりは、
起きなかった』





鉛筆を走らせ、記憶の中の風景をスケッチ。机の上には山岳図鑑や建築系雑誌など三葉の町の手がかりを探す資料でいっぱい。

| your name. | VISUAL STORY |



「なんで……こんなとこにいるんすか!?」



手がかりは町の風景だけと聞いて、驚く司と奥寺先輩。ふたりも一緒に探してくれるはずが、遊んでばかりであまり役に立たず……?

三葉との入れ替わりが途切れた瀧は、三葉のことが気になり、薄れゆく記憶をたぐり寄せて、三葉の暮らす町のスケッチを描き続けていた。

やがて、瀧は三葉に会いに行こうと決心する。もう名前も覚えていない町の、自ら描いた風景のスケッチだけをたよりに……。

ひとり旅のつもりの瀧を東京駅で待っていたのは、司と奥寺先輩。親とバイト先へのフォローを頼まれた司が、勝手に奥寺先輩を誘ってついてきたのだった。

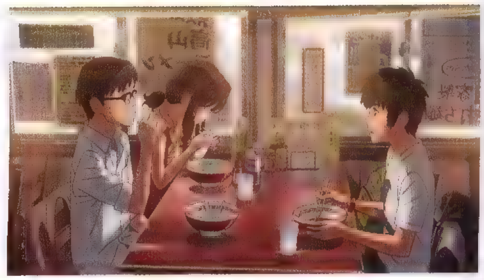
目星をつけていた地域に着いた瀧は、自分が描いたスケッチを取り出して、町の人たちに尋ねてまわった。

有力な情報が得られず、無理かと思いはじめたそのとき、ついに瀧のスケッチの場所を知る人に出会う。

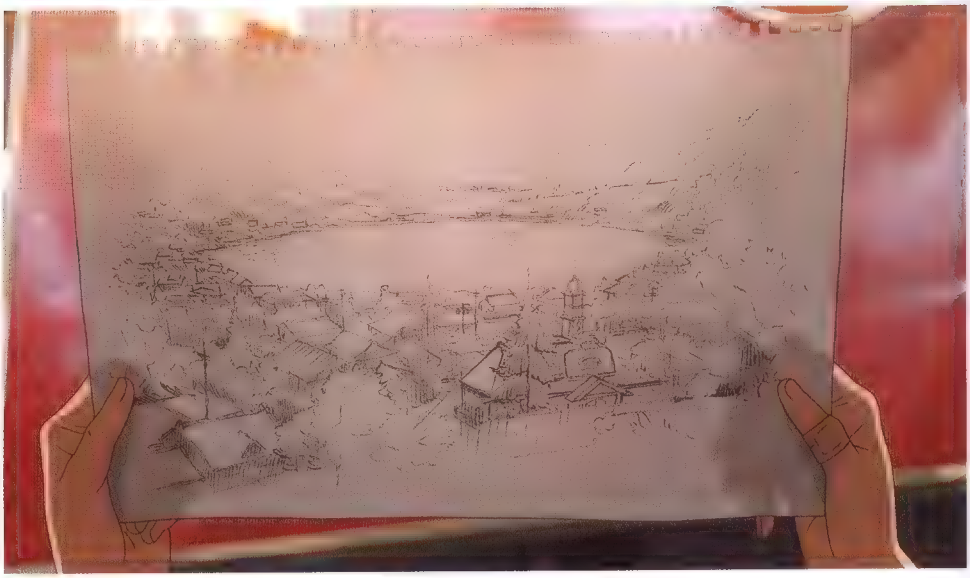
けれど——

三葉の町はもう、この世になかった。

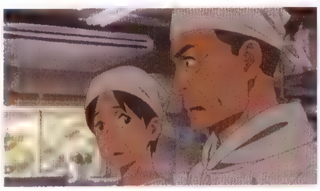




「あんた、糸守ってのは……」







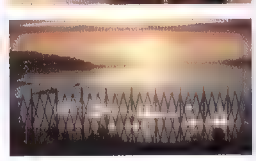
ラーメン店の店主が糸守の出身と聞き、「糸守」という町の名を思い出して「近くですよね？」と瀧は喜ぶが……。









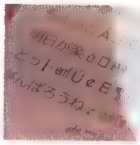


瀧がスケッチした糸守の風景は、そこになかった。あるのは家屋がなぎ倒され、道路が水没し、電車が土に埋もれた荒廃した光景だった。





瀧のスマホに打ち込まれていた三葉の日記は、みるみるうちに文字化けして消えていった。

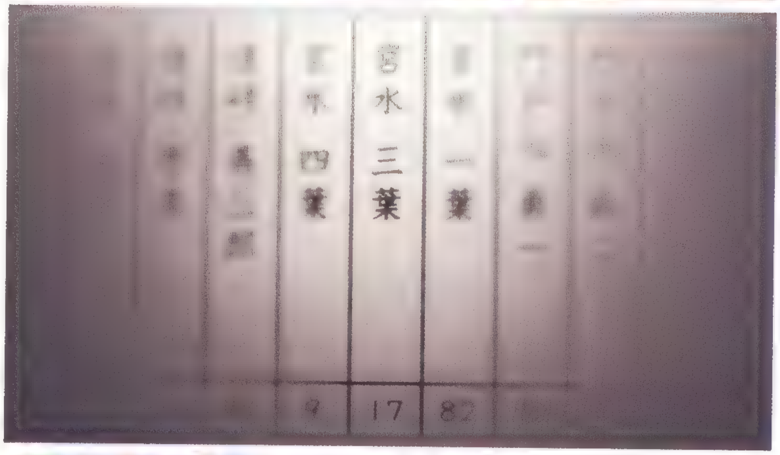


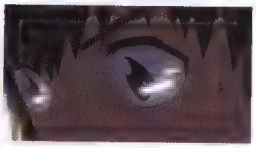


「3年前に……死んだ？」





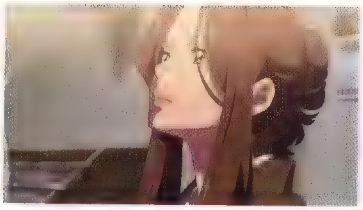


「俺は……何を……？」



1200年周期で太陽の周りを廻るティアマト彗星が地球に最接近したのが3年前。近似点でその核が砕け落下、糸守の災害は起きた。

「きっと瀧くんは誰かに出会って、その子が瀧くんを変えたのよ」





最近の瀧のことが好きだったという奥寺先輩。瀧が言っていることはおかしいが、でも、瀧が誰かに出会ったことは確かなんじゃないかと語る。

3年前、彗星の核が割れその一部が隕石となって地上に落ちる災害が起き、何百人も命を落とした。

その地が糸守だった。

図書館に行き関連書籍を探していく中で、瀧は犠牲者名簿に宮水三葉の名前を見つけてしまう。

スマートフォンにあった三葉が打ち込んだデータもすべて消えて、瀧は、全部ただの夢だったのではないか、景色に見覚えがあったのは、3年前のニュースを無意識に覚えていたからなのでは、と考える。

さらに、三葉の名前さえ、忘れてしまい……。

そのとき、奥寺先輩から手首に巻いている組紐のことを問われて、瀧はハッとする。

そして、「あの場所なら」と宮水神社の御神体のことを思い出した。

早朝、瀧は司と奥寺先輩と一緒に泊まっていた宿をひとりで出て、彼の地へ向かった。



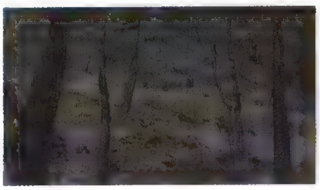






一葉から聞いた組紐と時間の話や山の上の御神体のことを思い出し、旧糸守町の地図を広げて場所を探る。

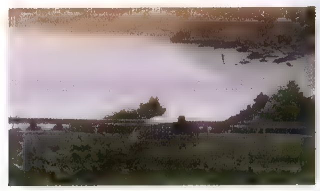






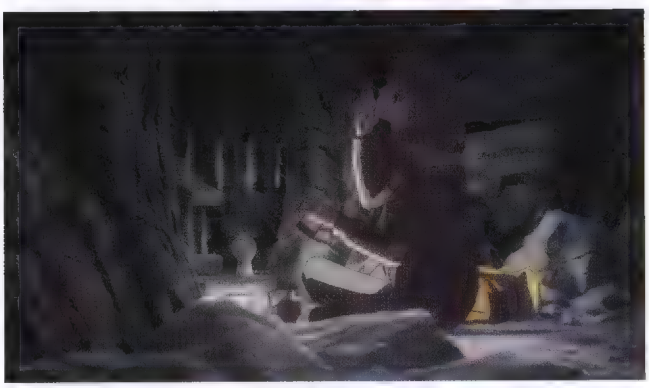
ラーメン店の店主に車で送ってもらう瀧。店主は瀧のスケッチを褒め、多くを語らず、弁当を渡してくれた。

「あんたの描いた
糸守、
あらあ良かった」



山を登ると、記憶の通り、その場所はあった。夢じゃなかった。瀧は御神体の元へ入り、そして、三葉の口噛み酒を口にした。



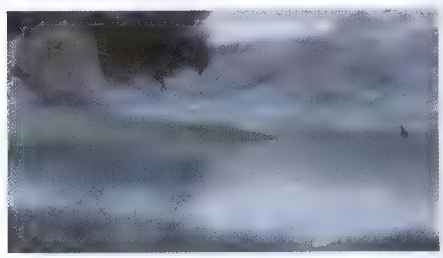






「あいつの、半分……」

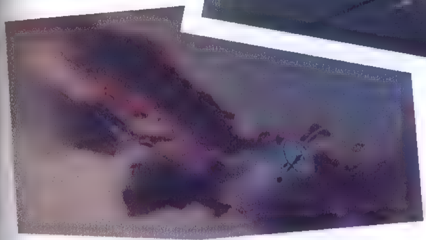








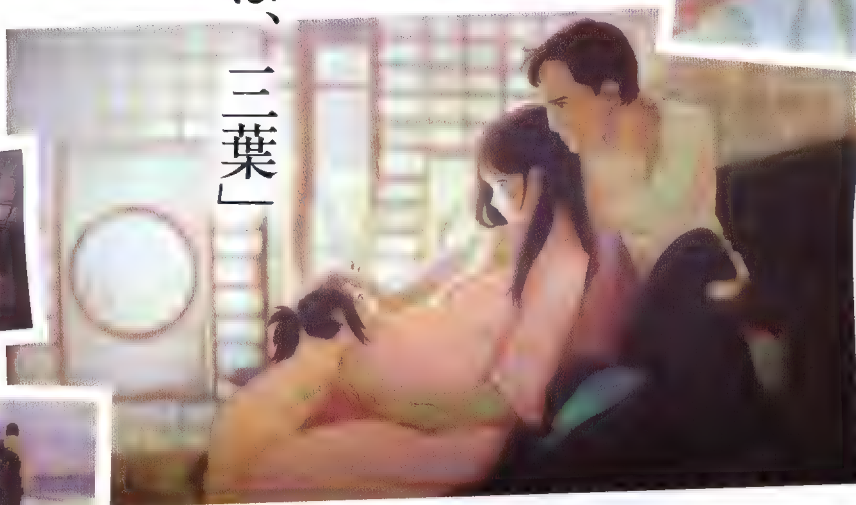








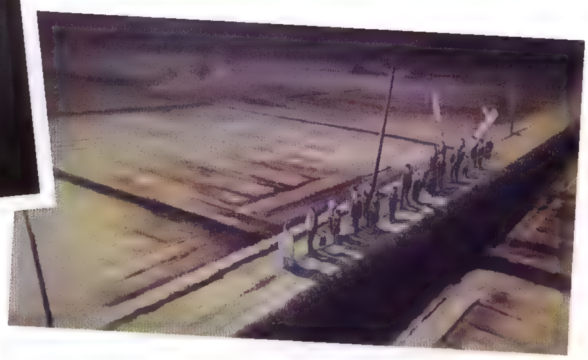
「名前は、三葉」











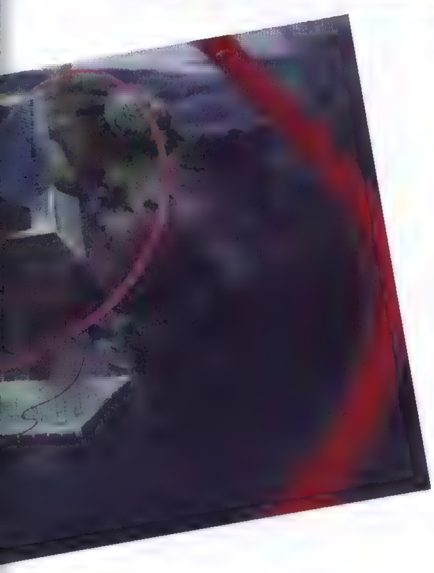
三葉の口噛み酒を口にした瀧は、足を滑らせて倒れ、その衝撃とともに、美しい幻影の中に落下していった。

それは、御神体の天井に描かれていた彗星にまつわる壁画から発せられたヴィジョン。三葉の誕生、三葉の成長、四葉の誕生、三葉の母親の死、三葉の父親の嘆き。それから、瀧と夢で入れ替わったあとの、三葉の表情が連なっていった。

三葉は、瀧と奥寺先輩のデートの日に自分でも知らぬ間に涙を流して、東京に向かっていた。そして、東京から戻った三葉は、一葉にばっさりと髪を切ってもらっていた。

そして、そんな三葉に、糸守に、彗星が迫っていた。

「いいなあ。今頃ふたりは一緒かあ……」





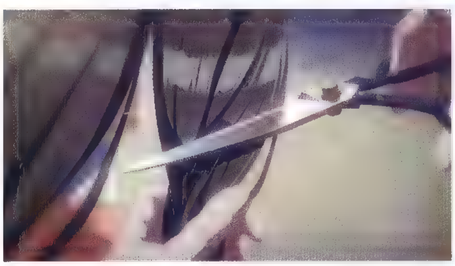


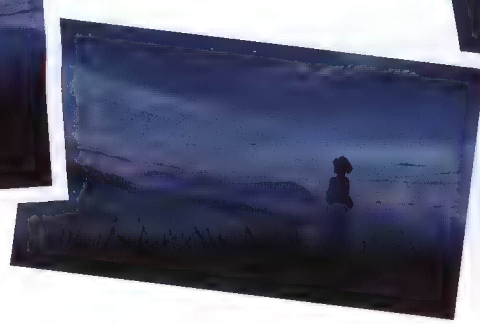
「三葉！ そこにいちゃダメだ！」



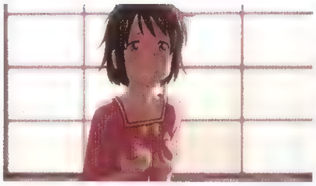
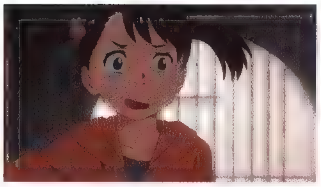


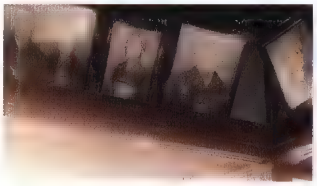
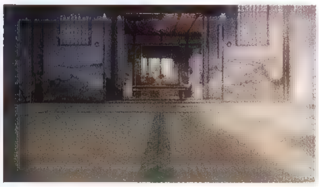
「おばあちゃん、
お願いが
あるんやけど……」



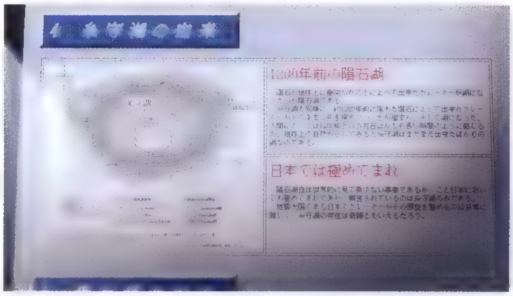



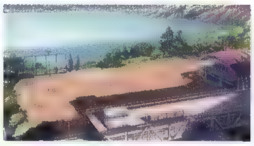
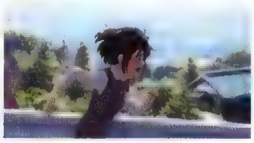

「……三葉だ……生きてる……！」


一葉は、三葉が三葉ではないことを見抜き、自分も少女のころ不思議な夢を見ていた覚えがあると話した。

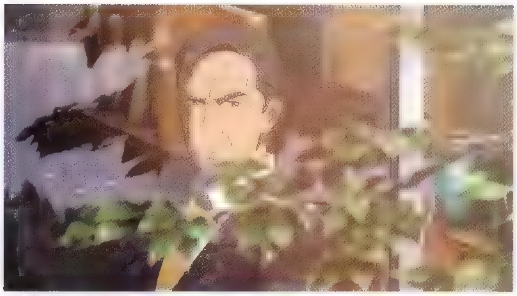





「このままだと今夜、みんな死ぬ！」

町を救うために、早耶香は避難指示の放送、勅使河原は変電所の爆発事故と山火事を装うための爆薬の仕かけを担当することになった。


「妄言は宮水の血筋か……」

町の危機を語る娘を病気だと言い切る三葉の父。「バカにしやがって！」瀧が詰め寄ると、父は問う。「おまえは、誰だ？」

目が覚めると、瀧は、口噛み酒の力で三葉と入れ替わっていた。

確かにある三葉の身体に安堵し、涙を溢れさせる。

日付は彗星が落ちた秋祭りの日、その当日。

「まだ、間に合う！」

瀧は、駆け出す。

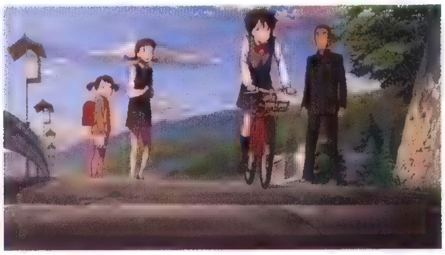
学校に行き、早耶香と勅使河原に協力を仰ぎ、町のみんなを避難させる方法を考えた。思いついたのは、変電所の爆発事故による山火事を装い、防災無線を乗っ取って、学校の放送室から避難指示を流すという作戦だ。

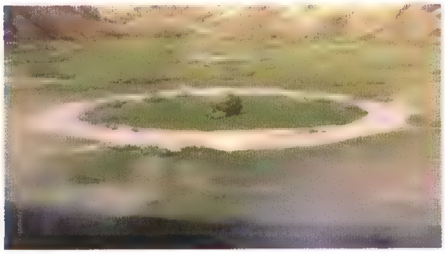
並行して瀧は、真正面から町長である三葉の父親に避難指示を出すよう頼みに行く。けれど、町長は娘の話を信じないどころか「おまえは、誰だ？」とまで言われてしまう。

自分では説得できない？

焦りが募る中、四葉に会い、昨日三葉が東京に行ったことを聞き、瀧は考え込んだ。

そして、そのとき瀧は、御神体のある山の方向に三葉の存在を感じて――。





御神体の方角から何かを感じて、ハッとする瀧。勅使河原の自転車を借りて、彼の地へ向かった。

「そこにいるのか?」











瀧と入れ替わって目覚める三葉。なぜここに瀧がいるのか疑問に思いながら御神体を出ると、そこにあるはずの糸守の町がなくて……。

「ああ、町が……ない!?」



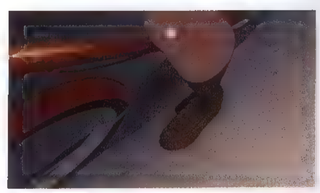




「わたし、ちょっと東京行ってくる」



「瀧くん、瀧くん。覚えてない?」



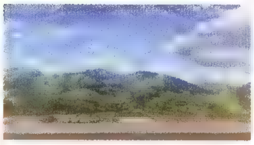


『……会えっこ、ない』

『でも、確かなことが、ひとつだけある』

『わたしたちは、会えばぜったい、すぐにわかる』







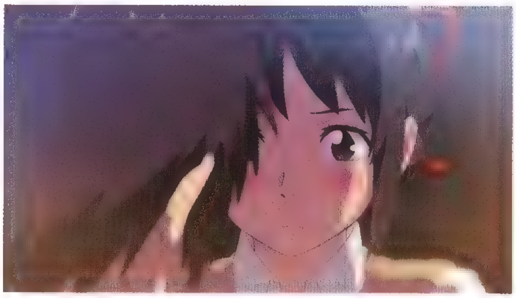

三葉として来るのははじめての東京。あてもなく歩きまわりながら、瀧の姿を探す。





『わたしに入っていたのは、きみなんだって』

『きみに入っていたのは、わたしなんだって』








電車の中に瀧を見つけて、乗り込む三葉。目の前で単語カードをめくる瀧に勇気を出して声をかける。「覚えて、ない……?」




「誰、おまえ?」

あの日、彗星が落ちる前の日、瀧が奥寺先輩とデートをすると思っていた日、三葉は東京に向かっていた。

連絡がつかないまま、会えっこないと思いながら、それでも、瀧と三葉、ふたりの間にある確かなものを信じて、東京を歩きまわった三葉。

そして、ついに、ホームに滑り込んできた電車の中に瀧の姿を見つける。

けれど、声をかけた瀧は、三葉のことがまったくわからない様子だった。

ショックを受けた三葉は、次の駅で降りようとする。

そのとき、瀧に名前を尋ねられて、名乗りながら三葉は髪を結っていた組紐を瀧に渡した。

それは、瀧にとって、三葉のことを知る由もない3年も前の出来事だった。

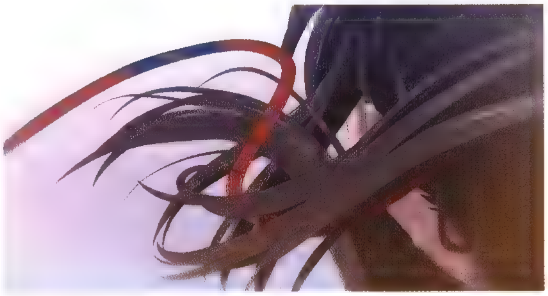
「あんたの名前！」







三葉はいたたまれなくなって電車から降りようとする。けれど、その背に瀧が声をかけた。



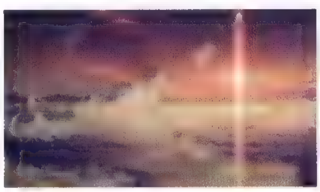
「名前は……」





……みつは！」

『3年前、お前はあのとき、俺に、会いに来たんだ……！』





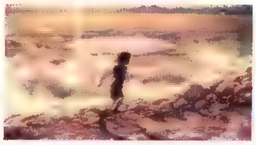
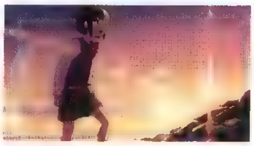


東京にまで会いに来てくれていた三葉の想い、そして、3年前ふたりはすでに出会っていたという事実に、瀧の胸が締めつけられる。




三葉を呼ぶ声を感じて、ハッとする瀧の中の三葉。お互いの気配と声を感じて、見えない相手を必死に探すふたりを、夕暮れが包み込む。



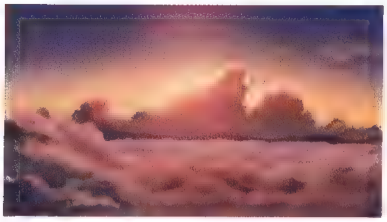
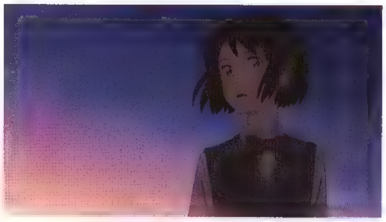










「カタワレ時だ……」


瀧の入った三葉が御神体のある地に近づくと、三葉の入った瀧もまた、その気配を感じた。

「三葉、いるんだろ?」

「瀧くん、どこなの?」

3年という時の隔たりを超えて、互いに互いの存在を感じながら、ふたりは接近していく。

そして、カタワレ時がやってきた。

互いの姿が目の前に現れて、入れ替わっていたふたりの心と身体も元に戻った。

「瀧くんがいる」

泣きじゃくる三葉に、瀧は優しい微笑みを漏らした。

「大変だったよ。おまえ、すげえ遠くにいるから」

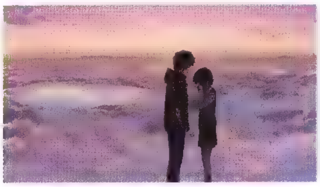
瀧は3年前に三葉にもらった組紐を渡した。今度は三葉が持っていて、と。

三葉は、彗星の災害から糸守を守る作戦を瀧から引き継ぎ、決意を固めた。

それからふたりは、カタワレ時が終わる前に、互いの手のひらに名前を書きあおうとする。

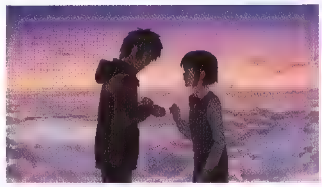
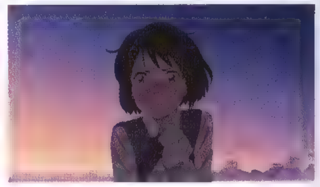
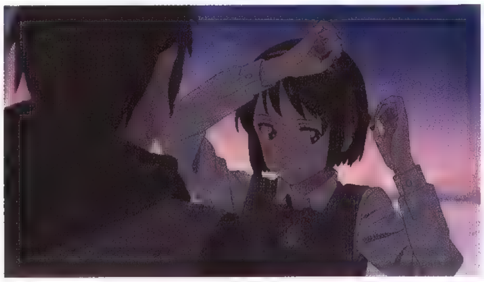
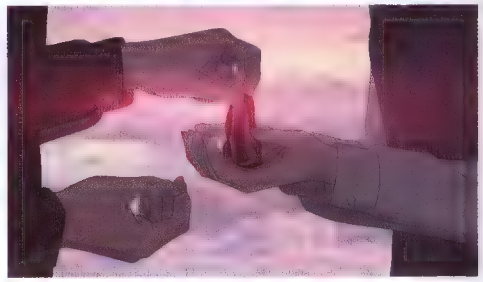
目が覚めても大切な人の名前を忘れないように——。

「お前に、会いに来たんだ」



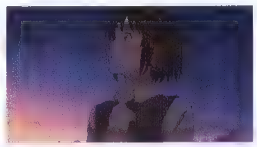


どうやって時を戻したのか問われて、瀧が三葉の口噛み酒を飲んだと答えると、三葉の顔は真っ赤に。「ばか！ ヘンタイ！」

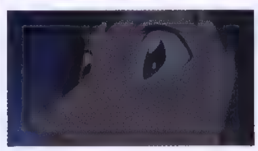
瀧の手首に巻かれていた組紐は、今度は三葉の髪飾りに。「どうかな？」と聞かれて、瀧は返答に困る。

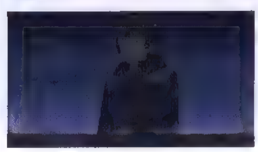
「大事な人。忘れたくない人。忘れちゃダメな人」










瀧が三葉の手のひらに文字を書き込み、三葉も同じように書こうとするが、その瞬間、カタワレ時が終わり、三葉の姿が消えた。

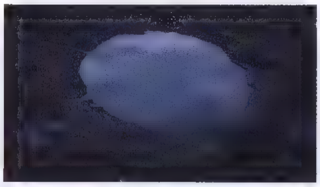


「誰だ、誰だ、誰だ？名前は……！」

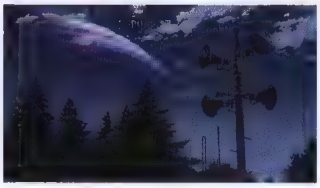
あの彗星が落ちるのか？　と問われて、この目で見たと答える三葉。勅使河原はそんな三葉を信じて力強く言う。「じゃあ、やるしかないのお！」





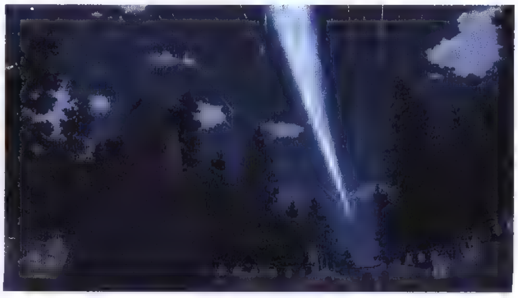
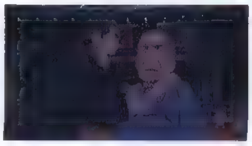







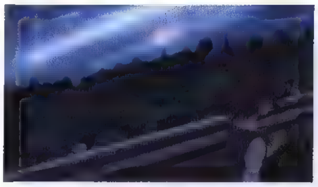
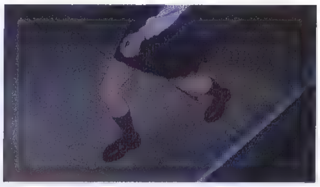
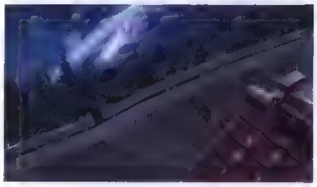


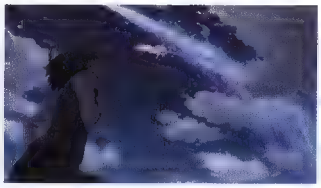



彗星がふたつに割れて、その周囲に無数の流星が発生。想定外の壮麗な天体現象に世界中が注目している。

「大事な人。忘れちゃダメな人。忘れたくなかった人。誰、誰……きみの名前は……！」



三葉は、走り出す。

もう、自分にできることをやるしかない。

作戦の準備を整えてくれていた勅使河原と合流して変電所を爆破。停電し非常用電源に切り替わったところで防災無線をジャック。早耶香に山火事に見立てた避難指示の放送を流してもらう。

電気が消えて真っ暗になった町の空に、彗星が輝く。

そして、三葉と勅使河原はさらに秋祭りに集う人々に直接避難を促した。

けれど、とても間に合わず、しかも、電波ジャックをつきとめられ早耶香の放送も止められてしまった。

三葉は、消防団を動かすために町長である父親のもとへ懸命に走った。ただ、その渦中で、大切な人の名前を忘れてしまっていること、彗星が迫っていることの焦りと恐怖が三葉にのしかかっていく。

でも……

挫けそうになった瞬間、大切な人が三葉の手のひらに書いた文字が目に入る。

「すきだ」

大切な人からの大切な言葉。

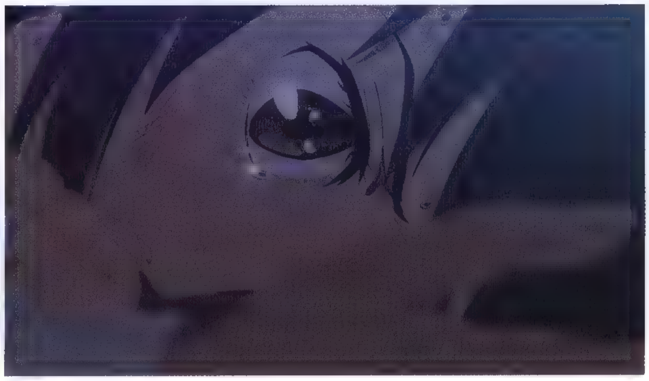
三葉は、立ち上がった。

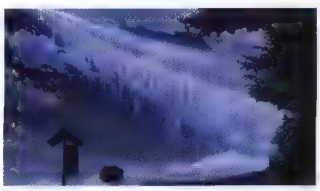


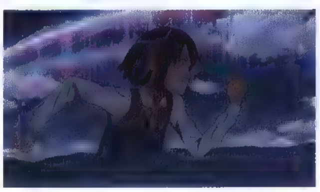


「これじゃあ、名前、わかんないよ……」

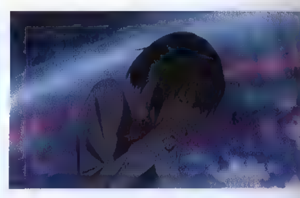


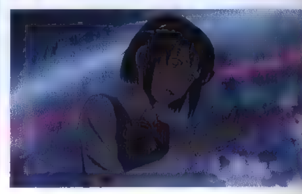




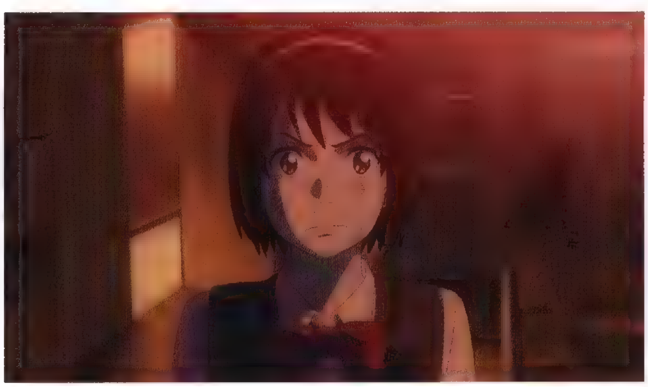






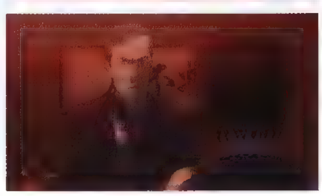


名前が書き込まれていると思って開いた手のひらには告白の言葉が書かれていた。三葉は沸き上がる力を感じて、再び走りだした。





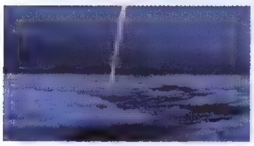


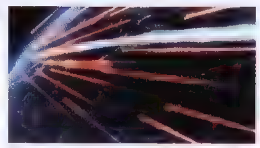
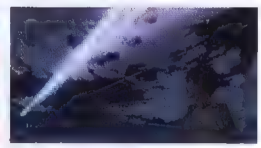


父のもとに着くと、そこには一葉と四葉もいた。三葉は、父に歩み寄り、ふたり分の力に満ちた強い表情で真っ直ぐに父に向き合った。

「——それは、
まるで夢の景色のように、
ただひたすらに、美しい眺めだった」














三葉との逢瀬をはたした地で目覚めた瀧は、すべてを忘れてしまっていた。右手に三葉が書きかけた一本の線が残るだけだった。「俺、こんな場所で何やってんだ?」

彗星は美しく輝き空を流れ、その欠片が隕石となって地上へ落ちた。

そこは、糸守町。

直撃を受けた宮水神社一帯は一瞬で壊滅し、その衝撃波でまわりの集落も土地ごと吹き飛ばされた。

それから数年が経った。

大学生になった瀧は、相変わらず仲の良い司や高木とともに就職活動に勤しんでいた。

ずっと何かを探している。

そんな気持ちに取り憑かれながらも、瀧の記憶には何も残っていなかった。

ただ、彗星をめぐって起きた出来事にひどく関心を引かれていた時期はあった。

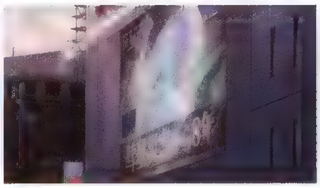
それは、彗星の片割れがひとつの町を壊滅させたが、しかし、町の住人のほとんどが無事だったという奇跡のような一夜。

けれども、もうその興味さえゆっくりと消えていった。






高校時代にもよく来ていたカフェに集う3人。高木は内定2社、司は8社。だが、瀧はまだどこからも内定がもらえていない。

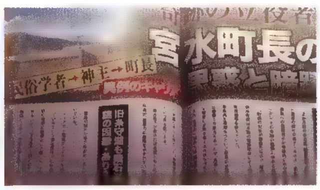





仕事で近くに来たという奥寺先輩に呼び出された瀧。奥寺先輩は、5年前、瀧と司と3人で糸守に行ったことを思い出して話した。

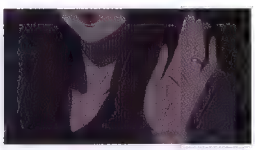
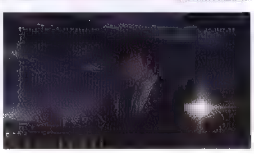




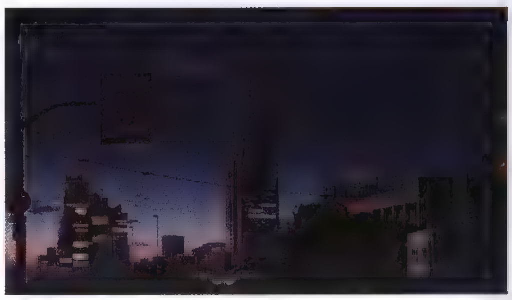


彗星の災害があった日、糸守は、偶然にも町を挙げての避難訓練をしていて町民大半が被害範囲外の場所にいた、と報道された。

婚約指輪を光らせて、瀧に手を振る奥寺先輩。見送ったあと、瀧はふと、右の手のひらを見た。そこに何かの不在を感じていた。

「きみも、いつかちゃんと幸せになりなさい」



「……ずっと何かを、
誰かを、
探しているような気がする」





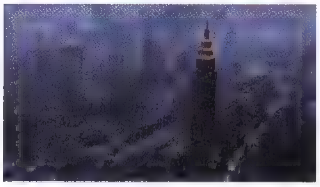





ブライダルフェアの話をするカップルの会話の中に「テッシー」という単語が聞こえて、ハッとする瀧。振り返ったときには彼らはもういなかった。



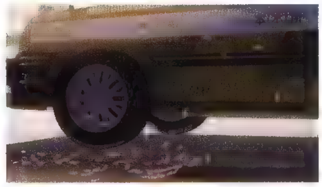
「今はもうない町の風景に、
なぜこれほど、
心を締めつけられるのだろう」




秋から冬になり、そして、春が来る。
瀧は、何かに触れるたび、微かに心を揺らして、また、いつもの日々に戻っていった。そんな自分に慣れながら、社会人になった。
だから、その日も、いつもと同じ日だと思っていた。
朝起きて、家を出て、会社に行って、仕事をして、帰って、寝る。
けれど、本当はずっと思っていた。
あと少しだけ——。
そして、唐突に、その瞬間が訪れた。

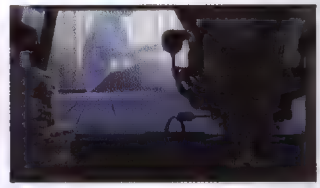







糸守町の住人たちは、都心に移住した者も多い。小学生だった四葉も高校生になり、三葉の高校時代の同級生たちも社会人になっていた。





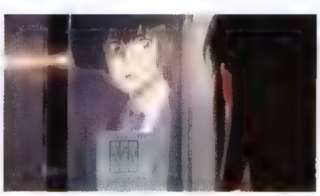




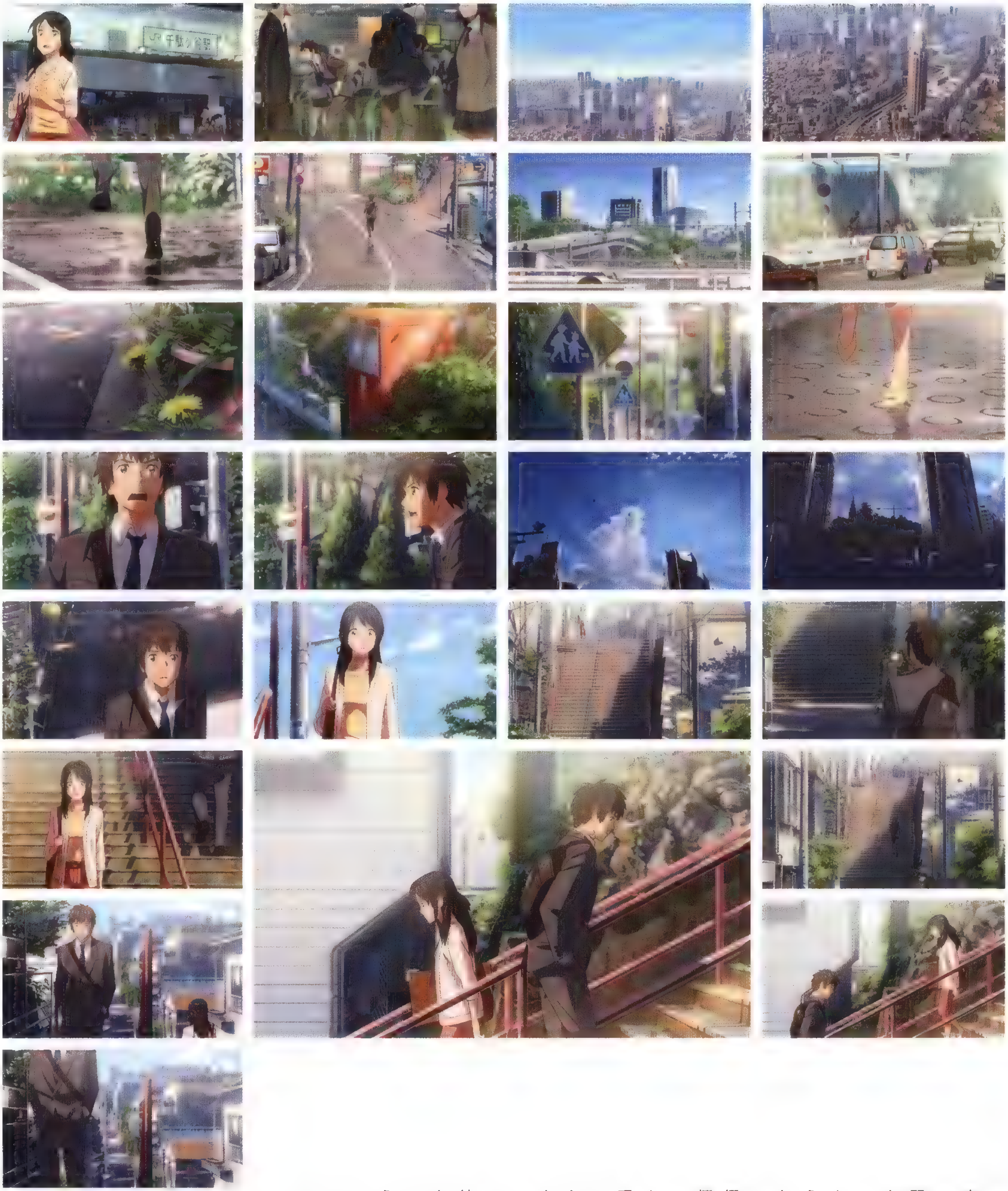
瀧も三葉も、毎朝、鏡で自分の顔を見るとき、なぜか、その奥に誰かの面影を探してしまう。

「ずっと、
誰かを……
探していた！」







逆方面にすれ違っていく電車の中に「あの人」がいた。
ガラス越しに目があった瞬間、瀧と三葉は互いに目を大きく見開いた。
ふたりは自分の乗る電車がホームに着くと、弾かれるようにそれぞれの電車を飛び出した。
忘れていた、でも、ずっと探していた「あの人」の姿を探して、街を駆ける。
そして、もうなんの隔たりもない目の前に「あの人」が現れた。
ただ、どうしていいかわからないふたりは、目を伏せたまま、通りすぎようとする。
それでいいわけがない。
だから、瀧は、勇気を振り絞って声をかけ、三葉もそれを待っていた。
やっと逢えた。やっと出逢えた。
ふたりは同時にひとつの問いかけをする。
君の名前は——と。




奇跡のような出来事に信じられない気持ちと、身体の内側にある確かな感覚がない交ぜになって、涙が溢れ出す。




「私も！」





「……あの！俺、きみをどこかで！」



「きみの、名前は……？」



入れ替わりから見えてくる面白さ
〈とりかえばや〉のサブテキスト

入れ替わりの物語の起源は、古典『とりかへばや物語』。
『君の名は。』を作るに当たって、さまざまな〈とりかえばや〉に触れたという
新海監督が参考にした同テーマの作品をご紹介。

取材・文＝渡辺水央



ぼくは麻理のなか
押見修造
アクションコミックス 双葉社



とりかへばや物語
鈴木裕子／編
角川ソフィア文庫



（『祈りの海』所収）
貸金庫
グレッグ・イーガン／著
山岸 真／編・訳
ハヤカワ文庫SF



らんま1／2
高橋留美子
小学館

古典の『とりかへばや物語』は入れ替わりの代名詞のような作品だが、男女が立場を取り替えて育てられるだけで中身が入れ替わっているわけではない。

今回、新海監督は最初の企画案から〈とりかえばや〉という言葉を使っていた。男女がスイッチする物語を作るに当たり、いろいろな本や映画を参考にしたそうだ。そこで監督が思ったのは「ジェンダーの差異の話にはしない」ということ。

「今は男らしい女の子も女らしい男の子も普通なので、とりかえばやをジェンダーの差異の面白さで見せることが成り立ちにくいと思うんですよね。その中で『ぼくは麻理のなか』（押見修造）は女子高生になってしまった冴えない大学生が彼女を取り巻く環境をのぞき見る話になっていて、その面白さのほうが共感性があるなと思ったんです。むしろ『らんま1／2』（高橋留美子）のような、ひとりの人が別の人間になるスイッチの面白さや、お互いの身体を通じてお互いの見ている風景を感じて、そこでお互いを知るというところがポイントになればいいな思いました」（新海監督談）

加えて参考にしたのは、グレッグ・イーガンという小説家の『貸金庫』という短編。朝起きる度に違う人間になっているという物語で、韓国映画の『ビューティー・インサイド』も共通するものがあると思って観に行ったそうだ。映画を楽しむためのサブテキスト。ぜひさまざまな〈入れ替わり〉を楽しんでみてほしい。



SPECIAL CROSS TALK

監督インタビューをはじめキャストインタビュー、スタッフインタビュー、対談など、盛りだくさん。
作品の魅力を全方位で語っていただきました。

[立花 瀧]　[宮水三葉]

神木隆之介×上白石萌音

対談

主人公の瀧と三葉を演じた、神木隆之介と上白石萌音から見た『君の名は。』。
瑞々しくもしっかりとした考えを持ったふたりが語ってくれた、お互いの声と芝居、そして本作とは？

取材・文＝渡辺水央　撮影＝首藤幹夫



それぞれの声の印象と男女演じ分けの難しさ

瀧と三葉を演じつつ、それぞれ三葉にも瀧にもなって、夢の中で入れ替わる少年少女を1人2役で演じ上げた神木隆之介と上白石萌音。今回が初共演だったふたりも、それこそ瀧と三葉さながらにアフレコを通じて打ち解けていき、話せば笑いの絶えない間柄に。初対面は特報の収録。その振り返りから、役の話、作品の話までを語ってもらった。

神木　『君の名は。』の特報の収録のときに初めてお会いしたんです。初対面なので「どうも……」という感じで、お互い恐る恐るで。

上白石　神木さんの作品はずっと見させていただいていたので、私としては〝神木さんって本当にいたんだ！〟って。緊張しました（笑）。

神木　本当にいますよ！　普通にその辺にいますから（笑）。僕はそのときに上白石さんの声を聞いて、〝これは新海作品ファミリーの声だ〟と思ったんです。新海監督の世界観にぴったりな透き通った声で、これはヒロインの声だなと思いました。自分が新海監督の作品を声で表現できるかどうか不安だったので、正直少し焦りました。

上白石　そんなそんな！　私こそ焦りました。神木さんの声を聞いて、その第一声で心をわしづかみにされてしまって。やっぱりすごい、やっぱり天才だなって思いました。

神木　何にも天才じゃないよ（笑）。

上白石　神木さんは普段の声とお芝居のときの声とでは、ガラッと変わるんですよ。しかもスッとキャラクターや世界観に入られていて、集中力が違うなって思いました。声に聞き惚れてしまって、自分の次のセリフを言うまで間ができてしまったり

して。神木さんの声にも、映像にも圧倒されっぱなしでした。

神木　合間にふたりで「いい映画だね」と言っていたよね。

上白石　ほぼ初めてくらいの会話が、「早く観たいですね」「公開は8月かぁ。まだ先ですね」って（笑）。

神木　「初回限定DVD絶対買うよ。僕たちがこれからこの声を演じるのか⁉」と話していました（笑）。

上白石　つい見入ってしまうんだけれど、やるのは私たちで。そのやりとりを何回もしましたよね（笑）。今回、私はオーディションで三葉役に選んでいただいて、特報を録り始めて本当に私が演じさせていただけるんだってやっと実感することができて。監督がディレクションしていて、ブースの隣に神木さんがいて、本当に始まるんだ、しかもものすごいものが始まるんだって身震いする感じがありました。それでさらに時間を置いて、本編の収録も始まって。最初は緊張しましたよね。

神木　しましたね。しかも中身が三葉になっているときの瀧からアフレコが始まったので、よけいプレッシャーでした。合間に共演させて頂いた声優の方々と雑談させていただいたのですが、そこで「考えてみればまだ男の子としての地声の芝居をやってないんです」という話になって（笑）。三葉を演じていても声帯はあくまで瀧なので、あまりに高すぎても違うと思ったんです。瀧の雰囲気は絶対に残しておかないといけない。そのうえで入れ替わりのギャップも出さないといけなかったので、難しかったです。

上白石　すごく差が出ていて、すごいなと思いました。

神木　よかったです！　そのようなお芝居もアニメーションならではで、楽しい経験ですよね。今思えば、三葉になっている瀧を最初に演じさせてもらえてよかったです。瀧の地声とのバランスも組み立てやすかったですし、少し恥ずかしいお芝居から入ったことで、一気に緊張も吹き飛んだ気がします（笑）。

上白石　私も第一声は瀧になっている三葉だったんですけど、神木さんとはまったく逆で、最初は緊張してばっかりで。声のお仕事っていうだけで私にとっては怖いのに、収録が初っ端から男言葉で、しかも映画の冒頭の部分だったのでどうしようって。演じていて、やっぱり入れ替わりのときのお芝居は難しかったし、今までにない経験でもあるのですごく楽しかったです。自分にとっては未知の世界なので、街で男子高校生を見かけると、話し方や雰囲気を観察したりしてましたね（笑）。あとは神木さんのアフレコを見学させていただいたりもして。瀧になるということは神木さんになるということでもあるので、神木さんの出演作を見て、話し方の研究もしました。

神木　上白石さんに、「男らしい役を演じている作品で参考になるものはありますか？」と訊かれて、2日間くらい悩みました（笑）。最近は幕末で戦ったりとか（『るろうに剣心 京都大火編／伝説の最期編』）、時を止めて暗躍したりとか（『SPEC～警視庁公安部公安第五課 未詳事件特別対策係事件簿～』シリーズ）、特殊な役が多かったので考えてしまって（笑）。結局、『11人もいる！』を薦めました。

上白石　はい。『11人もいる！』は放送されているときにも好きで観ていたんですよ。でも今回は、神木さんの男の子っぽさに注目しながらまた見直して。特に叫ぶところをどう演じたらいいのか悩んでいたので、勉強させてもらいました。

神木　僕も三葉になっている瀧を演じるに当たって、上白石さんが演じたらこういう風になるんだろうなと思う表現は取り入れました。また、男子から見てかわいいなと思えて、女子にも共感してもらえるような言い方やトーンを意識しました。

上白石　それで言うと、私は神木さんがやる三葉を参考にさせてもらったところもあります。神木さんのしゃべり方を聞いて、勉強させていただいて。女の子の部分でも実はすごく助けてもらいました（笑）。

瀧と三葉の人物像と魅力をお互いの目から見ると？

上白石　瀧くんはめちゃくちゃカッコいいですよね。アフレコをやっていたときに、スタジオにいろんなアニメ雑誌が置いてあって見ていたんですけど、どの主人公よりも瀧くんのほうがカッコいい！って（笑）。半ば瀧くんに対する三葉の気持ちになっていたのかもしれないですね。一本しっかりとした芯が通っていて、あと機転も利いて頭がいい。一度見た景色を忘れないでいて、ちゃんと道をたどれるところなんてすごいなって思います。頼れる存在で、すごく素敵な人だなって思います。

神木　本当？　でも三葉からはモテない男子扱いをされていたよね（笑）。

上白石　女の子に慣れてないんです



三葉がごはんをよそって「食べすぎかなぁ……」とつぶやくところがかわいいです（笑）。（神木）

RYUNOSUKE KAMIKI

1993年5月19日生まれ、埼玉県出身。1999年、ドラマ「グッドニュース」(TBS) でデビュー。映画『妖怪大戦争』(05年) で第29回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。近年の出演作に、『桐島、部活やめるってよ』(12年)、『るろうに剣心 京都大火編／伝説の最期編』(14年)、『神さまの言うとおり』(14年)、『バクマン。』(15年)、『太陽』(16年)、『TOO YOUNG TO DIE！ 若くして死ぬ』(16年)など。2017年には主演作『3月のライオン』(前編・後編) が公開予定。





「三葉」っていう呼びかけの優しさ。神木さんの瀧のあの言い方にキュンとしました。(上白石)

よね(笑)。でもそういうところも魅力だと思うんですよ。ある意味、堅実というか。そこも素敵です。

神木　堅実だし不器用で、頑固な男の子ですよね。すごくイマドキの都会っ子という感じがあって、友達に対しても少し覚めた感じで飾らない言葉をぶつけるようなタイプ。すごくリアルな現代の男の子でもあって、いわゆるアニメーションのキャラクターともまた違うので、実写でお芝居して声を出しているような雰囲気を出したいなと思ったんです。アニメーションとして少し派手さがない感じにはなってしまうのですが、特に司や高木と話しているときはぶっきらぼうに話してしまう感じにしたいなと思いました。

上白石　そこが「瀧くん!」っていう感じでした。

神木　三葉はすごくかわいらしい女の子ですよね。素朴で素直に物事をとらえていて、喜怒哀楽がすごくあるなと思います。それこそ泣きながら笑ったりするところもかわいいですし。本当に女の子らしいと思います。女の子らしいかわいさがある女の子だなと思います。

上白石　もしかしたら三葉は、監督の好きな女性像なのかもしれないなって思いながら演じてました。私から見て三葉は、ちょっと抜けているところがある女の子。でもそこがかわいらしいところなんですよね(笑)。すごく由緒あるおうちの長女っていうことでしっかりしていて頭もいいし、一方でいろんな複雑な思いも抱えているんですけど、どっか抜けていて大丈夫かなって思わせるところがあって。監督がおっしゃるには、三葉は宮水家の中での序列では一番下の存在なんですよ。妹の四葉のほうが上(笑)。単純で分かりやすい感じは、ちょっと私と似てるのかなって思って好感が持てました!

ファンタジーだけどリアルで まさに夢とうつつの間

さまざまな思いを抱きながら、アフレコに取り組んだふたり。そのアフレコの収録時にも、「とにかく完成が楽しみです」と語っていたが、完成を迎えた作品を観て、あらためてふたりは本作『君の名は。』から何を感じ取ったのだろうか。

神木　本当に感動のひと言です。自分が観ていないシーンもあったのでそこもキュンキュンしましたし、キュンキュンだけではなく、切なさが作品全体を通してあって。アニメーションらしいファンタジーなのですが、描かれている景色や心情はすごくリアルなんです。それこそ夢とうつつの間にいるような作風になっていて。やはりすごい作品だなと思います。あと、RADWIMPSの音楽も本当に素晴らしいんです。オープニングで曲が掛かった瞬間、ぞくっとしました。それと同時にどうしようと不安にもなりました。すごくパワーがあるので、自分のお芝居がそこに負けていないかなと。でもそこは新海監督がとてもいいバランスで組み立ててくださっていて、さらに画と物語の力もあって、いい化学反応になっているなと感じました。

上白石　私も本当に衝撃でした。観終わったあとの余韻がまだずっと残っていて。最初はどうしても自分の声が気になって、物語を外から見てしまっているところがあったんですが、後半にいくにつれてそれどころじゃなくなりましたね。すごいものが今動いてるって感じられたし、観終わったあともすごいものができたなって。歴史に残るすごい何かに参加させていただいたんだなって確信してます。今もドキドキしてますし、あらためて背筋が伸びる思いです。

瀧から見た三葉、三葉から見た瀧というのが本作の視点。では、完成した作品を観て、神木は上白石が演じた三葉のどんなところに、上白石は神木が演じた瀧のどんなところに魅力を感じたのだろうか。お互いのシーンで好きな箇所を訊いてみた。

上白石　本当に全部って言っていいくらいなんですが、ひとつは、カタワレ時に会ったときの「三葉」っていう呼びかけの優しさ。あと中身が三葉になっているところで、スマホに奥寺先輩の写真を見つけて「あっ、あの人や! 片想いかな……」っていうところが本当にかわいくて。後ろでアフレコを見学させていただいていたんですが、聞きながら〃何、なに!? キュンキュンする!!〃と思って。完成した作品で見ても本当にかわいくて、かわいいってこういうものなんだって思いました。

神木　ありがとうございます。なんか複雑です(笑)。三葉で好きなシーンは、まずひとつが、ごはんをよそって「食べすぎかなぁ……」とつぶやくところです。あれはかわいいです。〃食べたいんでしょ? 食べればいいじゃん!〃と思うのですが、本人は気にしているという(笑)。

上白石　女子っぽいですよね(笑)。

神木　あと、瀧になっているときに学校で陰口を叩かれて、「あれって、私のことだよね?」ってサヤちん(早耶香)に訊くところ。あれはすごくカッコよかった。ちゃんと瀧に変わってると思いました。

上白石　あそこはすごく不安だったからうれしいです。ふたりのシーンでは、モノローグの掛け合いが楽しかったですね。一番好きっていえるくらいのシーンかもしれない。



神木　「あの女はー!」「あの男はー!」って言い合うところだよね。自分たちで演じながらもテンポ感がいいなと思いましたし、物語がどんどん動いて映画の内容が盛り上がってきているなと実感できたので、楽しかったです。それぞれのモノローグなんだけれど掛け合いになっていて、そこも面白いところだと思います。

上白石　観ている側としては、瀧くんと三葉が実際にこれを顔を突き合わせながら言えていたらどんなにいいだろうって思いました。言い合いなんだけれど、すごく気が合っている楽しさもあって、同じ空間でふたりがこんな風にやりとりできたらいいのになって。すごく素敵なシーンにもなっていると思います。

幻想的な空の美しさと〈距離〉というテーマ



もともと新海作品の大ファンだった神木。作品に対する愛着と洞察は、当の新海をも驚かせるほどで、もはや自他共に認める芸能界一の新海誠ツウ？ 果たして、新海作品の何が観る人の心を打つのか。神木に、今まさに新海作品にはまり始めたばかりの上白石に対するレクチャーという形で、あらためて新海作品の素晴らしさを聞かせてもらうと!?

上白石 お願いします！（笑）

神木 お任せください（笑）。まずポイントとしては、空の美しさ。描かれる空が青々とした空ではなく少し緑掛かった幻想的な空で、シーンとキャラクターの心情に合わせて空の色の塩梅も変化していくんです。空以外の景色も本当にきれいで、自然の音が素晴らしく聞こえる作品ばかりで。舞台となっている場所も実際にある場所だったりするので、その場所に立つとふと作品を思い出したりするんです。そうやって現実と重ねられるのも魅力だなと。

上白石 現実世界よりも美しい日常の風景になってますよね。

神木 第二の魅力としては、各作品の共通点としてある〈距離〉。今回の映画でもそうですが、心の距離、物理的な距離、生きる速度の距離。それがどの作品でも描き出されているんです。その距離を象徴するものが必ずあって、『ほしのこえ』のケータイ電話だとか、『秒速5センチメートル』の足跡だとか。『星を追う子ども』はそれがはっきり出ていて、地上世界と地下世界、生者と死者が描き出されていて。監督はあえて〈距離〉をテーマに取り入れているのか、本能的にそういう作品を作られているのか、そこはのちのち訊きたいところですが（笑）、間違いなく共通点だと思います。

上白石 すごいです！

神木 あと、結末を委ねる、尾を引くというところもポイント。全部答えを見せないんです。これからどうなっていくんだろうと考えさせられるところがあって。『君の名は。』も瀧と三葉がここからどういう距離で向き合って、どういう風に進んでいくのか、考えさせられます。作品としてエンディングを迎えても、物語は続いているというのがすごく魅力的だなと思います。終わりはなくて、むしろすべてはこれから。物語自体、始まりのための序章なんだって感じさせられるんです。新海監督は本当に、スペシャリストです！

上白石 神木さんがスペシャリストですよ！ 新海誠学の博士号を取れるんじゃないかって（笑）。今、神木さんが言われたこともすべて魅力的だなって思うんですが、私が惹かれるのはモノローグですね。独特の言葉選び。ほかの作品にはない、どこか詩的で普段はあんまり使わないんだけれど、すごく身近な言葉がたくさん連なっていて。それが監督のちょっとファンタジーの要素を含みつつリアルな作風の両面を表している気がして。博士！ 私が感じている魅力は合ってますか？（笑）

神木 合ってます！（笑） 言葉遣いには間合いのよさもありますよね。例えば、『言の葉の庭』のタカオの「〜だと、今は思う」の「、」。なんでここを空けるんだろうと思います。

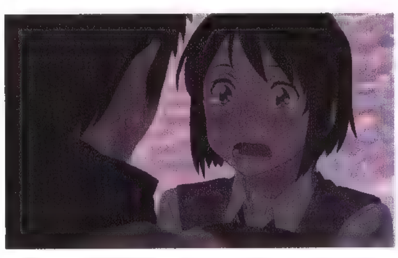
上白石 今回もそういう間がありますが、すごく含みを感じますよね。

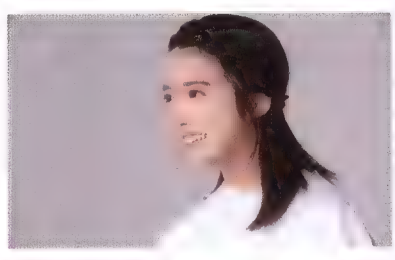
神木 聞いていて引っ掛かりがあるのですが、気持ちよさもあるんです。何か意味合いがあるのか、新海監督が思ういいリズムなのか。

上白石 確かにそうですね。本当にすごい。監督の話をしているときの神木さんも本当にすごいです（笑）。

MONE
KAMISHIRAISHI

1998年1月27日生まれ、鹿児島県出身。2011年、第7回「東宝シンデレラ」オーディション審査員特別賞を受賞して、『江〜姫たちの戦国〜』(11年／NHK)で女優デビュー。『舞妓はレディ』(14年)では800名の応募者からオーディションを勝ち抜き、主人公・春子に大抜擢される。同作品で、山路ふみ子映画賞・第26回新人女優賞、第38回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。声優としては、『おおかみこどもの雨と雪』(12年)に出演している。最新の出演作に、映画『ちはやふる　上の句／下の句』や、『溺れるナイフ』(11月5日公開)がある。







［監督］　　［立花 瀧］

新海 誠×神木隆之介

対談

本編の完成を迎えて、新海誠監督と主人公・立花瀧役を演じた神木隆之介が、
あらためてお互いの仕事に、そして『君の名は。』というアニメーション作品に見出したものとは？

取材・文＝渡辺水央　撮影＝ホンゴユウジ

女の子を演じてもかわいい 神木の声にある特別なもの

最初の出会いは、高校生のときに友人に薦められて手にした『秒速5センチメートル』。それ以来、同作だけでも30回以上は繰り返し観ているほどで、作品の舞台となっている場所にも"聖地巡礼"をしているほどの新海誠ファンである神木隆之介。『君の名は。』で主人公・瀧を演じ、憧れの新海作品に出演となったが、一方でその起用も新海が神木の声にほれ込んでいればこそ。新海作品の魅力、声の魅力、そして『君の名は。』の魅力。それぞれがそれぞれに見出したもの、感じていることをじっくり語ってもらった。

神木　僕自身、もともと新海さんの作品が大好きだったので、大好きだからこそ自分の声が果たして作品やキャラクターに合っているかどうか、不安なところもあったんです。本当に大丈夫でしたか？

新海　すごく素敵でしたよ。素敵としか言いようがないです（笑）。神木さんの声って、どう育ったらこんな声になるんだろうっていうくらい特別な何かがあるんですよね。身体はコントロールして変えていくことができるけれど、声をコントロールして作っていくことはできないじゃないですか。その人の総体が最終的に声に結実するんだと思うんですが、神木さんはそれが本当に特別で。

神木　すごく嬉しいです。

新海　かわいらしいんだけれど男の子っぽさもあって、大人っぽさもあるんだけれど優しさもあって。そういう意味でも今回、三葉と入れ替わってしまう瀧がぴったりだなと。三葉を演じているときが、また本当にかわいいんですよ（笑）。声のニュアンスだけで、ちゃんと女の子だって

アニメーションや〝音〟に対する愛や興味が神木さんの声を作っているのかもしれない。（新海）

いうことも伝わる。もともとアニメーションがお好きだっていうことで、声のお芝居に対する興味も昔から強かったんじゃないですかね。

神木　それこそ声だとか音楽だとか、〝音〟は昔から好きです。

新海　〝音〟に対する愛や興味がこの声を作ったのかもしれないですね。

神木　でも、新海監督の声もすごく素敵です。アフレコのガイドとして、新海監督がすべてのキャラクターの声を当てているVコンテ（動画コンテ）をいただいたのですが、その声でつい物語に引き込まれてしまうので、セリフのチェックができませんでした。気づけば台本をめくるのを忘れてしまっていました（笑）。

新海　あれは「こういうものにしたいのでよろしくお願いします」って頭を下げているようなものなんですよ。本当にガイドで、お手本でさえないですからね。だからせめて気持ちだけは込めて声を当ててます。

神木　素敵な声ですし、新海監督自身が演じられているからこそ、このセリフのこの部分に意味を持たせて欲しいというのも伝わってきます。

新海　そこはちゃんとくみ取っていただきながら、さらにいいものにしてもらっているので、皆さんには本当に感謝しかないです。画コンテにしてもそうですが、欲しい画が見えているんだけれど、自分だけではその画に持っていけないから、エッセンスだけを抽出した画コンテがあるんですよね。声も一緒で、僕が欲しい芝居というのはあるんだけれど、もちろん自分ではそれを表現できない。でも、これはこういうものなんですよって伝えるに当たって、その種みたいなものは自分なりに入れているつもりなんです。今回、声にしても、それから画コンテにしても、すごくそのエッセンスを拾って育てていただいている感じがありました。



まさにこれというモノローグと想定を上回った動きのある芝居

神木　やはり一番不安だったのが、モノローグなんです。新海監督の作品と言えば独特のモノローグなので、気合が入りました（笑）。一番最初に観た作品で一番好きな作品でもある『秒速～』の印象が強いので、（主人公・貴樹を演じた）水橋研二さんのモノローグが浮かんでくるんです。水橋さんは、マットな表現をされていると思うので、どう演じたら、触ったら崩れそうなあの表現ができるのかなと思いました。今回の『君の名は。』はすごく鮮やかな感じもあるので、その中で瀧というキャラクターをどのくらい自分なりに色付けをして、どのくらいのトーンで演じていいものなのか、いろいろ考えました。

新海　いや、すごくイメージに沿ってくれているなって思いましたよ。冒頭の「ずっと何かを、誰かを、探している」っていうモノローグなんて、まさにこの感じを求めていたっていうものになっていて。

神木　よかったです。

新海　逆に、キャラクターが実際に身体を動かしているような芝居は、僕が想像していたものとはまた違うよさがあるお芝居になっていて。例えば、瀧が奥寺先輩とデートしていて、「別の好きな子がいるでしょう？」って言われて、「全然違います！」って返すところ。神木さんがやってくださったあの感じは、僕自身は全然想像していなかったトーンだったんですよ。「全然違います！」っていうのが、〝いやいや、違わないよね!?〟って思わせる芝居になっているんですよね（笑）。いかにも少年っぽくて、ぶっきらぼうで強さも含まれているんだけれど、完全に嘘だっていう。カタワレ時に三葉と会うところも素晴らしかったです。笑い声がいいんですよね。こんな風に笑う男の子っていいなって思いました。

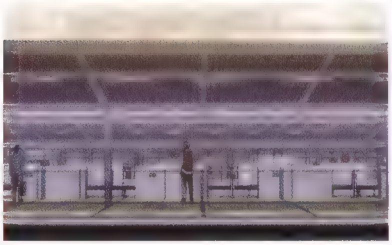
神木　あそこはアフレコしていてもすごく楽しかったです。

新海　僕自身は想定していなかった感情がそこに上乗せされている感じがすごくあったんですよ。それによって、瀧のセリフがさらに魅力的なものになっていって。三葉に突っ込まれて、慌てて「すまん」って謝るところもいいですよね。いろんなパターンをいただきましたが、その中でもよかったのが本当はすまないって思ってないだろうっていうパターンで。三葉の返しどおり、「本当、この男は！」っていう気持ちにさせられる「すまん」で、面白かったです。これは個人的な興味としても訊きたいんですが、神木さんから見たアニメーションの声の仕事の面白さ、大変さって何なんですか？

神木　大変さは、やはり声のテンションです。どのくらいが作品に合うのか、キャラクターに合うのか。そこが毎回勝負で、研究していかないといけないところでもありました。今回一番気にしたのは、ささやきです。いかにささやき声を声に出さずにささやけるかが、僕の中のテーマだったんです（笑）。新海監督の作品









は、ささやきも特徴的だと思うので、声に出しすぎない、消えゆくようなささやきにしなければならないのですが、その中に瀧としての強い意志もないといけなくて。瀧が持っていなければならないささやき声を意識しないと駄目だなと思いました。

新海 完全な息ではなくて声帯も震わせるんだけれど、普通にしゃべる言葉よりは弱いみたいなものが僕はたぶん好きだし、作品のテイストのある部分もささやきで成り立っているところがあるので。オーディションをするときも「もっとウィスパーでいただけませんか」という注文をよくしていて、皆さんにやってもらっているんですよ。でも神木さんは、最初から欲しかったトーンでやってくださっていて。それは僕の作品の癖も踏まえた上で、あらかじめ作ってきてくださったからなのかなって。そのくらい最初からぴったりでした。僕の作品を好きでいてくれたからというのもあるかもしれないですが、勉強家なんでしょうね。

神木 そういうささやきみたいなものって、感情を入れすぎても、逆に消しすぎても駄目だと思うんです。役の感情と声の技術の両方がないといけないんだと思います。

新海 神木さんは本当、声優さんと遜色ないですよ。これでまたさらにアニメーションのお仕事の話も増えていくんじゃないですか?

神木 本当に大好きなジャンルなので、嬉しいです。ぜひまた新海監督の次回作にも呼んでいただきたいです。いつでもこの声を捧げます(笑)。

宮崎駿と細田守の演出術 俳優だからこそ求めるもの

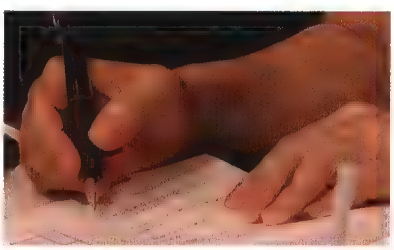
神木はこれまでに『千と千尋の神隠し』や『ハウルの動く城』、『サマーウォーズ』といったアニメ作品に声の出演をしており、宮崎駿、細田守という両監督と仕事をしていることになる。新海を含めて、それぞれがアニメーション界において、異彩を放つ偉才たち。三者をしる神木から見て、それぞれの監督たちに何か共通点や大きな違いはあるのだろうか。新海ならではの点を訊いてみると。

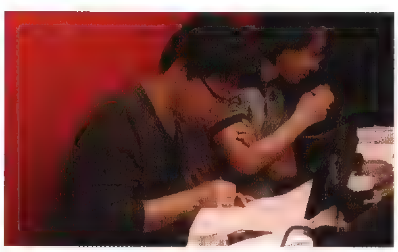
神木 皆さんそれぞれタイプは違うのですが、物腰が柔らかいというのは共通点かもしれないです。その中で新海監督ならではだと思うのが、言葉のニュアンスに対する演出です。新海監督の作品は、やはり言葉の魅力が大きいんです。そのあいまいなニュアンスをいかに表現できるかが、今回も重要になってくるだろうなと思っていて。ただ、僕は声優ではないので、毎回毎回、同じトーンを維持するのは結構難しいんです。でも新海監督はその都度その都度、きちんと細かく的確な指示をくださるんです。

新海 的確だったかどうかは、分からないですけどね(笑)。

神木 新海監督はあいまいなニュアンスの、あいまいさがどういうものであるのかを完全に把握した上で、指示してくださっているんだなと感じました。今まで僕たちが作品を観て、切ない気持ちにさせられてきたセリフたちのあいまいなニュアンスは、もう少しこうして欲しいという新海監督の明確なビジョンがあって成り立っているのだと思います。あいまいに感じられるけれど、実はあいまいではない。そう考えると、本当にすごい方だなと思います。

新海 いや、お芝居を聞かせていただきながら僕自身もゴールを探している場合もあるんですよ。でもおっしゃるように、明確にこのトーンでこの間合いなんだっていうのが自分の中で見えている場合もありますね。ただ、そこに持っていくためにどう







いう道筋を進んで、どういうテイクをいただけばいいのかってことに関しては、悩むところですよ。その道筋は全然明確じゃないです(笑)。そのへん、宮崎さんや細田さんはどうやってらっしゃるんですか？

神木　宮崎監督の作品に出させていただいたのはまだ子供のときだったので、宮崎監督が後ろから「もうちょっとこうして」と優しく言ってくださる感じでした。例えば『千と千尋～』の坊のときは、「もうちょっと泣いてみようか」というような感じでした。細田監督は、最初からとりあえず「叫んで」という感じなんです。作品としても派手なものだったので、全部とにかく思いっきり演じてみて、その中で細田監督がいいところを拾ってくださっていたのかなと思います。

新海　基本線はある中で自由にやらせてもらえる感じなんですね。

神木　でもそれは僕が声優さんではないからかもしれないです。僕が声優さんだったら、もう少しいろいろ指示もあったかもしれないですが、そこは自由にいろんな感じで演じさせていただけて。

新海　確かに声優さんに求めるものと少し違うかもしれないですね。たぶん俳優さんである神木さんにやっていただくっていう時点で、神木さんだからこそ出てくる何か、もともとのプランにはない何かみたいなものを楽しみにしているところってあると思うんですよ。さっき言った身体を動かしているようなお芝居にしてもそうですが、想定してなかったものが出てきてワクワクさせられるっていうのは僕自身ありますし。そもそも身体を動かしているようなお芝居がいいっていうのも、神木さんが普段は身体も使って表現されているからで、俳優さんならではなのかもしれないですよね。『君の名は。』は声優さんにも出演していただいてますが、声優さんはテイクを重ねてもまったくぶれないんですよね。でも神木さんも言われていたように、俳優さんはテイクごとに少しずつ変化がある。それが面白いんですよ。俳優さんと声優さんが一緒に演じていると、俳優さんのお芝居によって相手の声優さんも変化していったりして。それぞれの違うよさがぶつかり合って、想像もしていなかったいいものになっていく面白さというのが、俳優さんと声優さんの共演にはありますよね。それが今回感じられて、すごく楽しかったです。

今までとまた違う風景と出会いたいと思った作品

神木　今回の『君の名は。』は、出演者としてだけではなく、一ファンとして完成が楽しみな映画だったんです。それだけに、自分で観て自分の声をどう感じるのかというところが引っ掛かってもいて。でも試写で完成したものを観せていただいて、自分の声だということをあまり気にせずに瀧の声を聞くことができたし、作品に入り込むことができました。まだお客さんに観ていただいてないので、入れ替わったときの声がどう受け入れられるのかも不安ではあるんです。新海監督がOKを出してくださっていて、大丈夫、よかったと言ってくださってはいるにしても、どこか信じ切れていないので安心はできなくて（笑）。

新海　本当に大丈夫ですから（笑）。ただ、僕自身もまだまだ自分の作品を客観視できないところがあるんですよ。自分としては素晴らしいものができたと思っていても、神木さんのおっしゃるとおり、まだお客さんには観ていただいていないので。

神木　それではファンである僕から言わせていただくと(笑)、本当にすごい作品だなと思いました。台本を読ませていただいたときにも思っていたことではあるのですが、またあらためて新しい一歩を踏み出されているなと。作品としての色合いはこれまでとまた違うけれど、観ていて本能的に切なくなってしまう感じは同じというか、これまでよりもさらに強かったです。わざと切ないものを作ろうとしているということではないと思うんです。でも結果として勝手にキュッと心が締め付けられる設定だったり、状況だったり、セリフがそこにはあって、培われてきたものは変わっていない。その色合いを変えると、こういう風になるんだという広がりが感じられて。これまでのファンの人たちは、少し驚かされるところもあるのではないでしょうか。

新海　今までと作っているものを何か大きく変えたつもりはないんですよ。でも神木さんの声にしてもそうなんですが、いろんな方のエッセンスを作品に取り入れていって、さらにもっと広がりのあるものにしたいっていう気持ちはありましたね。あと、今までの作品で見ていた景色とまたちょっと違う風景をこの作品で見たいし、この作品に見せて欲しいなって思ったんです。その風景というのは、劇場に来てくださるお客さんの声や層だったり、例えば地方にキャンペーンに行ったときの文字どおりの風景だったり。今まで新しく作品を作る度にいろんな風景を見せていただいていて、そこで作品が僕自身にいろんなものを運んできてくれた気がするんですが、10年続けてきて、今まで絶対会わなかったような人にも会ってみたいという気持ちになってきているタイミングでもあったんですよね。

神木　映像やそこに描き出されている風景にしてもそうですが、本当に、そのような作品だと思います。これまで観たことのない何かがそこに広がっているアニメーションなのではないかなと。そのような作品に参加することができて、僕自身、すごくうれしかったです。

新海　そう言っていただけるとありがたいです。目指したのは自分を新しい場所に連れていってくれる作品ではあるんですが、それはもしかしたら観ていただいたお客さんも新しい場所に連れていってくれる作品でもあるのかなと。そういうものにしたいというのは明確に思っていて、そこにはたどり着くことができたかなという手応えはありますね。



切ないセリフのあいまいなニュアンスは、明確なビジョンがあって成り立っているのだと思います。（神木）



［監督］新海誠インタビュー

納得感と同時に意外性をもって迎えられるに違いない今作『君の名は。』。そこに込められた新海誠の思いとは？作品の成り立ちからディテールまでを監督自ら語ってもらった。

取材・文＝渡辺水央　写真＝ホンゴユウジ

「誰かの幸せを願うような出会いの物語」

今作は自分のビジュアルにぴったりのモチーフとテーマ

——『君の名は。』には「恋と奇跡の物語」というキャッチフレーズが付けられていますが、今回、監督としてもラブストーリーというのは意識された点なんでしょうか？

恋を描きたいと最初に思っていたわけではなくて、出会うべき運命にあるけれどまだ出会っていない2人の話を作りたいというのがシンプルな動機だったんだと思います。まだ見知らぬ者同士なんだけれど、いつかは出会うべき存在、その2人が出会い以前に何らかのカタチで触れあっていく。言ってみれば、ちょっと変則的な〈ボーイミーツガール〉の物語ですよね。それが恋になるかどうかはさておいて、男の子と女の子が出会うことで何かが動き出す。普遍的な物語ではあるんですが、それをど真ん中のエンターテインメントとしてアニメーションで描いてみたいなと。ただ、それだけではあまりに手数が少なすぎるので、映画として成り立たせるに十分な材料を探して集めて、組み立てていったという感じですね。

——そこでモチーフになっていったのが、〈夢〉であり、男女が入れ替わる〈とりかへばや〉なんですね。

夢というのはずっとモチーフとして考えていたんですが、その中で引っ掛かったのが、小野小町の「夢と知りせば覚めざらましを（＝夢と知っていれば目を覚ますことはなかったのに）」という、『古今和歌集』の和歌なんです。そこからもう少しひねって、夢の中で出会うというところから、夢の中ですでに自分ではない相手としてもう出会っているというところに落とし込んでいきました。夢の中での入れ替わりという設定ができた時点で、これは自分のビジュアルのテーマ性にぴったりなのかもしれないなと思ったんですよ。田舎に暮らす子の眼を通して初めて東京を見たり、その逆を体験するというのは、自分たちが今までこだわってきた風景描写を最大限活かすことにも通じるだろう、と。そういう描写を物語的な仕掛けに絡めて見せていくことができれば、勝算のある映画になるんじゃないかと思いましたね。

——お互いが入れ替わっていることで、出会っているけれど出会っていないという状態がより際立ちますよね。ものすごく近くにいるのに、ものすごく遠い。ちなみに監督の中では、入れ替わるべき相手が瀧と三葉だったということに何か物語的な理由付けはされているんですか？

理由は付けなかったですね。なぜ三葉が手を伸ばしたのが瀧だったのか、瀧の夢が繋がったのがなぜ三葉だったのか。そこは脚本会議でも課題になったんですが、最終的にやっぱりそこは大事じゃないと思ったんです。それこそ現実においても、なぜ出会ったのか、なぜ好きになったのかっていうのは理屈で説明できることではないじゃないですか。気づいたら出会っていて、好きになっていたというのが実感だと思うんです。ふたりの夢の中での入れ替わりも、言ってみればそういうものなんですよね。あくまで出会いのフックでツール。描きたかったのは小さな心のやり取りが大きな宇宙的スケールまで広がるということだったので、そのために〈組紐〉や〈彗星〉という仕掛けを同時に考えていきました。

——組紐はどういったところから浮かんだモチーフだったんでしょう？

紐は意識と意識が量子レベルで繋がって絡まっているという、SF的な発想からですね。その一方で町がなくなるというアイデアも当初から考えていたんです。それで紐で何か土地の固有性を表すことができないかなと考えていた中で、伝統的な組紐にたどり着いて。三葉が付けている組紐の模様は劇中でははっきり出てこないんですが、ほどいて開くと湖を中心に夕焼けが広がっているような柄になっているんですよ。それは〈糸守町〉と〈カタワレ時〉を図案にしたものという設定なんですよね。

——彗星も印象的なモチーフですね。

彗星は、アニメーションのビジュアルとしてのキャッチーさみたいなところからまず考えました。例えば『言の葉の庭』では雨だったんですが、自然現象や天体現象ってやっぱりすごく画として強いものがあって映えるんですよね。あと古代からの伝承という設定も考えていたので、周期性のある天体現象は彗星だなと。三葉の巫女という設定もそこと繋がっていて、発想のきっかけには近年のいくつかの自然災害があるかもしれません。自然災害には周期性や地域

性がありますが、たとえば、昔津波が起きた地域にはそれを警告する石碑が残されていたという話があります。でもほとんどの場合、それらは時間と共に忘れられていってしまう。彗星やその伝承、巫女舞や組紐、糸守町の成り立ち自体に、そういう要素を入れていきたいと思ったんです。

——タイトルの『君の名は。』の由来についても教えてください。

最初は小野小町の和歌そのままに、『夢と知りせば』というタイトルにしていたんです。必ずしも作品の内容を言い表しているわけではないですが、響きがいいなと思ったんですよね。そのあとお互いがお互いの半分なんだっていうところから『クロスロード』のキャッチコピーでもあった『きみはこの世界の、はんぶん』や、作品内容そのものをシンプルに表した『かたわれ時の恋』を仮題にしていて。ただあまりキャッチーではないので、ギリギリまでどうしようかと話していた中で、（プロデューサーの）伊藤（耕一郎）さんが〝『君の名は。』でいいんじゃないの?〟と言ってくれたんですよ。そのアイデアも考えていたんですが、有名な先行作品もあったので決められずにいて。でも今思えば、必然的にそのタイトルでよかったのかなと思いますね。

きら星のような才能が積み上げてくれた作品

——今回はスタッフィングもまた作品さながらに奇跡の出会いですね。

本当、奇跡的なタイミングで奇跡的な人たちが交わっていると思います。RADWIMPSにしてもちょうどメジャーデビュー10年目で少し違うところに手を伸ばそうとされていたタイミングですし、アニメーション業界で言うとちょうど安藤（雅司）さんが劇場作品を手掛けていらっしゃらない時期で、逆に田中（将賀）さんはお忙しい中でもできる形でご参加いただいて。もしかしたら二度とない布陣なのかなっていう作品でもありますよね。そういう意味でもすごく強い手応えを感じています。

——RADWIMPSに関しては、監督がお名前を出したんですよね。

僕はどんなアーティストが好きかと訊かれて答えただけで、一緒にやれる可能性があるなんて想像したこともなかったんですよ（笑）。でも（企画・プロデュースの川村）元気さんが（野田）洋次郎さんと知り合いで話を進めていくうちに、劇伴もやってくださる話になって。それはすごいことになると思ったんですが、制作過程を含めてどういう流れになっていくのか、うまくイメージできないところもあったんですよね。でも、最初に脚本のイメージで作っていただいた曲を聴いた時、その懸念はすっかりふきとびました。ものすごいものをいただいたので、それをどうやって映像の中で効果的に成り立たせていくのかっていうモードに完全に切り替わりました。

——具体的にはどんな調整を？

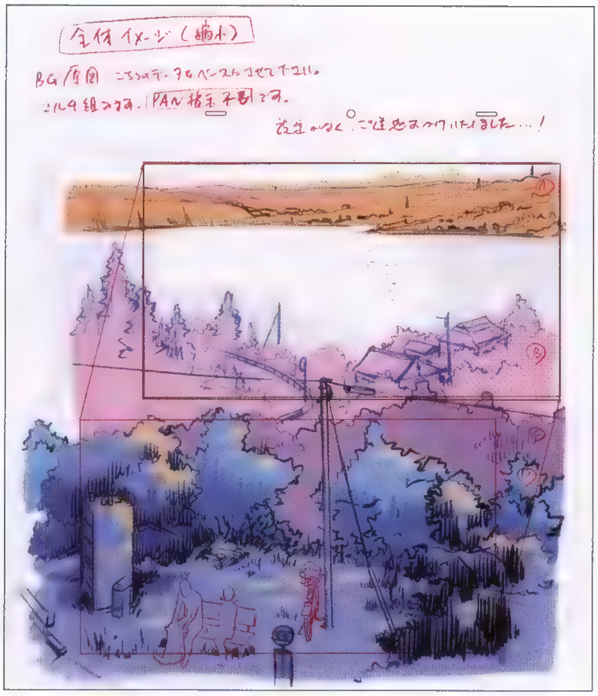
『前前前世』はまさに最初の脚本のイメージとして上がってきた曲なんですが、映画版にしかない歌詞があ

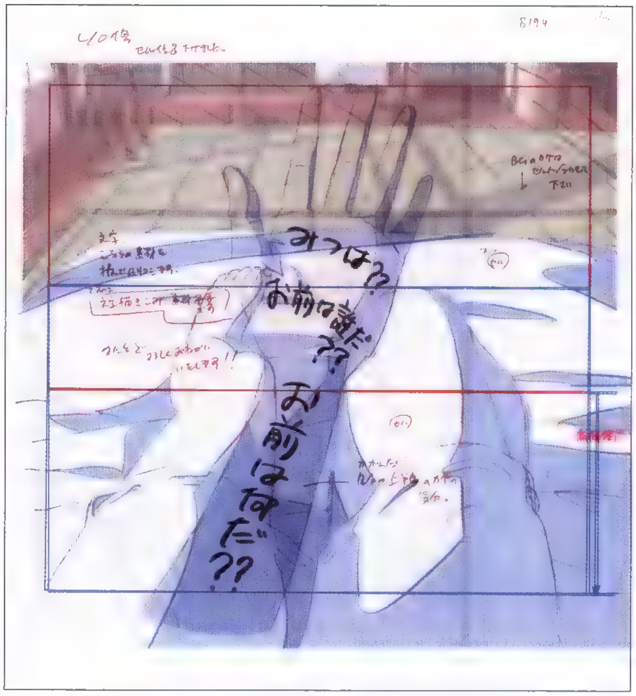






スタジオで打ち合わせする新海監督。





るんですよ。「私たち越えれるかな、この先の未来、数え切れぬ困難を。言ったろう？　2人なら笑って返り討ちにきっとできるさ」という歌詞。これってすごく普遍的ですよね。劇中での瀧や三葉の想いを語る言葉でもありつつ、思春期そのものを語る言葉でもあるじゃないですか。その歌詞を聴かせるために、劇中のセリフを削ったりもして。毎回、作品を作るにあたって、設計図はきちんと組み立ててはいるつもりなんです。でも今回は最初の企画書からは想像もしなかったきら星のような才能たちに恵まれたので、自分の設計図を完全に超えて、皆さんに積み上げていただいた作品になっていて。うれしい誤算でした。

――神木隆之介さん、上白石萌音さんの声も大きな積み上げですよね。

神木さんはもともと好きな役者さんでしたが、声に関してこんなに巧みな人だったんだとびっくりしましたね。圧巻でした。上白石さんは、ご本人は嫌がるかもしれないけれど、僕から見て三葉は上白石さんそのものなんですよ。加えて、彼女も抜群に上手いんですよね。基本の芝居はVコン（動画コンテ）のガイドからニュアンスを完全に把握したうえでプラスの部分がすごくあるので、びっくりしました。

――そして先程もお名前が出た田中さんと安藤さん。あらためておふたりとのお仕事はいかがでしたか？

田中さんのキャラクターは、とにかくかわいくてカッコいい。みんなが心から好きになって共感できる主人公を描いてくれました。それを安藤さんが料理してくれたわけですが、安藤さんはさすがのひと言ですよね。これだけの力の入れ方と真剣さで向き合わないと、映画というものには立ち向かえないんだっていうことをあらためて安藤さんの仕事で示していただきました。おふたりに対しては、本当に頭の下がる思いです。

「幸せになりなさい」ラストが訴えかけるもの

――監督の中では、今回、テーマとして特別何か新しいことに挑戦したという感覚はあるんでしょうか？

テーマ的には、本当に今までの作品の延長線上にあるものだと思います。〝ずっと何かを、誰かを、探している〟という瀧のセリフがありますが、そこから『秒速5センチメートル』を連想する人も多いと思いますし、〈会えないコミュニケーション〉みたいなものはデビュー作の『ほしのこえ』からずっと繰り返してきていることでもあるんですよね。でもその語り口に関しては、だいぶ変わってきたような気がします。

――『雲のむこう、約束の場所』と今作を照らし合わせるファンも多いかと思いますが、『秒速〜』とあわせてラストの感慨はたぶんまた全然違うものになっていますよね。

ロサンゼルスでワールドプレミアを開催して、そこで上映して思ったのは、みんなこういうラストを待ち望んでいたんだなっていうことだったんですよ。ロサンゼルスに来てくれたお客さんたちというのは僕の作品の十年来のファンでいてくれる方たちで、彼らの中では最後に会えるのか会えないのかっていうところが大きな課題だったみたいで。数年後、ふたりが歩道橋ですれ違うところがあるんですが、そこでみんな絶望的な声を上げたんですよ（笑）。やっぱりここで終わりなのかみたいな。そのシーンから、彼らの気持ちの起伏がすごくて、音楽が流れて東京の風景が出てきて、そこで瀧と三葉の描写が交互に出てきたところでどよどよどよってなって、電車ですれ違うところで大きな歓声が上がったんです。そのあとはみんなもうずっと叫んでいるみたいな感じで（笑）。

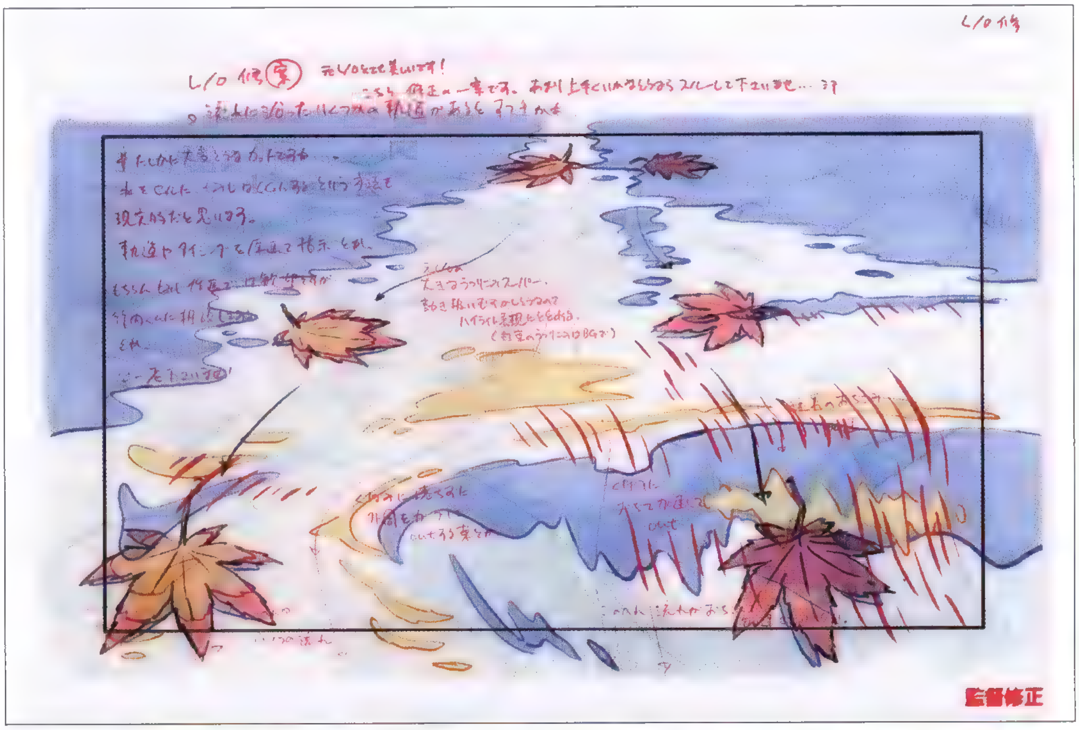
――そこが目指すところだったと。

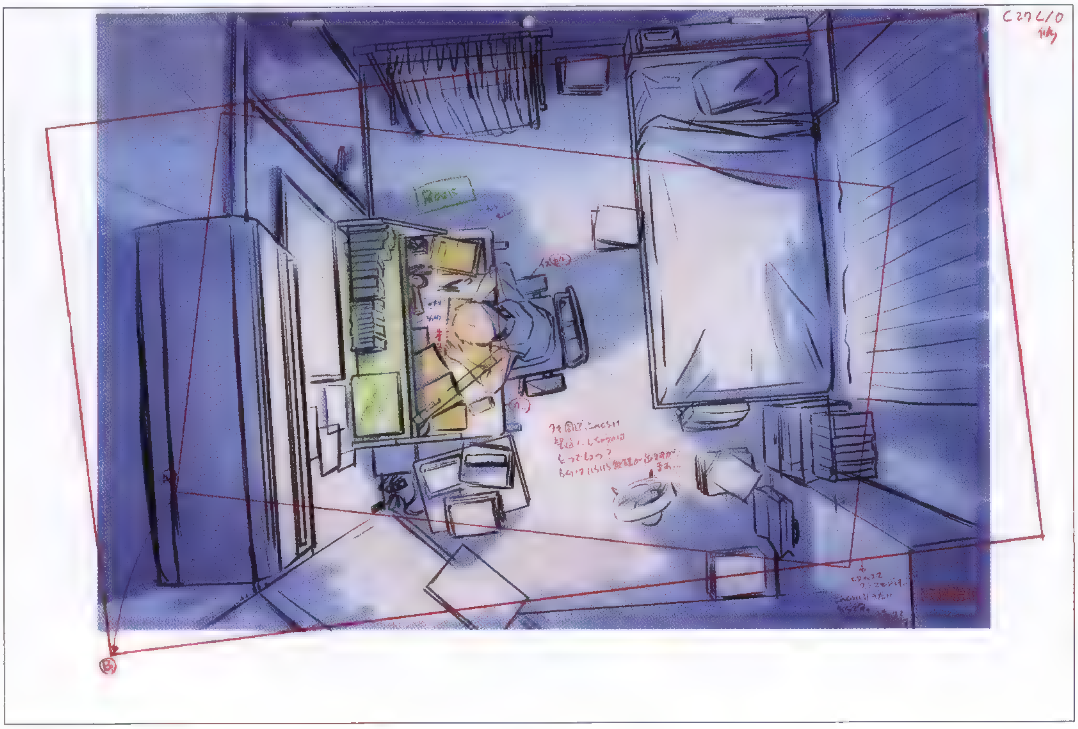
『言の葉の庭』でも幸せな気持ちで劇場を出ていただける作品を目指したつもりだったんです。でも、人によってはもやもやしたという話も聞いて。今回、奥寺先輩が瀧に〝君もいつかちゃんと、幸せになりなさい〟というセリフがあって、ちょっと謎めいた言葉にも聞こえるかもしれないけれど、あれはお客さんに対する僕の気持ちでもあるんですよ。

――奥寺先輩の瀧に対するメッセージであり、監督の観客に対するメッセージでもあるんですね。

誰かの幸せを願うような作品にできたらいいなと。ただ、ある見方をすれば、あのラストはスタートに過ぎなくて、その先がすべて約束されているわけじゃない。何かの終わりみたいなものを常に孕んでいて、そういう気分は僕自身、過去作からずっと共通しているものではあるんです。それはもう現実がそういうものだからとしか言えないですよね。エ

ピローグでかかるRADWIMPSの『なんでもないや』にしても、あと少しだけでいいからくっついていたいと歌っていて、その感じが絶妙だなと思ったんです。ラスト、就職活動の場面で瀧に〝東京だって、いつ消えてしまうか、分からないと思うんです〟と言わせているんですが、日常がいつかなくなってしまうかもしれない感覚って、みんな日に日に強く抱えるようになっていると思うんですよ。でも、あと少しだけでいいからこの状態を続けていたい。好きな人と一緒にいたい。幸せって、そういう切実な想いの中で初めて見いだせるものだとも思うんです。そんな映画にしたいというのは過去作でも思ってきたことなんですが、今回やっとそれが自分でも納得のいくカタチで作れたような気がしています。





新海誠による監督修正

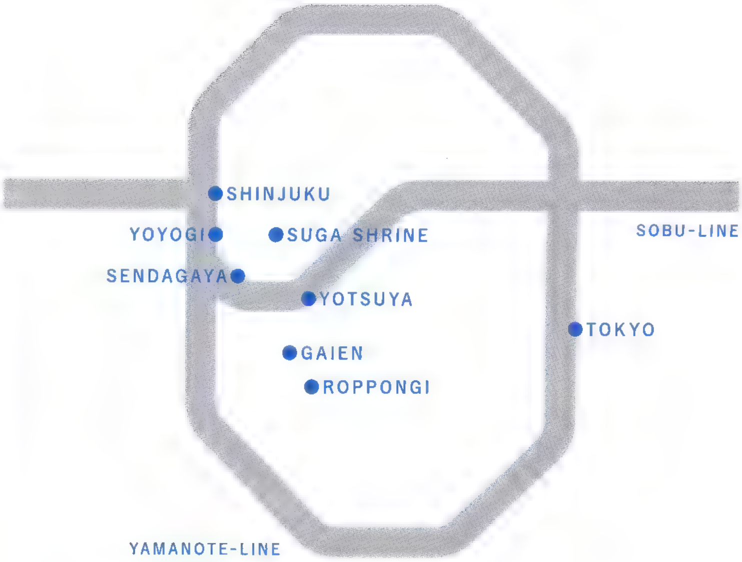
MAKOTO SHINKAI

1973年生まれ、長野県出身。2002年、個人で制作した短編作品『ほしのこえ』でデビュー。以降、『雲のむこう・約束の場所』『秒速5センチメートル』『星を追う子ども』を発表。2013年に公開された『言の葉の庭』では、自身最大のヒットを記録。ドイツのシュトゥットガルト国際アニメーション映画祭にて長編アニメーション部門のグランプリを受賞した。次世代の監督として、国内外で高い評価と支持を受けている。





東京ロケーションMAP

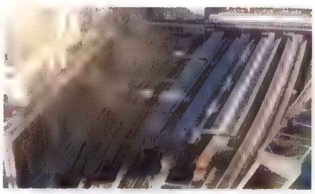


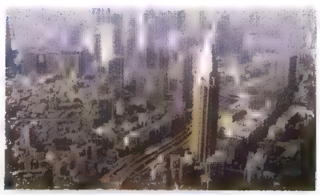
『君の名は。』のなかで描かれる東京は、
おもに新宿駅から四ツ谷駅の間が舞台となっている。
ここでは、作中に登場する重要なスポットを紹介する。

文=倉田モトキ

新海監督Comment

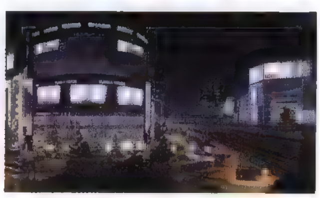
本作では、田舎出身の三葉は東京の風景に憧れ、東京育ちの瀧は糸守町に風景に見とれます。そのために、東京独特の美しさを表現できるようなロケーションを探し回りました。ビル群も無機質で無関心な風景にはならないよう、反射光や色彩に工夫を凝らしています。









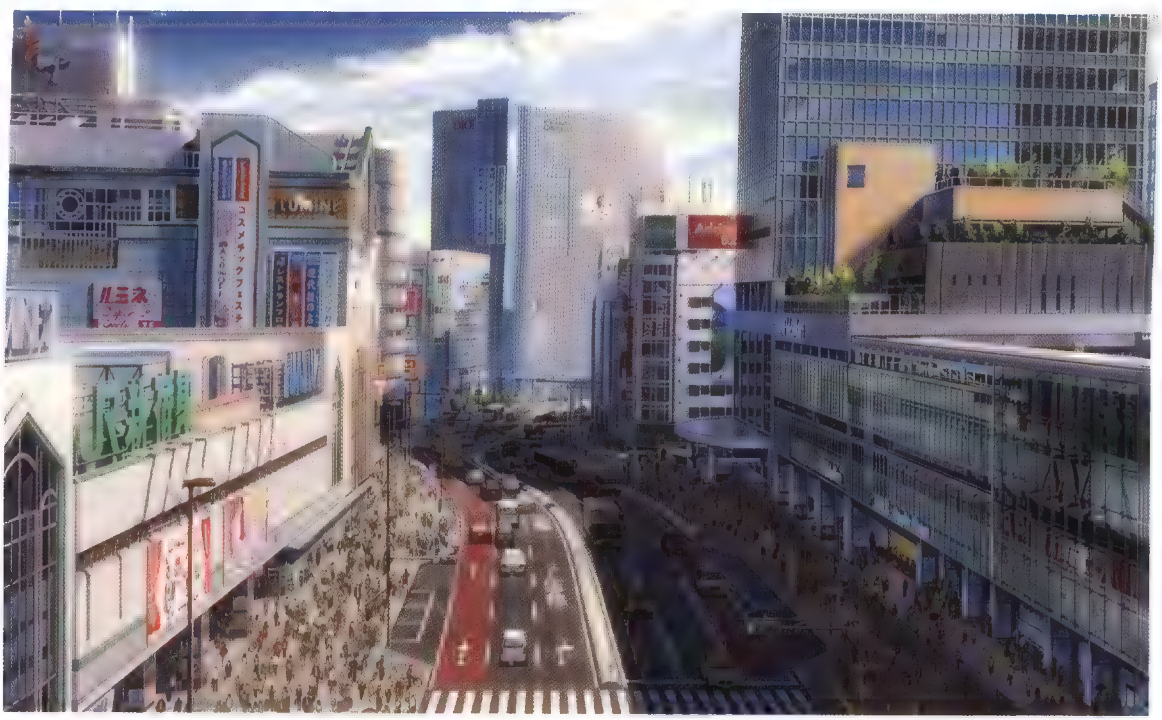


勅使河原と早耶香、そして瀧が偶然にも同じ空間に居合わせたカフェも歩道橋のすぐ側にある（左下）。東口にある街頭ビジョンも劇中で何度も登場（右下）。

新宿

● SHINJUKU

瀧と入れ替わった三葉が「東京や!!」と感激する新宿駅南口。また、新宿のランドマークタワー・損保ジャパン日本興亜本社ビルの前にある歩道橋では、少し大人になった三葉と瀧が一瞬だけすれ違う。この直前、勅使河原と早耶香も近くにいたことを考えると、三葉と2人は今でも東京で会っているのかもしれない……と思わず想像してしまう。



2016年に新しくなったばかりの南口の光景が、いち早く描かれている。

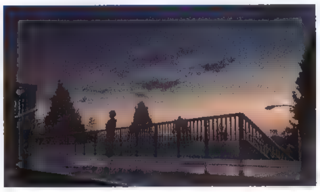
外苑 ● GAIEN

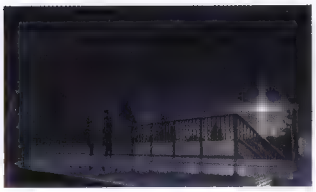




抜け感のある空の描写も印象的な歩道橋。1枚のロケハン写真からも再現度の高さが読み取れる。

オープニングロールや瀧のバイトの帰り道、デートシーンなど、重要な場面で何度も登場するこの歩道橋は、今作の象徴とも言えるスポット。信濃町駅から出てすぐのところにあり、歩道橋の先には外苑の景色が広がっている。また映像の右手には瀧と奥寺先輩がデートをした六本木ヒルズも見える。



同じ構図でも、キャラクターたちの心理描写や時間帯の違いによって、まったく異なる趣きが感じられる。

代々木駅

● YOYOGI

瀧に会いに来て探しまわったものの、電話も通じず、駅のホームで途方に暮れていた三葉が、到着した電車のなかに瀧の姿を見つけるシーン。沈みゆく夕景をバックに、三葉の切なく、心細い感情が表現されているこの場面には、少し殺風景な雰囲気の代々木駅が効果的に使われている。



新宿から千葉方面に向かう総武線のホーム。駅のすぐ近くには新海作品ではおなじみのNTTドコモ代々木ビルがある。

TOKYO LOCATION MAP

千駄ヶ谷駅

● SENDAGAYA

大人になった瀧と三葉は、電車ですれ違った瞬間、惹かれあうように電車を降りて互いを探しに行く。千駄ヶ谷駅は三葉が急いで下車した駅として登場。



四ツ谷駅前

● YOTSUYA

瀧の家から最寄り駅のため、土地勘のない東京に右往左往する三葉(外見は瀧)や、奥寺先輩とのデートの待ち合わせ場所など、四ツ谷駅はなにかと登場する。三葉が初めて瀧に会い、別れ際に自分の名前を告げながら、髪を結った組紐をほどいて渡す場面も、この四ツ谷駅のホームが舞台となっている。



映画のなかで描かれている駅前の広場があるのは赤坂口。シーンごとにいろんな角度から駅前の様子をとらえている。





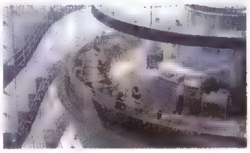
六本木

● ROPPONGI

三葉の計らいによってデートをすることになった瀧と奥寺先輩が向かったのが六本木。ふたりはまず、六本木ヒルズ内にある展望台「東京シティビュー」を訪れ、その後、国立新美術館へと場所を移している。







ふたりがランチを楽しんでいる国立新美術館内のサロン・ド・テロンド。逆円すい型の上部に座席がある人気のカフェだ。



東京駅

● TOKYO

東京の表玄関とされる巨大ターミナル駅で、2003年に国の重要文化財に指定されている。瀧が記憶をたよりに糸守へ向かうシーンで登場する。



四谷の総鎮守として江戸初期より続く須賀神社。住宅街のなかにあり、この階段を上がった先に境内が広がっている。

須賀神社入り口 ● SUGA SHRINE

彗星の落下から5年が経ち、互いに過去の記憶がなくなるが、電車ですれ違ったのをきっかけに再びふたりが出会う。この印象的なラストシーンのロケ地となったのは、四谷にある須賀神社の入り口。新宿、代々木、千駄ヶ谷など作中に登場する重要な駅に囲まれるような場所に位置しているのも感慨深い。



［作画監督］

安藤雅司 インタビュー

作画監督を務めたのは、ジブリ作品などで知られる名手・安藤雅司。彼は新海監督の仕事、また田中将賀との初タッグともなった『君の名は。』にどんなことを感じ取ったのだろうか。

取材・文＝渡辺水央　撮影＝首藤幹夫



意外性と可能性こそが作品に参加した理由

——『君の名は。』に参加されるに当たって、安藤さんの中で一番の決め手となったものは何でしたか？

「そもそも新海さんの作品の話が自分のところに来るなんて、思ってもいなかったことだったんですよ。その意外性というのは今思えば大きかったですね。いろいろ考えるところはあったんですが、資料としてシナリオを読ませていただいたら、これが非常に面白い。あと、その時点で田中（将賀）さんがキャラクターデザインをやられることは決まっていて、そのうえで作画監督をお願いできないかという話だったんです。これまでお互いが手がけた作品群からみれば、田中さんのキャラクターデザインで自分が作画監督をやるというのもそうそうない方向性なんですよね。それだけにちょっといい意味で引っ掛かりがあって、これは少し考えてみようかなと」

——ジブリ作品を手掛けられてきた安藤さんと、現代的なアニメーションをやられている田中さんと、そして独自の路線を築いてきた新海さん。確かに異例の組み合わせですよね。

「田中さんの描かれるキャラクターというのは、アニメーション的に華のあるキャラクターだと思うんです。自分はむしろ地味で愚直な方向を手掛けてきているので（笑）、それを田中さんのキャラクターでやるとどうなるんだろうと。その興味もあって参加したというのが大きいですね。同時期に本田雄さんの短編の仕事をしていまして、本田さんというのはまさに両方やれる人なんです。キャラクターにちゃんとした芝居をさせながらも、アニメーション的な華がある。その仕事を見て、すごく感心したというか、これは真似できないな、すごいなって思っていた中での話だったんですよ。田中さんのキャラクターに乗っかることで引っ張られて自分の可能性も広がるかなと思って、新たな挑戦という意味でも引き受けさせていただきました」

——実際、可能性が広がった手応えというのはいかがでしょうか？

「そんなに広がってないんじゃないかな。それはもう作業に追われてしまってというのも理由としてあると思うんですが、そうやすやすとできるものではないなっていう（笑）。田中さんのキャラクターという前提で言えば、コミカルな場面や表現にしても、もっと思い切って振っても良かったんじゃないのかなと思うんですよ。でもその落としどころが難しくて、どうしても自分がコントロールできる範疇から飛び出せないところがありまして。一方で、コミカルさだけで通していけるお話ではないんですよね。後半に行くにつれて、動きも含めて自然にシリアスに重くなっていくので、現実感を彷彿させる表現にしていかないといけない。いろんな遊びができるとしたら前半のバタバタした部分だったんですが、手応えもあれば、足りないと反省したり……。まあ、最低限のところはクリアできていると思っています（笑）」

キャラクターの色気を描き出すということ

——ひとまず作品が形になっての感触はどうですか？

「感触はすごくいいなと思っています。シナリオを読んで、これはいいなと最初に思った感触と変わらないところで作品もできあがっていってるなと思いますね。自分が惹かれたのは、まず話の構造だったんです。少年と少女を取り巻く思春期特有のはがゆさが色濃くて、自分たちではどうにもならない運命の歯車みたいなものの中で翻弄されながらも、光を見出していく。繋がったものを見ても設計したとおりの作品の流れをちゃんと感じさせる心地いいものになっているなと。若い人たちが本当に楽しんで観られるものになっているんじゃないかなと思います」

——若い世代を象徴する作品だと。

「年寄りとしては、ちょっと気になるところもあるんですよ（笑）。最後、

登場人物たちのその後がいろんな形で挟まれる中で、おばあさん（一葉）も後ろ姿でもいいから出して欲しかったなって。ラスト、三葉たちは都会に移り住んで来ているわけですが、ずっと神社を守ってきたおばあさんは、その神社がなくなって一体どうしているんだろうと。ただ、そう思うのは僕の個人的な思い入れからかもしれなくて、最初にシナリオを読んだ段階でそこに疑問を持ったわけではなかったんですよ。ちゃんとそういうことを気にさせない作りにはなっている。でも、この人はどういう表情をしていて、どういうことを考えているんだろうと突き詰めながらおばあさんを描いて動かしていると、最終的にどうなっていくんだろうっていうところまで気になってしまうんですよね。市原（悦子）さんの声のお芝居もまたいいじゃないですか。個人的にも好きな女優さんなので、よけいに思い入れみたいなものもありまして」

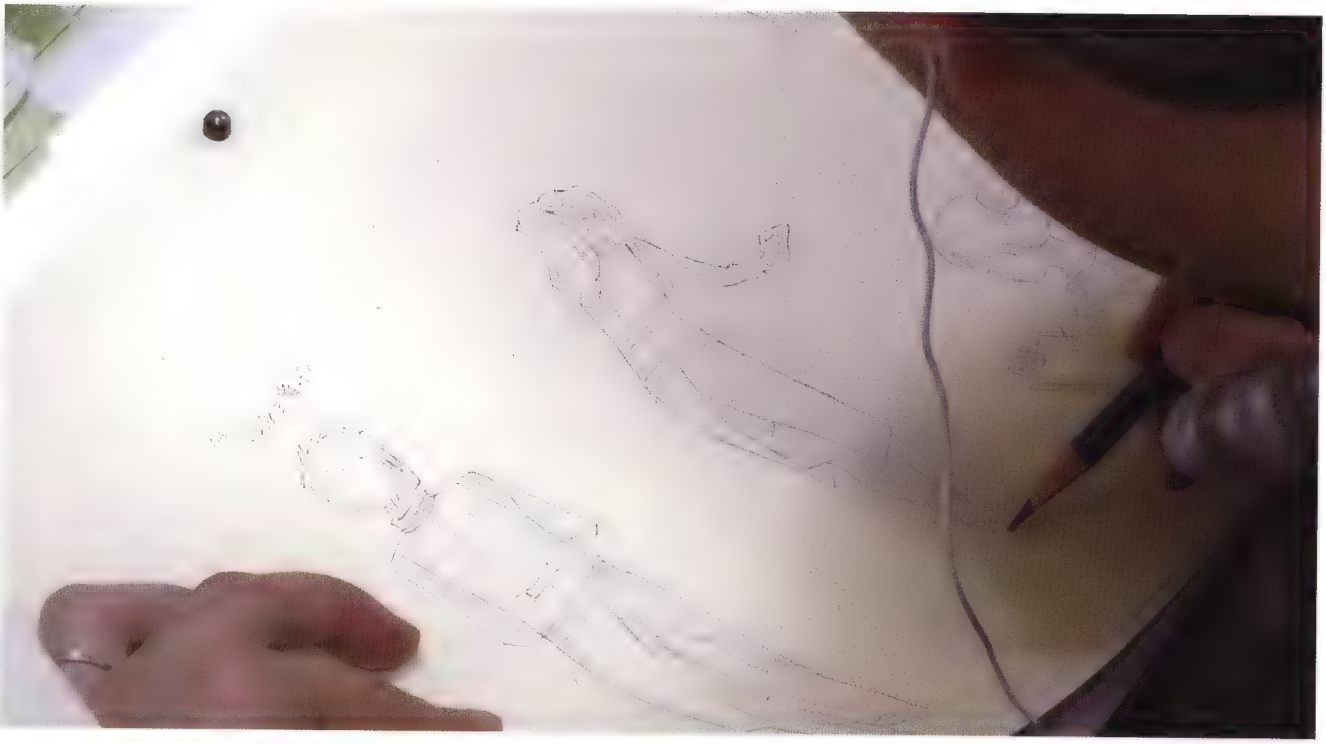
――なるほど。安藤さんならどういうシークエンスを想像しますか？

「おばあさんだけは都会以外のところに移り住んで三葉の父親と糸守町の復興のために何かやっているのではないか、とか。勝手にそんなことを考えたりはしますね（笑）。現実において切り取るとどうなるかというのもありますが、何らかの形で自分たちが守ってきたものを継承していくということを絶対やっていると思いますね。そうであって欲しいです」

――今まさにキャラクターを動かすことについてのお話が出ましたが、主人公の瀧と三葉で意識された点と



安藤雅司による作監修正



スタジオでの安藤さんの作業の様子。





いうのは何かありますか？

「瀧と三葉に関しては、デザインをある程度維持しながら、入れ替わりをどう見せるかが難しいところでした。三葉の場合、髪の毛を編み込んで結んでいるときは三葉で、ポニーテールになっているときは瀧という形である種分かりやすく変化を付けているんです。ただ、後半は髪を切ってしまうので、混同してしまいがちになってしまう。そこはアニメーターさんに頑張っていただいて、表情で変化を付けています。三葉でいるときのほうが不安感が表情に表れやすくて、瀧でいるときは使命感みたいなほうが表側に出てくる。そのへんの違いをどのくらい落とし込めばそう見えるのか、気を遣いながらやりました。果たしてそれがどこまでできているのか、不安なところでもあるんですけどね」

――ほか、特に力を注がれたキャラクターというと誰になりますか？

「奥寺先輩は気を遣いました。ある程度の色気を持った大人の女性をどう描くべきなのか。それはアニメーションにおいて、色気というものをどう考えるかっていうことでもあるんですよね。ちょっと語弊があるかもしれないですが、いわゆるアニメファンの方が支持する、二次元的な喜びを感じるようなキャラクターに寄せてしまうのは嫌だなぁと思っていたんです。僕自身としては、奥寺先輩みたいなフェロモン系の女性のキャラクターに限らず、すべてのキャラクターは色気を持っているべきだと思うんです。ただその色気というのはエロさということではなくて、生命感みたいなものなのかなと」

――キャラクターの深みのニュアンスみたいなところですね。

「〈キャラの向こう側〉という言い方をやたらとしていて、自分でもその言い方にいい加減飽きてきてもいるんですが（笑）、描いている絵というのは描き手側の表現でしかなくて、やっぱりその向こう側に生身の人間を想定しているところがあるんですよね。色気を描き出そうとするときに手掛かりになってくるのも、やっぱり生身の人間なんですよね。生身の人間が持っている色気の片鱗が絵の中からもうかがえれば、そのキャラクターも色気のある人物として感じてもらえるんじゃないかなと。生命としての説得力や存在感みたいなところですよね。奥寺先輩にしても同じで、女性としての色っぽさも感じさせつつ、人間としての色っぽさもうまく出していけたらいいなと」

――そこは技術的にはどう反映していくものなんでしょうか？

「観念的なラインで絵を描かないということですね。絵にしようとしたときに、人はこういうものだっていう記号的なところに落とし込まないようにしようと。以前、自分が尊敬する近藤喜文さんが、人の骨格の考察について話されていたんです。人を描くときに、胴体があって、そこに首があって頭が乗っかっていると観念化しがちだけれど、骨格で考えると胴体と首筋はひと繋がりなんだと。背骨はS字になっていて前傾で首を支えているから、首筋というものは真っすぐではなくて傾いている。そうやって身体のラインができあが

自分は地味で愚直な方向を手掛けてきているんですが、今回、自分の可能性が広がるかな、と。



っていると思うと、表現せずにはいられないみたいなことをおっしゃっていて。そういうことを絵に取り込むと、ひとつの生命感や説得力を生み出せて、そこが色気に通じてくるんじゃないかと思うんです」

――人物としてのリアリティが色気に繋がってくるということですね。

「首がななめについていることによって、振り向いたりしたときに傾きも出てきて、そこにその人の奥行きみたいなものが出てくる。パターンとして人間を描いたほうがラクなんですが、そうすると観念的なところに陥りやすくて、僕自身、それを恐れているところがあるんですよね。あくまで理想の話なんですが、そういうふうに描ければいいなと思いながらやってましたね」

――特に奥寺先輩は、媚びた女性というわけではなく、茶目っ気や飾らなさも色気に繋がっているキャラクターで、難しさがありますよね。

「例えば、変にくねらせたポーズで描いたりはしないほうがいいとは思いましたね。それでありながら色っぽいなって思える感じをどうやって出していくか、表情を含めて考えました。最初に奥寺先輩が登場してきたときっていうのは、観客側も瀧の主観に乗っかっていて、分かりやすく華やかで色っぽい女性が登場したという感覚で見ていると思うんですね。だからそこでは色気のある女性の部分をより分かりやすく強調して描き出さないといけない。でもそれ以降、お話が進んでいくにつれて、瀧の気持ちとともに奥寺先輩の見え方も変わってくるわけです。そうしたときに、結構あっけらかんとしたところだとか、さばさばした感じもあるんだとか、おしゃれで派手っていうところだけじゃないかわいらしさも意識しながら描いていくと、ちょっとしたギャップみたいなものを観客側も味わえて、奥寺先輩自身にも幅が出てくるのかなと。特に瀧と司との3人旅のところは、あどけない部分も出しちゃっていいんじゃないのかなと思いながらやってました」

メジャーの〈ものづくり〉その意志を感じさせる作品

――あらためて新海さんの仕事についてはどう感じられましたか?

「『ほしのこえ』に始まって、これまでの作品も好ましく観させていただいていたんですが、『君の名は。』でいよいよメジャーな作品の中に入ってきたという感じがしますよね。一般の人たちに受け入れられやすい作品になっているなと。これまでの作品はなんだかんだ言ってマイナーレーベルの作品の作り方・見られ方だった気がするんですよ。ただ、それだから良かったというところもあって、そこが新海さんの良さでもあったんだとも思うんですよね」

――マイナーだからこその強みというのも確かにありますよね。

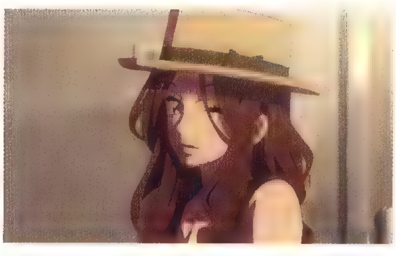
「インディーズで作っていることの良さって、未完成であることの良さだと思うんですよ。それがこれまでの新海さんの良さでもある。ある程度、限られた場での興行ということも含めて、インディーズであるからこそやりたいことが重要になってくる。それがどこまでやれているかではなくて、それ以前にやりたいことがそこに込められているかどうかがインディーズの大事な点で強みだと僕は思うんです。これまでの作品ではそこが存分に発揮されていた。その中で今回の『君の名は。』という作品に関して言えば、変に背伸びをすることなく、新海さんの手が届く範囲でメジャーを志向した〈ものづくり〉ができているなっていう感触がありますね。非常にいいバランスでできあがっていると思います」

――いろんな意味で違う領域に入った作品だと言えそうですよね。

「表現したいことや技術面もあわせて、それをどこまで達成することができているかがメジャーという場においては必要になってくる。ただ、やりたいことがそこに込められていればいい、未完成であることがいいという感覚ではもういられないところに新海さんもいよいよ入ってきたんだなと。ちゃんと残っていくものを作るということでもあるんですが、それこそ、そこで表現したかったことや技術面も時とともに色褪せていくということが当然起こるんですよ。だからこそ、その中で精一杯やれていたかどうかが重要で、最大限のところで作ろうとしたものだけが作品として残っていく。『君の名は。』もその意志を感じさせる作品になったんじゃないかと思いますね」

MASASHI ANDO

1969年生まれ、広島県出身。1990年、研修生の二期生としてスタジオジブリ入社。宮崎駿監督作品『もののけ姫』(97年)、『千と千尋の神隠し』(01年)で作画監督を務める。2003年、フリーとなって以降もジブリ作品や今敏監督作品などで才能を発揮。『思い出のマーニー』(14年)で14年ぶりにジブリ作品の作画監督を務め、脚本も担当。キャラクターデザイン・作画監督を務めた作品に、『パプリカ』(06年)、『ももへの手紙』(12年) などがある。





【キャラクターデザイン】

田中将賀 インタビュー

新海誠という作家性のもとで、想いを湛えた艶やかなるキャラクターデザインの力を発揮した田中将賀。都心と山の中の町、それぞれの地に瑞々しく息づく人々のかたちとそのこだわりを聞いた。

取材・文＝ワダヒトミ　写真＝首藤幹夫



現場に求められた コミカルとシリアスの均衡

——完成した映画をご覧になって、どんな想いを持たれましたか？

今回、僕は、スケジュールの都合でキャラクターデザインのみの関わりでした。作画監督は安藤雅司さんにお任せするかたちになったのですが、安藤さんといえば、僕にとっては雲の上の人なので恐縮でしたし、とっても贅沢なお話だと思いました。ただ、やはり僕もデザイナーというよりはアニメーターなので、自分で作画監督を手がけられなかったということに対して、正直、期待と不安の両方があったんです。でも、蓋を開けてみたら、遥かに良い部分が上回っていて。デザイナー冥利につきるというか、上映の間、幸せでリッチな時間を過ごさせていただきました。あと、いち新海監督ファンとしてしみじみ思ったのは、新海さんってホント頑固な人だよな、ということ。バジェットだったり体制だったり、何が変わろうと一途というか、自分が描きたいものを徹底的に描く。この人はやっぱり「作家」なのだなあ、とあらためて感じさせられました。

——田中さんの新海監督との出会いはどんなものだったのですか？

作品との出会いは、『ほしのこえ』ですね。当時、関わっていた大地丙太郎監督の現場で「すごいよ、これ」と話題になっていて。その後も作品が発表されるたびに、気にしていたのですが、実際にお会いできたのは数年前。きっかけは、『劇場版 あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』と『言の葉の庭』の公開時に行われた新海さんと長井龍雪さんの対談でした。そのとき長井さんに「新海さんに会ってきたぜ」って自慢されて（笑）、それで新海さんと共通の知人というか、双方の作品の主演をしていた入野自由くんが食事会をセッティングしてくれたんです。メンバーは、新海さんと長井さんと入野くんと僕の4人。話が弾んで、実はZ会CMの『クロスロード』への参加は、その場の勢いで決まったんですよ。新海さんが「ぜひ一緒に仕事しましょうよ」といってくださって、僕も「今ヒマなので、やりますよ！」なんていって。

——政治的な話とはまったく関係のないところで固まったタッグだったのですね。

当人同士で勝手に盛り上がったのはいいけど、ほんとにこれ出来るの、みたいな。ちなみにそのとき、もうひとつ決まったのが、入野くんのラジオに出よう！ということでした。みんな、出る出るっていってたんだけど、スケジュールが合わなかったのか、結局出たのは僕だけだったのですが（笑）。

——今回のキャラクターデザインは、どのように進んでいったのでしょう。

シナリオ会議の段階から参加させていただいていて、新海さんが目指しているものを吸収していったのですが、とにかくコミカルなシーンをやりたいんだ、といっていたのが印象的でした。結果的に、それが今回の一番のポイントになっていると思うし、僕を呼んでくださったのも、そのコミカルとシリアスのバランス感みたいなところを買っていただいたからじゃないかと思っていて。なので、デザイン案を起こす際にも、その部分は、かなり意識して描いていきました。そこは、安藤さんもすごく汲んでくださっていて、僕が描く崩し顔とか、そのニュアンスを相当研究してくださったんじゃないかと感じていまして、すごく光栄でした。

——実写の脚本家が役者を特定して当て書きをするように、田中さんの描くキャラクターやその表情に対して当て書きをするようにシーンが生まれていった、みたいなところもあるのでしょうか。

新海監督は違うっていうかもしれないですけど、そんな感じはちょっとあるんじゃないかな、と感じています。それこそ『クロスロード』のときも、僕がアドリブで入れたコミカルな芝居をとくに気に入ってくださっていたんですよね。それは僕の

中では仕事の一環として自然にやっていたことなんですけど、新海さんやコミックス・ウェーブ・フィルムさん側の反応が思いのほか大きくて。あ、この現場ではこの辺に自分の役割があるのかもしれないな、と肌で感じていた部分ではありましたね。

作品世界に息づくキャラクターのかたち

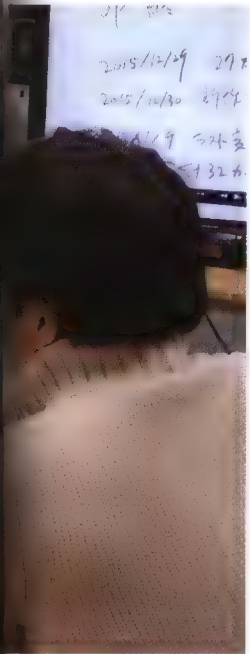
――主人公の瀧のデザインは、どのように生み出されていきましたか?

新海監督の主人公の男の子には、繊細さが際立っているタイプが多いと思うんですけど、でも、今回新海さんは、そこからさらに、もうちょっと踏み込んでいきたいんじゃないだろうか、と思ったんですよ。僕の絵を使うことで、強さというか、がさつさみたいなものを内包して、その上で、その身体に三葉の魂が入っても気持ち悪くならない中性っぽさも意識する、みたいな。瀧は、そんなイメージでつくっていったのですが、ただ、そういう意味では、最終的には、神木さんのお芝居に救われている部分も非常に大きいと思いますね。僕も一日だけアフレコに参加しまして、そのときに、神木さんも上白石さんも本当に勘が良いなあと驚かされまして。実写畑の役者さんの場合、生っぽさが出過ぎてしまうことがありますけど、ふたりに関しては、生っぽい存在感もありつつ、アニメとしてのキャッチーさみたいなものもちゃんと兼ね備えていて、とても良いバランスでしたね。

――もうひとりの主人公、三葉はい



田中将賀によるOP作監修正画像





新海監督と打ち合わせをしている田中さん。

かがですか？
　もともと組紐というのが物語の重要なファクターになるというところで、それをいかにさり気なく身につけさせるかというところから、進んでいきました。髪につけようということに決まったので、そこから髪型を考察して。目指したのは、ちょっと目を引くけれど、まわりから浮きはしない髪型。それで、変形のポニーテールに落ち着きました。三つ編みからまとめて結うイメージは作っていたのですが、具体的なまとめ方は安藤さんの方で作っていただきました。

――瀧と入れ替わったときには、髪型が変わりますね。

　瀧には三葉と同じように髪を結わくことはできないだろうから、せいぜいポニーテールくらいだよねって発想から、ボサボサなひとつ結びの三葉が生まれました。パッと見で三葉と瀧が入れ替わっているということもわかりやすいですし、気に入っています。やっぱり女の子は髪で遊べるのでバリエーションが出せていいですね。それに、揺れモノがあると、画面づくりにも華を持たせられるますから。

――三葉の場合、後半にはさらに髪を切ったりします。

　髪型、どんどん変わりますよね。髪を切るときには、ざん切りにするか、ボーイッシュなショートボブにするか、みたいなところで話し合った記憶がありますね。現場的なことをいうと、ボブってけっこう難しいんですよ。髪に動きをつけるときに、アニメーターさんの感覚の個人差が如実に出てくるところなので、作画が安定しづらいという側面があって。でも、新海さんのイメージはやっぱりバッサリ切ったまんまな感じのボブだということで、現在のかたちになっています。

――そのほかのキャラクターについても教えてください。

　たぶん僕の画のクセが一番強く出ているのが奥寺先輩じゃないでしょうか。彼女の立ち位置って、いわゆるマドンナじゃないですか。なので、服装も含めて相当気をつかってデザインしています。そのニュアンスが本編でちゃんと出るかな？　って不安もあったんですけど、もう本当に見事に描いてくださっていて。あがってきた映像を見て、テンション上がりまくりでした。奥寺先輩、すげえかわいい！　って。アフレコ見学しているときに、思わずそう口にしたんですけど、まわりの人は、演じている長澤まさみさんのことを僕がかわいいっていってると思ったらしい(笑)。いや、長澤さんがかわいいのはもちろんなんですけど、でも、フィルムの中の奥寺先輩に感動しましたね。

――年相応の女性らしいメイクやファッションが印象的でした。

　アニメのキャラに口紅をつけること自体が、けっこうリスキーなことなんです。アニメ的なデフォルメした線にマッチしたメイクというのはとっても難しくて。唇をちゃんと立体的に捉えなきゃいけないし、一歩間違えると一気にケバくなってしまうし。でも、ここも想像以上に、美しく表現されていて、しっかりマドンナ感が出ていたので嬉しかったです。あと、奥寺先輩のポイントは、目にかかる前髪ですね。あの角度、あのラインというのが大事。ただ、これって理屈ではなくデザインの感覚なので定義づけしづらい部分でもあって、そこまで捉えてくださ



三葉のお父さんは「もっとラスボス感を！」と新海さんから指令を受けました。



るアニメーターさんは少ないんです。でも、さすが安藤さんはそんなのはお茶の子さいさいという感じで、きっちり落とし込んでくださいました。小さな仕草だったり、煙草など小物のチョイスだったりも、本当、上手いなあって。

――瀧や三葉の友人たちも活き活きとしていて魅力的です。

司や高木は、僕がこれまで描いてきたキャラの延長にあるデザインですね。司は都会の象徴みたいな感じではあったので、やや斜に構えた感じもあって理知的で。で、高木は、ぽっぽ（『あの日見た〜』の登場人物）のイメージ。ふたりが歳をとったときの設定も、大きな変化は加えず、もとの印象をそのままスライドさせて描いています。糸守サイドでこだわったのは、まず、勅使河原でした。新海さんの中では最初からイメージは固まっていたようなんですけど、あえてそこを潰してみようとしたり。ヤンキー風でちょっとリーゼントはいってるキャラクターを描いてみたんですけど、見事に却下されました（笑）。坊主キャラも好きなので、楽しく描けましたけどね。田舎の女の子の象徴を担ってくれたのは、早耶香でした。三つ編み感とか含めて、僕の中のカントリーガールなイメージを込めました。……でも、今気づきましたけど、よく考えたら、糸守側の女の子たちは、三葉も妹の四葉も早耶香も、かたちは違えど、みんなふたつ結びですね。三葉もふたつに分けたものをまとめているわけだし……。と思うと、ヴィジョンに芸がないな、おれ！ そっかあ、ちょっとショックです（笑）。

――いろいろな年代のキャラクターを描くという点では、ポイントはありますか？

お父さんが3人登場したんです。三葉と瀧と勅使河原の父親。これだけのおじさんたちを描き分けるチャンスって、そうそうないので、これは楽しかったですね。それぞれの親と子の遺伝子的な繋がりも意識していきました。三葉のお父さんは町長さんなので、愛想の良い感じが良いんじゃないかと思ったんですけど「もっとラスボス感を！」との指令を新海さんから受けまして、厳格な感じを出してダンディめにまとめていきました。

ここにしかない現場 ここにしかない画づくり

――この作品に関わられたことで、得た刺激とは？

脚本からディレクションまでを手がけ、作家性で勝負されている監督と組むのは新海さんがはじめてでしたので、彼の中にある明確なヴィジョンというものに触れられたのが刺激でしたね。普段お会いすると、ふわっとした感じの方なんですけど、ここは譲れないというところの粘り強さはものすごい。しかも新海さんの場合、撮影などのコンポジットの部分まで深く見ていくわけで。だからこそ、あの稀有な画が出来上がるのだ、と納得させられました。それから、いちアニメーターとしては、安藤さんのお仕事ぶりから、大変勉強させていただきました。安藤さんは本当に真摯に作画に向きあう方で、ひとつひとつのカットへの踏み込みの深度が違う。僕ももう四十になるのですが、初心というか、こうありたいというひとつの憧れを思い出させていただきました。

――最後に、田中さんの想う新海監督作品の魅力を教えてください。

僕がいうと、逆説的になるのかもしれないんですけど、新海監督の魅力は、キャラクターや作画に頼らなくても、しっかり作品をつくり上げられるところだと思っています。それは、ひとりで作品をつくりはじめた新海さんの起点にすべてが集約されているんだと思うのですが、きっと新海さんの芯にあるものは、そのころと変わっていない。それが強みだし、だからこそ、また一緒に仕事ができたらいいなと願っています。

MASAYOSHI TANAKA

1976年、広島県生まれ。'98年、アニメーターデビュー。2006年、テレビアニメ『家庭教師ヒットマンREBORN！』で初めてキャラクターデザインを務める。'08年、長井龍雪（監督）、岡田麿里（シリーズ構成）とタッグを組んだテレビアニメ『とらドラ！』でキャラクターデザイン・総作画監督などを務める。また同タッグで、テレビアニメ『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』（2011）、同作劇場版（2013）、映画『心が叫びたがってるんだ。』（2015）と人気作を世に送り出した。





COLUMN 2

制作中のスタジオ、訪問!

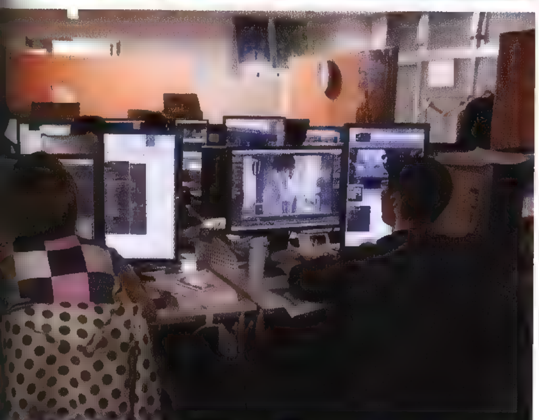
完成披露試写まで残りわずかとなった6月末、
『君の名は。』が作られているスタジオを訪問。
あの緻密かつ繊細な映像はいかにして作られているのか——。
制作過程とともに作業の様子を紹介！

取材・文＝倉田モトキ　写真＝首藤幹夫

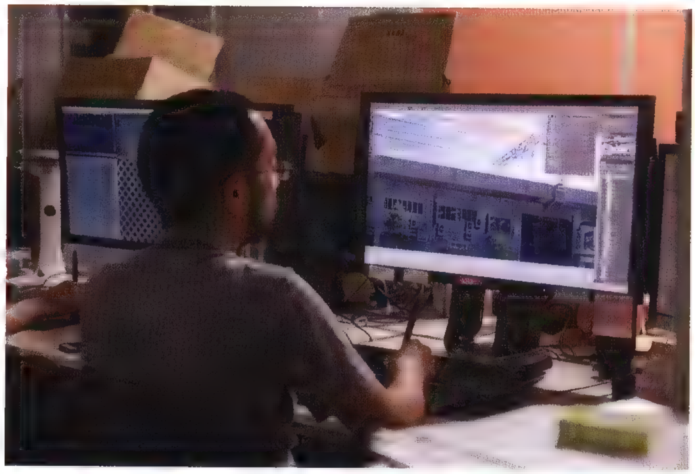


撮影スタッフエリア





撮影部では各スタッフがモニタを2台使って作業を行っている。縦向きのモニターがあるのはタイムシート（セリフのタイミングやカメラワークの指定などが書かれた指示書）を閲覧しやすくするためだそうだ。

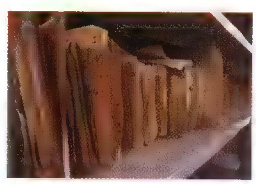






美術スタッフエリア

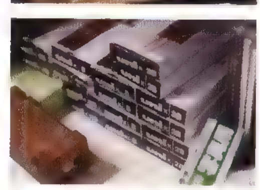
美術・撮影部のエリアは、モニタに映り込む光の影響を避けるため、部屋の明かりも暗めに設定している。











棚に並べられた封筒にはカットごとに整理された作画が収められている。近くには作画作業には欠かせない鉛筆や、色鉛筆の山が。いろいろな芯の種類が用意されている。

スタジオに入ると、20名以上のスタッフがいるとは思えないほど、物音がほとんどしない。完成目前の山場ということもあり、皆黙々と作業に没頭していた。部屋の中は広い空間に整然とデスクが並べられ、入り口から見て手前から「美術部」、中央に「撮影部」、奥に「作画部」という配置になっていた。それぞれ、アニメーション制作には欠かせないセクションが集まっている。

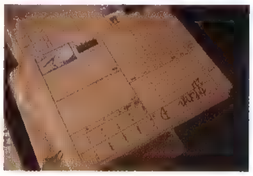
この日、「作画部」では、新海監督や作画監督・安藤雅司さんのチェックが通った〝原画〟を元に、〝動画〟を担当するスタッフが作業を行っていた。繊細な線を拾い上げ、緩急をつけた気持ちのいい動きを作画していく。「美術部」は美術背景を制作する





アニメーション制作の第一歩となる作画部門。修正用紙に書かれた監督の指示も「このカットから、少し強めの表情を見せてあげたいです」といったような細かな感情の動きに対するものが多かった。

作画スタッフエリア

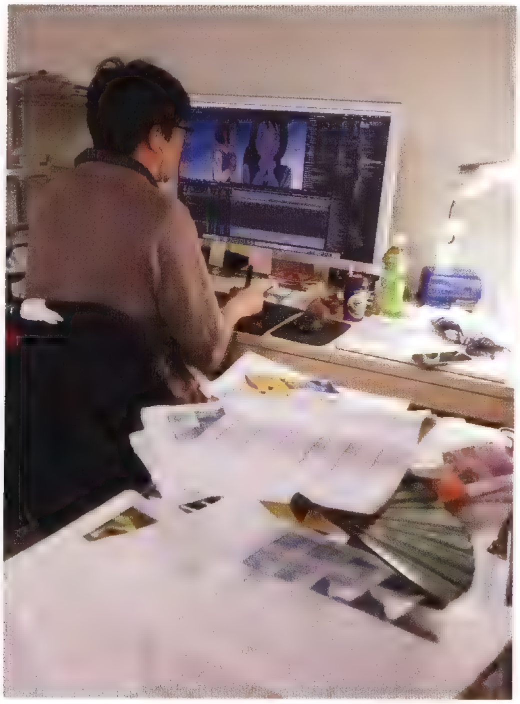


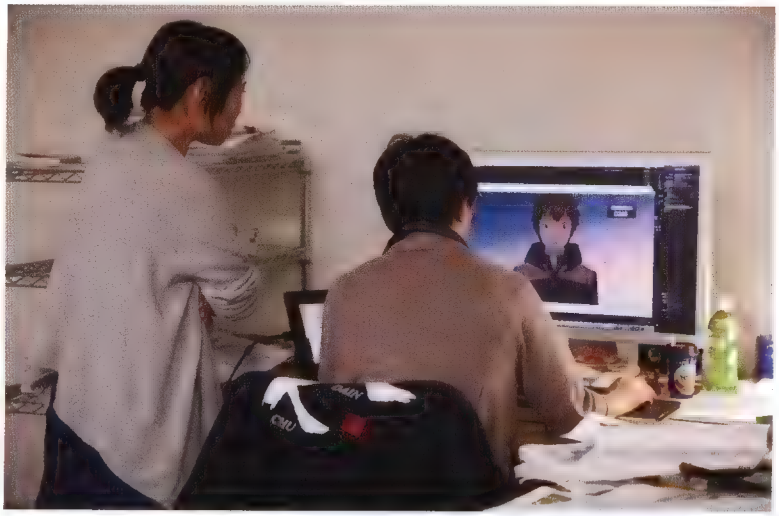






すべての作業に監督自身が細やかな指示を入れるこだわりが唯一無二の"新海誠ワールド"を作り出している





スタッフと制作中の映像を確認しながら打ち合わせをする新海監督。机の周りにはすぐに確認できるように、絵コンテや資料が山積みになっている。



監督エリア

る部署。『君の名は。』では、『雲のむこう、約束の場所』からともに美術を支えてきた美術監督らが率いる美術スタッフ達が、新海作品を語る上で欠かせない背景美のクオリティを保っていく。それらを合わせ、完成へと仕上げていくのが「撮影部」の仕事となる。"新海マジック"と称される、空気感や光を始めとする効果を加えていく他、通常では行われない、セルの色を調整し、背景や光との一体感をより持たせることも行われている。

一般的なアニメーション制作現場と大きく異なるのは、新海監督自らもこの撮影に加わり、手を加え仕上げる点だ。このように、映画『君の名は。』は、各部署の丁寧なこだわりの積み上げで作られている。

［音楽］

RADWIMPS

インタビュー

新海監督からの熱いラブコールで今回の劇伴と主題歌を担当することになったRADWIMPS。
彼らの音楽なしでは成立し得なかったと感じさせるほどの楽曲はいかにして生まれたのか――。

取材・文＝倉田モトキ　撮影＝首藤幹夫



真っ直ぐ、逃げず、真正面から勝負をする。それが監督と交わした大きな約束





"美しくもがくよ"という歌詞には、
僕が瀧と三葉に感じたすべてが詰まってます
（野田）

始まりは面白いことが起こりそうな期待感から

——今回の参加は、野田さんと企画・プロデュースの川村元気さんがお知り合いだったことが、ひとつのきっかけにもなっているそうですね。

野田　ええ。2年前の秋に川村さんから僕のケータイにメールが届いたんです。川村さんと新海監督が『君の名は。』の劇伴をどうしようかと話し合っているときに、監督の口から好きなバンドとしてRADWIMPSの名前が出たそうで。それで、"一度会ってみないか"とメールに書いてあり、数日後に実際にお会いすることになりました。

——そのときの心境は？

野田　めっちゃ緊張してました（笑）。ただ、新海監督に関しては、とても優しく、言葉を大事にして会話をされる方だなあという印象でした。

——その時点で、映画自体はどの程度できあがっていたのでしょう？

野田　まだ脚本だけでした。文字だけだと少し難解で、全体像が把握しきれなかったんですけど、監督がお話しくださった説明を聞いていると、過去の新海作品とは違い、さらに一歩、二歩先のステージに向かおうとしているのが伝わってきて。僕としても、"これからすごく面白いことが始まるんじゃないか"という期待感に包まれたのを覚えてますね。

——武田さんと桑原さんは、今回の話を聞いていかがでしたか？

武田　僕、アニメが大好きで、新海監督の作品も『ほしのこえ』から全作品を観ていたんです。ですから、最初はすごく驚きました。"え、こんなことってあるの？"って（笑）。

桑原　僕も嬉しかったんですけど、正直、いまいち事態が飲み込めなかったところもありました。そもそも、監督を含めた最初の打ち合わせからして、レコード会社のものすごく広い会議室に呼ばれて、そこでまずびっくりしちゃって（笑）。制作中の映像を見ながら、監督が「ここにはこんな音楽が欲しいです」、「全体で26曲ぐらい必要になります」という説明をしてくださるんですけど、情報を処理するスピードが全然追いつかなくて、途中からまったく頭が回っていませんでした（笑）。

野田　だって、3〜4時間あった打ち合わせで、2人ともひと言もしゃべんなかったもんね。さすがにあのときは、あとで怒りましたよ。「君たち、やる気あるのかい？」って（笑）。

武田　いや、洋次郎から事前に話は聞いていたけど、あそこまでスゴいことになっているとは思わなくて（苦笑）。

野田　あの日の会議のメイキング、見てみたいよね。きっとどんどん冷や汗かいて2人が見られるよ（笑）。

監督が創りだす世界観とRADの音楽は似ている

——ヴォーカルの入った"歌モノ"が4曲ありますが、これらの楽曲はどのように作られていったのでしょう？

野田　最初は、脚本と監督との打ち合わせ内容を基に、3〜4曲ほどを形にしていきました。それが昨年の2月。まだ完成形ではなかったんですが、そのときの断片は『前前前世』と『スパークル』として残っています。

——この4曲という数は最初から？

野田　はっきりした数字を提示されたわけではないんですが、歌モノをたくさん入れたいという構想は初めから監督の中にあったみたいです。

桑原　絵コンテを見させてもらったら、ところどころにRADの既存曲のタイトルと一緒に、「この場面は、こういう感じの曲で」というメモが貼り付けられていて。相当明確なビジョンがあるんだなと感じました。

——では、曲作りをされるときも、最初に監督から具体的なイメージを伝えられて……？

野田　いや、それはなかったです。きっと具体性を持たせて、僕らの創造の幅を狭めたくなかったんだと思います。それに、ＲＡＤの曲への熱い想いはたくさんうかがっていて、例えば監督の「小さな世界から一瞬で宇宙まで広がり、そこからまた戻ってくるような壮大な感じが好きなんです」といった言葉は、監督が創りだす作品の世界観と似ているなと感じたし、そうした会話の中から監督が求めている音楽をキャッチするのが僕らの役割だと思っていました。

桑原　そう言えば、監督自身も「ＲＡＤの『ふたりごと』に出てくる〝一生で一度のワープをここで使うよ〟という歌詞は今作の世界観とリンクする」って話していましたね。それを聞いて、僕らがこの作品に呼ばれた理由が分かった気がしました。

武田　それに、新海さんと洋次郎って感性というか、モノづくりをするうえでの根っこの部分が似ている気がする。頑固なところも2人ともすごく似てるしね（笑）。

——監督と同じ温度感覚を持っているというのは、曲を作る上で大きなメリットになりそうですね。

野田　そうですね。ただ、簡単にはいかない大変さもありましたけど。

——それは例えば……？

野田　たくさんありすぎてちょっと絞れないんですが（笑）、歌モノに関して言えば、全部で12曲ぐらいデモを作って、そこから最終的に今回の4曲になったんですね。残りの8曲は単純に監督のイメージに合わなかったから弾かれたのですが、監督からよく言われたのが、「真っ直ぐに、逃げず、ブレず、真正面から勝負して欲しい」ということでした。

というのも、僕は最初、英語の歌詞の曲も作ったりして、いろんな角度から作品を彩っていければいいかなと考えていたんです。でも監督からしたら、それは僕が逃げているように感じたそうで。確かに、僕の中にはド直球で勝負することに、どこかこそばゆさがあり、さらには僕なりの美学もあって、曲をちょっとオシャレにしようとしたり、粋な雰囲気を出そうとしてました。でも、そのたびに監督は、「あともう一歩強く前に出ませんか？」と僕を鼓舞してくるんです。たまに〝この関係性はなんだろう？〟って思うこともありましたが（笑）。ただ、ドキッとさせられたのが、あるとき、「野田さんが恥ずかしいと思われていることをされても、野田さんの気品は絶対に失われることはありませんから」と言われたんです。それがまるで自分のすべてを見透かされていたようで、あまりに衝撃的で。その監督の言葉にはずいぶん助けられて、おかげで最後まで迷うことなく、曲作りができたところがありますね。



監督が語るRADWIMPSへの熱い想いを聞いて、
僕らがこの作品に呼ばれた
理由が分かった気がしました
（桑原）

歌詞を聴かせるために アニメを作り直すことも

——歌詞に関しても、何度かリテイクを重ねていったのでしょうか？

野田　作詞で監督から修正をお願いされることはほとんどなかったです。

桑原　むしろ、歌詞をすごく大事にしてくれて、曲に合わせて映画の画を作ることがあったぐらいでした。

野田　あれは最初驚きましたね（笑）。「ここの歌詞を聴かせたいので、このセリフカットします」とか、「ここ、曲に合わせて20秒延ばすことにしました」とか。逆に僕らのほうが、〝20秒延ばすのに画が何枚増えるんだろう？〟って心配したりして（笑）。

武田　一番驚いたのは今年の2月に言われた変更でした。それも、ものすごく大事なシーンで。

野田　あ〜、そうだね。映画のラスト近くの、三葉が手の平に書かれた瀧からの「すきだ」という字を見る場面で『スパークル』が流れるんですが、そこに大きな変更があったんです。そのときはもう劇伴のレコーディングは終わっていて、僕らはア

ルバム用の曲として、歌詞を追加したり、アレンジを加えたりっていう作業をしていたんですね。そしたら、その変更後の曲を聴いた監督が、「そっちの歌詞をください！」と言ってきて（笑）。それに合わせて僕らももう一度、劇伴を修正し直す必要があったので、もうバタバタで（笑）。

桑原　大変でしたけど、監督の曲や歌詞へのこだわりが伝わってきて、楽しかったですね。

――監督はRADさんの歌詞に強く惹かれるところがたくさんあったそうで、監督が書かれた小説版には歌詞から引用した"うつくしく、もがく"（『スパークル』）といった章題や、"あとすこしだけでいい。もうすこしだけでいい"（『なんでもないや』）という言葉が使われています。

野田　そうなんですか!?　それは知りませんでした。嬉しいですね。

――とくに"あと少しだけ～"のフレーズには、どこかしら終わりを孕んだ世界観があり、これこそが自分が描きたかったことだと気づかされた、とおっしゃっていました。

野田　なるほど……。でも、確かにこの"あと少しだけ"という刹那的な感覚は新海作品と僕らの曲に共通するところだと思います。消えることが決まっているからこそ燃えている美しさがあるというか。それは人が生きていくうえで必ずどこかしらにある感覚だと思いますし、むしろその感覚を忘れてしまったときに人は怠惰な生き方になってしまう。だからこそ、たとえ終わりを孕んでいても"あと少しだけ"という気持ちを持ち続けることが大事だと思うんですよね。

――それは"美しくもがくよ"の歌詞にも共通する感覚ですね。

野田　そうですね。この歌詞は、僕が感じた瀧と三葉の姿を言葉にしたものでした。圧倒的な純粋さで何かに向かっていく姿や、何の打算もなくただただピュアに目的を目指す――。そうした人たちの姿を見ると、僕は無条件に美しいなと感じるんです。2人にはそれを強く感じたし、自分もこうありたいという憧れの気持ちを込めて、この『スパークル』の歌詞は書いていったんです。



洋次郎と新海監督はモノづくりをするうえでの根っこの部分がすごく似ている。かなり頑固なところも（笑）
（武田）

やるからには劇伴のプロと同じ土俵で戦いたかった

――今回、桑原さんと武田さんも作曲をされています。どのような点を意識して作業されたのでしょう？

桑原　僕が担当したのは、カフェのシーンや奥寺先輩のテーマなど日常的な場面の曲が多かったので、なるべく耳につきすぎず、いい意味で右から左へ流れていくような音を目指して作っていきました。また、ほかの曲にバンドっぽいサウンドがあまりなかったので、あえてここでギターをたくさん使うようにもしました。

武田　僕は逆に、瀧たちが糸守を探しに行く、いわゆる"どろ～ん"とした場面が多かったんですよね（笑）。そのときの感情や情景をいかに音で表現できるかが勝負でしたので、まずはシンセなどを使って、"これはちょっと怖いかも"という音をひたすら集める作業から始めました。

桑原　お互い、まずはそうやって土台となる曲を作っていき、次に洋次郎に聞かせて、最終的に監督に判断していただくという流れでした。

――野田さんは上がってきた曲を聞いてどんな印象をもたれましたか？

野田　2人とも根が素直でまっすぐなんですよ。そのせいか、最初の頃は映画の世界観に寄せようとするあまり"自分たちらしさ"を見失っている感じがしたので、「RADがやる意味はしっかり残していこう」という話はしました。ただ一方で、僕らの中のテーマとして、"バンドが劇伴を作ると、やっぱりこんな感じになるよね"って思われるような曲は作りたくないという気持ちも強くあったんです。やるからには、劇伴を専門にされている方たちと同じ土俵で戦

〝あと少しだけ〟という刹那的な感覚は新海作品と僕たちの音楽に共通するもの

いたかったし、そうじゃないとやる意味がないと思って。ですから、へンなこだわりや自分たちを縛っている制約を一度全部取っ払って、純粋に〝この場面に合うメロディや楽器はなんだろう〟というところから考えて作るようにしていました。

――音に関して監督からの要望はあったのでしょうか?

野田 オーケストレーションが好きだという話は聞きました。僕もずっと興味はあったんですが、これまであまり挑戦する機会がなかったので、これを機にいろいろ試してみました。それとお互い、今回は全体的にピアノがキーになるだろうなというのが共通した認識としてありましたね。

――特にピアノにこだわった曲といいますと?

野田 アルバムの10曲目に入っている『デート』なんかはそうですね。瀧と奥寺先輩がデートするシーンで流れる曲なので、最初は楽しそうな音で作っていったんです。そうしたら、監督から「途中に三葉が2人のことを考えて思わず涙を流す場面も差し込まれるので、そこも意識してください」と言われて。それで、ピアノで少し切ない雰囲気も盛り込んだところ、監督がとても気に入ってくださったんです。そこからピアノの曲がどんどん増えていきましたね。

――ピアノはすべて野田さんが演奏されているのでしょうか?

野田 はい。僕としては、この『デート』だけはどうしても自分で弾きたくって。でも、ほかを別の方にお願いすると、統一感がなくなりそうな気がしたので何とか頑張りました。

武田 ホントに頑張ってたよね。驚いたのが、「これはちょっと弾けないかなぁ」って言ってた曲も、数日後には完璧に弾けるようになっていて。

野田 そうだったね。まぁ最後の方は意地になってたんだけどね(笑)。

監督から長文メールで届く嬉しい感想とドライな注文

――桑原さんと武田さんが大変だと感じたのは、どのような点でしょう。

桑原 やっぱり監督の曲へのこだわりですね。本当にすごかったです。

武田 何度も作り直したもんね。

桑原 洋次郎がOKを出しても、監督から変更のオーダーがきたときの絶望感ったらなかった(笑)。

――一度イメージとして出来上がった音をリセットさせて、またイチから作り出す作業になるわけですから、頭の切り替えが大変そうですね。

桑原 いや、もう全然切り替えられなかったです(笑)。

野田 だって、途中からの2人の小言と愚痴は半端なかったですよ(笑)。

桑原・武田 ははははははは!

野田 まず、僕らは曲ができると、10曲ぐらいまとめて監督のもとへ送るんですね。すると、しばらくして通信簿のように返ってくるんです。

武田 それも、それぞれの曲に対して、ものすごく細かい内容のものが。

野田 文章の前半は長~い感想が書いてあって、褒めてくださっているんですけど、後半は一転してドライな注文ばかりで(笑)。しかもそれが20往復ぐらい続くもんだから、だんだん僕らも何がなんだか分からなくなっていって(笑)。

桑原 もう、最後のほうは文章の内容が難しくて、「これ、どういう意味だと思う?」って、みんなで確認し合っていました。「OKってこと? それともやり直しなのかな?」って。

武田 解釈が人によって違うし、受け取り方を間違えると、また大変なことになっちゃうからね。

――なるほど……いつまで経っても、終わりが見えない感じなんですね。

野田 監督は自分の想いを全部伝えたい方なので、どうしても文が長くなるんです。その一方で、僕らはまた曲を跳ね返されるんじゃないかと、監督からのメールを開くのがどんどん憂鬱になっていって……(苦笑)。あ、でも、そう言えば〝跳ね返し返し〟っていうのもありました。「絶対に、この場面にはこの曲がいいと思います!」とお伝えして、僕らの意見を通させてもらったんです。

――それだけ時間をかけて、こだわりも詰めていく作業は、互いに信頼関係がないとできないことですね。

野田 そうですね。もちろん作業をしていく中で〝イラッ〟とするメーターが上がることもあります(笑)。でも、同時に〝嬉しいメーター〟や〝ありがとうメーター〟が上がることもある。しかも、最後の最後にはそれらのすべてを上回ってくる監督の情熱に僕らも刺激されるので、どんなに大変でも、「よし、やるぞ!」という気持ちになるんです。

――そう言えば、武田さんと桑原さんは、アフレコ現場の見学に行かれた際に、声の出演もされたとか?

桑原 そうなんです。絶対に気づかないと思いますけど(笑)。

武田 教室で「今度ライブやるんだよね」っていう会話をしている高校生と、後半の糸守町が停電になったときに、「どうなっとるんや~」「結局待機かぁ~」ってしゃべっている消防団員たちの役でした。たった数秒のシーンなのに、30分以上かかっちゃって。すっごく緊張しましたね(笑)。

――では最後に、完成した映画をご覧になった感想をお聞かせください。

武田 もう、鳥肌が立ちっぱなしでした。多くの方に薦めたくなるし、見て欲しいと思える作品でしたね。

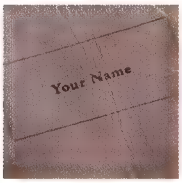
桑原 僕も、自分が劇伴で携わったからというのではなく、純粋に感動して涙が出てきました。

野田 好き勝手なことをいう声が飛び交う今の時代に、これだけ真っ直ぐなラブストーリーを描くのは、とても覚悟がいることだと思うんです。それを形にした新海監督のブレない芯の強さや情熱を強く感じましたし、稀有な作品だからこそ、今の時代に必要な作品だなと思いました。ぜひいろんな方に、音楽も含めて楽しんでいただきたいですね。

RADWIMPS

ラッドウィンプス●野田洋次郎 (Vo./Gt./Pf.)、桑原彰(Gt.)、武田祐介(Ba.)。2001年結成、2005年メジャーデビュー。ロック・ジャズ・ヒップホップから民族音楽まで既存のジャンルにとらわれない音楽性と、恋愛から死生観までさまざまな側面を言葉でつむぐ歌詞がクチコミで広がり、思春期を過ごす世代を中心に大きな支持を得ている。デビュー10周年を迎えた2015年には、幕張メッセで3万人強を集めるワンマンライブを成功させた。

初回限定盤
CD+DVD+BOOK
LPサイズ　6400円+税
UPCH-29222



通常盤
CDのみ　2700円+税
UPCH-20423



New Album
Your Name

RADWIMPSが初めて手がけたサウンドトラックアルバム。ヴォーカルの入った『前前前世 (movie ver.)』『夢灯籠』『スパークル (movie ver.)』『なんでもないや (movie edit./movie ver.)』をはじめ、全27曲を収録。限定盤にはメンバーと新海誠監督の特別対談やレコーディング風景、野田洋次郎による『三葉のテーマ』『秋祭り』のピアノソロスタジオライブなどの映像が収められている。

【脚本協力・外伝小説】

加納新太 インタビュー

脚本協力として『君の名は。』に参加してきた加納新太。新海監督の次にこの映画の本質を熟知しているとも言える彼が描く"外伝"とは——。その制作秘話を余すことなく語ってもらった。

文＝倉田モトキ



角川スニーカー文庫

脚本で削られたアイデアをもう一度復活させたかった

——はじめに、今回のアナザーストーリーを書くにいたったいきさつから教えていただけますでしょうか？

KADOKAWAの編集者さんから、「外伝を出しませんか？」とお話をいただいたのが最初でした。実は『君の名は。』には脚本会議の段階から参加させてもらっていまして、新海さんのシノプシスをもとに僕が第一稿の脚本を書いたりと、早くから携わっていたんです。ただ、最終的に新海さんが脚本を書き上げていく中で削られてしまった僕のアイデアもいくつかあり、それを復活させたいという思いもあって、この機会に僕の視点で描く『君の名は。』を書かせていただくことにしました。

——映画本編にはないエピソードが随所に盛り込まれていますが、事前に新海監督から物語の方向性の指示や意見などはあったのでしょうか？

それはまったくなかったんです。「これは違うよ！」「でもこういう意図があるんですよ！」みたいな丁々発止があったら面白かったかもしれませんけど(笑)。新海さんは、ノベライズに関しては一度この人に任せると決めたら口をはさむことをほとんどされないんです。制作会社のコミックス・ウェーブ・フィルムさんもちょっと特殊で、「どんどんオリジナル要素を入れてほしい」と言ってくる。そんな制作会社はあまり聞いたことないですよ(笑)。でも、本来そのほうが作品に広がりが出ますから、考え方としては正しいと思うんですよね。僕個人としてもいろんなアイデアを盛り込めるので楽しいですし、ほかの会社もマネすればいいのにって思いますね(笑)。

——加納さんが脚本の初期段階から参加されていたからこその信頼関係もあったのかもしれませんね。では、実際の作業としては、かなり自由に書いていかれたということですか？

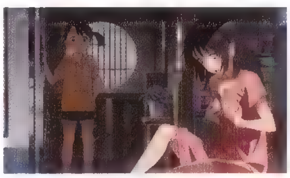
そうですね。ただ、書き始める前に、準備というわけではないのですが、すでに完成していた新海さんによる映画版のノベライズを読ませていただきました。そしたら、あちらは瀧くんと三葉の話を中心に物語が展開していたので、それなら外伝は、話は変えずに、周りの人間たちを描いた話にしようと思いついたんです。言い換えれば、新海さんが作った「五・七・五」に対して、僕がちょっと遊び心を入れながら「七・七」の付け句を加えていった感じですね。

鬱屈したテッシーの姿は糸守町の本質を映す鏡

——外伝は、三葉の中に入り込んだ立花瀧、親友の勅使河原克彦、妹の四葉、そして父・宮水トシキのそれぞれの視点で描かれた4つの章で構


「瀧は謎に包まれている部分も多いけど、決して複雑な人格ではない」と加納さん。その性格は小説でも感じ取ることができる。


テッシーの部屋に大量の無線機が置かれているのは、新海監督こだわりの描写。外伝では映画版以上に重要な要素として描写される。


映画では三葉のおかしな行動に対するツッコミ役を果たしている四葉だが、外伝では姉を案じる内面がじっくり描かれている。


宮水家を出て町長になったトシキ。彼の内面は映画ではあまり語られていないが、外伝では亡き二葉や家族への想いが描かれている。

新海さんが描いた美しい「五・七・五」に遊び心を入れて付け句をしたのがこの外伝

成されています。この人選も加納さんのアイデアによるものですか？

　僕が考えた最初のプロット案では奥寺先輩の話もありました。ただ、コミックス・ウェーブ・フィルムの方から、新海さんがテッシーに強いこだわりを持っているとお聞きしまして。それで最終的にこの4人を選びました。そのときに思い出したのですが、確かに新海さんは、脚本制作の段階から、テッシーの言動をとても大事にされていたんですよね。例えば、三葉や早耶香が糸守町に何もないことを嘆いているシーンでは、「お前らなぁ〜！」って二人のことを怒る。その一方で、早耶香に「将来どうするの？」って聞かれると曖昧な返事で濁してしまう。彼のこうした言動は、糸守がどういう町なのかということを描写する上でとても大切なんだということをおっしゃっていて。そのときの会話が頭の中に引っかかっていたので、僕もそこを掘り下げて書いていきました。

——4つの章の中に三葉視点のお話がありませんよね。でも、それぞれのエピソードに必ず三葉が登場し、彼女を客観的かつ、多角的にとらえた内容になっている。この構成にも面白さを感じました。

　当初は、そんな狙いはなかったんです（笑）。でも、書き進めていくにつれて、自分でも〝そうか、これは周りの人間が三葉のことをいろいろ考えていく話なんだな〟って気づいていったんです。しかも、4人が抱く三葉に対するイメージもそれぞれ違っていて、全部の話をまとめてみても一個の人格が立ち上がってこないようになっている。だから〝この子って何なんだろう〟という疑問が持続する。この構成は面白いなぁと思いましたね（笑）。

新海作品は解釈が自由 この小説も一例にすぎない

——各章の内容について、書く上で意識したポイントをそれぞれ教えていただけますでしょうか？

　瀧くんに関しては、男女の体が入れ替わって起こるコメディ要素をちゃんと描きたかったんです。映画ではバスケをして大きく胸をゆらして男子の目を釘付けにするという描写がありますが、それ以外の、学校での着替えはどうするのかとか、もっと言えば、体を動かしたときの違和感などはほぼ描かれていません。でも、〝入れ替わり映画といったらこれだろ！〟みたいなこだわりが僕の中にはあって（笑）。それを脚本の第一稿ではたくさん盛り込んでいたのですが、「作品の主題はそこではない」ということもあって、カットになったんです。それが残念だったので、外伝では心ゆくまで下世話を描いてやりました（笑）。

　2章のテッシーは、先ほども話したように、糸守町への鬱屈した思いを書いています。また、彼は三葉の彼女の突拍子もない計画にも協力しますが、どうしてそこまでしてくれるのかという心の動きが短くしか表現されていなかったので、少しだけ補助線を引いてあげた感じですね。

——随分と彼が男前に感じられました。

　そう、本来テッシーはすごくイイやつなんです。人を見る目があるし、頭もいいし、あの歳でちゃんと物事の真理を見ようとしているし。ただ、2章でちょっと彼の株を上げ過ぎたので、3章でバランスを取らせたというのもあるんですが、四葉のテッシーへの評価はちょっと辛口になってしまってますけどね（笑）。

——その3章での四葉ですが、口噛み酒を飲んでしまい、少しだけ過去と繋がります。

　四葉も宮水家の血を引いている以上、三葉や祖母の一葉のように夢を見る能力があるはず。その片鱗をここでは見せたかったんです。

——そして最後に描かれているのが、一番謎の多い父・トシキの話です。

　この章は、民俗学者だった父がなぜ宮水神社で宮司をしていたのか、どうして今は家族と別居しているのか、なぜ町長になったのか……といった背景をまず読者にしっかり提示していきたいというところから始まりました。実はこれらの経緯については、新海さんのシノプシスにも詳細が書かれていなかったんですね。ですから、母親・二葉との出会いから町長になるまでの物語を、僕がほぼオリジナルで作っていきました。

——父親が亡き妻のことをずっと思い続けているというのは、新海誠作品らしい構図ですね。

　〝誰かを探し続ける〟というテーマは新海作品のほとんどに共通するもので、『君の名は。』で言えば三葉と瀧がそれにあたります。でも、この外伝ではトシキと二葉にも、そのテーマをもたせました。そのため、町役場に現れた三葉に妻の面影を感じたラストシーンについても、父親と娘というより、大切な人との再会という意味合いを強くしています。

——なるほど。この外伝と加納さんのお話で、より物語の裏側を知ることができたように思います。

　ありがとうございます。ただ、ひとつ伝えておきたいのが、この外伝で描かれていることが、正解ではないということなんです。

——と、いいますと？

　新海さんの作品はどれも多くを語らず、あえて空白を作ることで、その穴埋めを観る人に委ねているところがあるんですね。つまり、人によって解釈が異なって当然なんです。この小説に関しても、〝あくまで加納新太が考える解答はこれです〟と言っているにすぎない。ですから、まずは、映画を観て感じた自分の感情や解釈を大事にしてもらいたい。その上で、「なるほど、こういう捉え方もあるんだね」というぐらいの気持ちで、この外伝を読んでいただければと思います。

ARATA KANOH

愛知県出身。フリーの編集者として活動したのち、2002年作家デビュー。著書に、『小説 劇場版ハヤテのごとく！』やゲーム『シャイニング』シリーズのノベライズなどがある。映画『君の名は。』には脚本協力として参加し、これまでにも新海誠作品の『秒速5センチメートル one more side』、『ほしのこえ あいのことば/ほしをこえる』、『雲のむこう、約束の場所』(いずれもエンターブレイン刊) のノベライズも手がけている。



『君の名は。 Another Side:Earthbound』

加納新太／著　原作：新海誠　カバーイラスト：田中将賀
口絵・本文イラスト：朝日川日和
角川スニーカー文庫

映画の物語をベースに、三葉をとりまく人たちの視点で描いた外伝小説。三葉の体になってしまった瀧の苦悩をはじめ、同級生の勅使河原克彦と妹の四葉の心根など4つの章で構成。また三葉の父・トシキと母・二葉の出会い、宮水神社のルーツなど、映画では明かされていない人間関係や細かな物語背景も分かる、ファン必読の一冊。

COLUMN 3

すでに三葉や糸守の名称も……
新海誠ミニインタビュー　はじまりの企画書

『夢と知りせば（仮）――男女とりかえばや物語』というのは、
『君の名は。』の最初の企画書に記されていたタイトル。
その最初の企画書の気になる中身を、新海監督の着想とともにここに特別公開！

取材・文＝渡辺水央

❶


❷

劇場長編アニメーション企画
「夢と知りせば（仮）」
――男女とりかえばや物語

場所は日本、時は現代。湖を抱いた山奥（あるいは島）にある、小さな田舎町に住む少女、三葉（みつは）。

高校生の三葉は、あるとき不思議な夢を見る。自分は東京に住む高校生らしい。違う性別、違う人生に戸惑いながらも、なんとか男の子の一日をやり過ごす三葉。それは奇妙な夢だったが、ずっと退屈な田舎から出たいと願っていた三葉にとっては楽しい体験でもあった。それ以来、時々その男の子になる夢を見るようになり、三葉はそれを心待ちにするようになる。

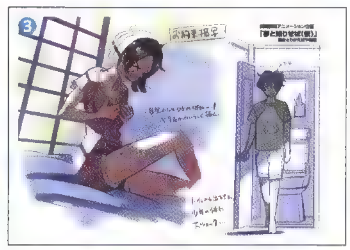
一方で、東京に暮らす高校生の少年、瀧（たき）。瀧もあるとき、見知らぬ田舎の女子高校生になっている夢を見る。少女の肉体にドギマギしつつ、なんとか一日をやり過ごす瀧。瀧はたびたびその夢を見るようになり、次第に少女に好意を抱いていく。

しかし二人は、徐々にその夢に疑問を抱くようになる。あまりにもリアリティがありすぎて、単なる夢だとは思えないのだ。

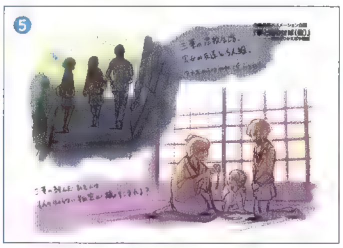
瀧は、実際に少女の住む町に行ってみようと決意する。夢で見た山の形や地名を頼りに、少女の町を捜しだす。何時間も歩いて辿りついたその場所には、しかしなにもない湖が広がっているばかりだった。そして瀧は知る。その場所には、五年前までは小さな町があったこと。極小の隕石が、天文台に補足される間もないほどの超高速で落下し、住民ごと町を消し去ってしまったということ。では俺は五年前に死んでしまった少女の夢を見ていたのか、と瀧は愕然とする。

――二人の見ている夢の意味はなんなのか。三葉は生きているのか、死んでいるのか。夢の中で入れ替わる思春期の少年少女が、時にコミカルに時に切なく、お互いを救おうとする物語。

100分前後の長編アニメーション映画を想定。

❸


❹


❺


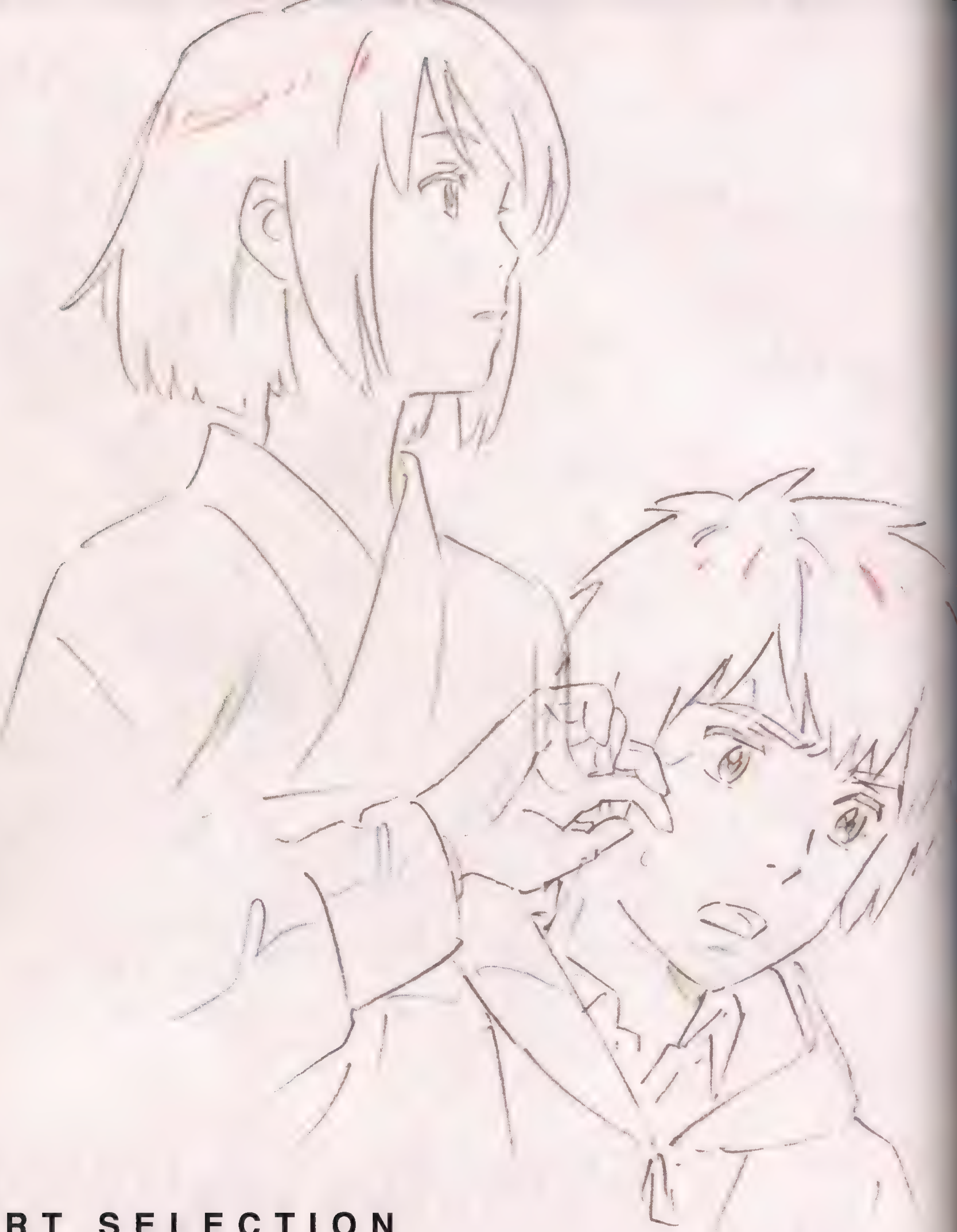
❻


❼


小野小町の『夢と知りせば覚めざらましを』の和歌と『とりかへばや物語』のふたつから発想を得て作ったのが、最初の企画書です。

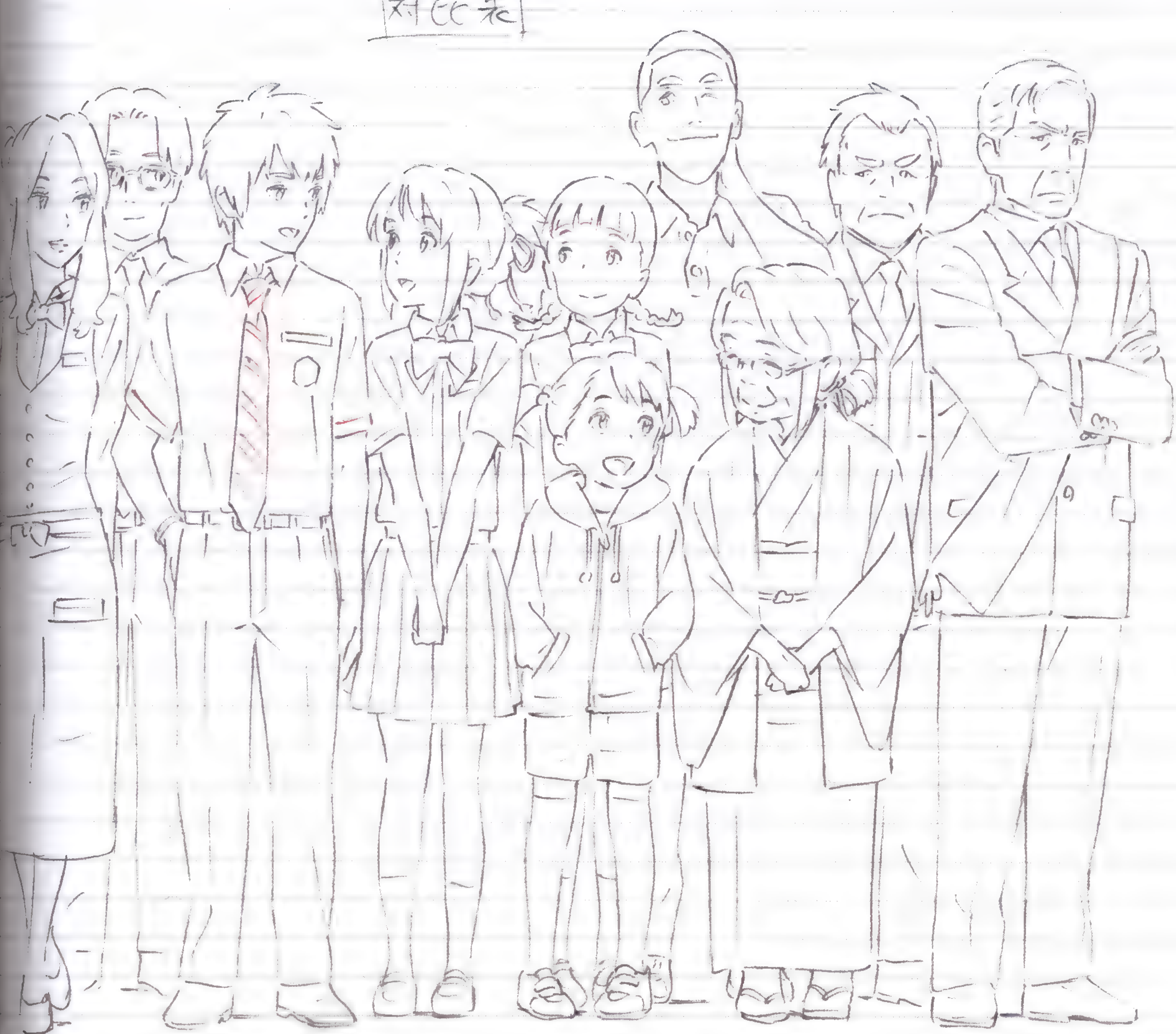
その企画書の段階で、もう〈彗星〉や〈組紐〉、〈糸守〉というモチーフも出てきているんですよね。ヒロインの〈三葉〉という名前も最初の企画書からありました。糸守には大きな湖がある設定で、水がキーになってくる話でもあったので、登場人物には水にちなんだ名前を付けたいと思っていたんです。三葉は、ミヅハノメという水の神様から。〈宮水〉も水絡みの名前ですし、〈瀧〉というのも〈滝〉や〈龍〉のイメージから付けているんですよ。あとから『秒速5センチメートル』の貴樹と似た名前になってしまったなと気づいたのですが、まったくの偶然で、付けているときはすっかり忘れてました（笑）。

実は『君の名は。』は、ある種『雲のむこう、約束の場所』の語り直しでもあるんですよ。『雲～』は今でもたくさんの方に愛していただいている作品ではあるのですが、初めて手掛けたボリュームのあるお話だっただけに、なかなか脚本を思うような形にできなかった作品で、作劇・物語の制作においては挫折の経験もあったんです。ここまで自分なりに作劇を一から勉強し直してきた中で、今の自分だったらもっと深くてより楽しい物語が描けると思えたことで、『君の名は。』を作ることができた。最初の企画書の時点からそこは意識していたところです。



ART SELECTION

ここからは作品のアート部分。
作画監督・安藤雅司によるキャラクター設定の数々をはじめ、本作の舞台となる美術設定、
小物設定、監督の手による絵コンテ、美しい背景画などをふんだんにご紹介。



老若男女が揃う『君の名は。』のメインキャラクターたち。どんな町にもいそうな親近感を醸し出している。

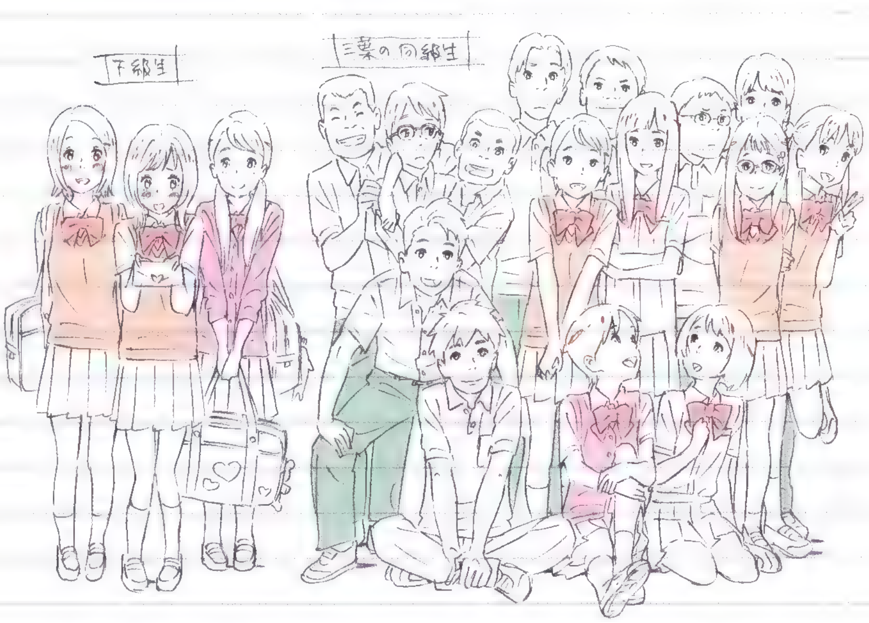
CHARACTER GUIDE

物語を進めるための存在だけではなく、それぞれの人生をそれぞれに生きる人間たち。
さまざまな容姿、さまざまな表情を持つキャラクターが『君の名は。』の世界で躍動する。

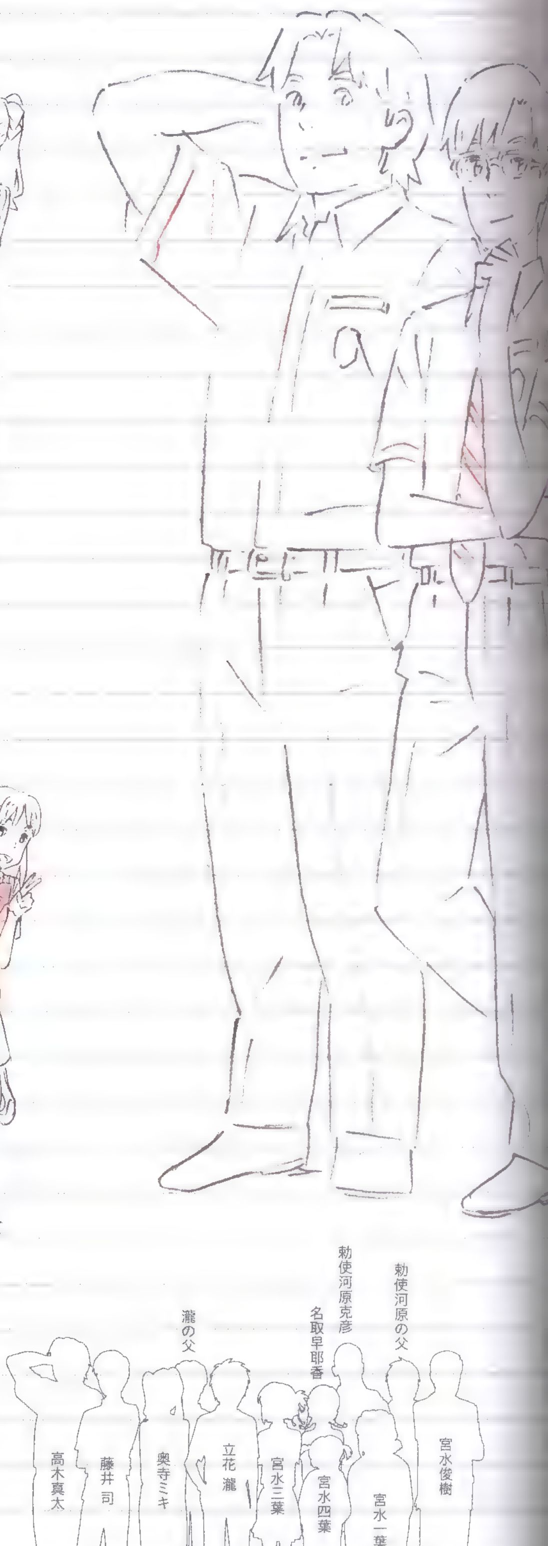
キャラクター設定画＝安藤雅司　文＝ワダヒトミ



瀧のバイト先の面々。ウェイター陣は10代、20代のイマドキの風貌をした青年たちだ。



素直で素朴な雰囲気を感じさせる三葉の学校の生徒たち。下級生(左)とクラスメイト(右)。






[声・神木隆之介]

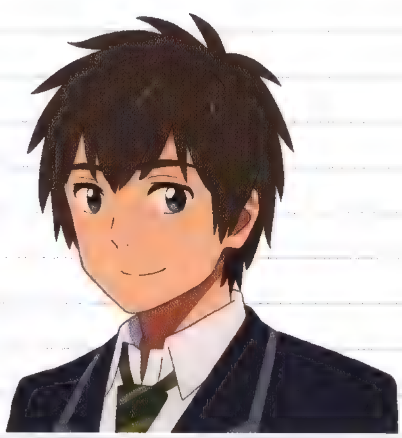


Taki Tachibana

立花 瀧

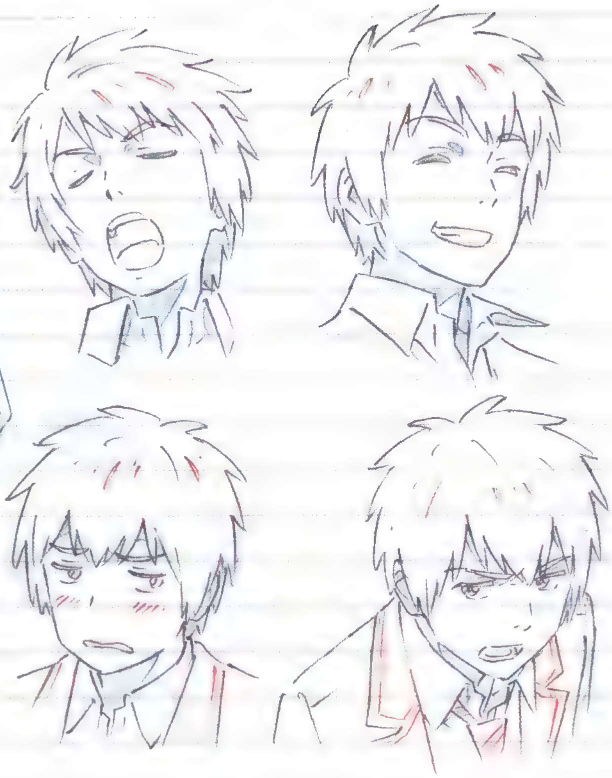
東京の都心に暮らす男子高校生。父親とふたりでマンション暮らし。
少しケンカっ早いところがあるが、気のおけない友人たちである
司や高木とともに楽しく高校生活を送っている。
放課後にはカフェに寄ったり、イタリアンレストランでアルバイトをしたり。
バイト先の女子大学生の奥寺先輩へひそかに好意を寄せているが、恋愛には奥手。
建築や美術に興味を持っていて、自宅の部屋にもその手の本が並んでいる。





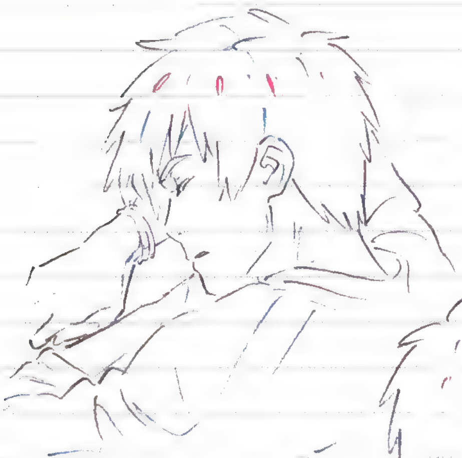

男の子らしさを感じさせるサバサバとした表情が印象的。毛束感のある無造作ヘアにもそのニュアンスが含まれている。







バイト時のユニフォームはギャルソン風。三葉と入れ替わっているときには、かわいらしいお辞儀に。

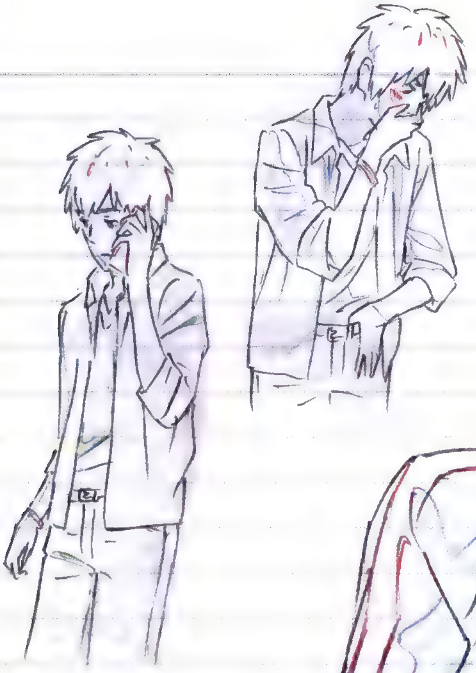


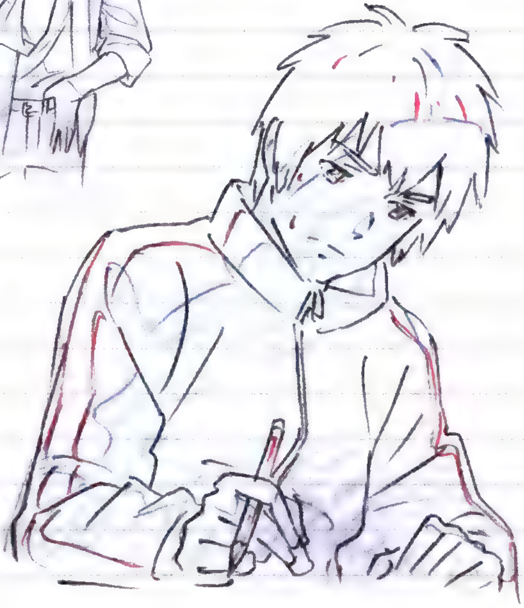




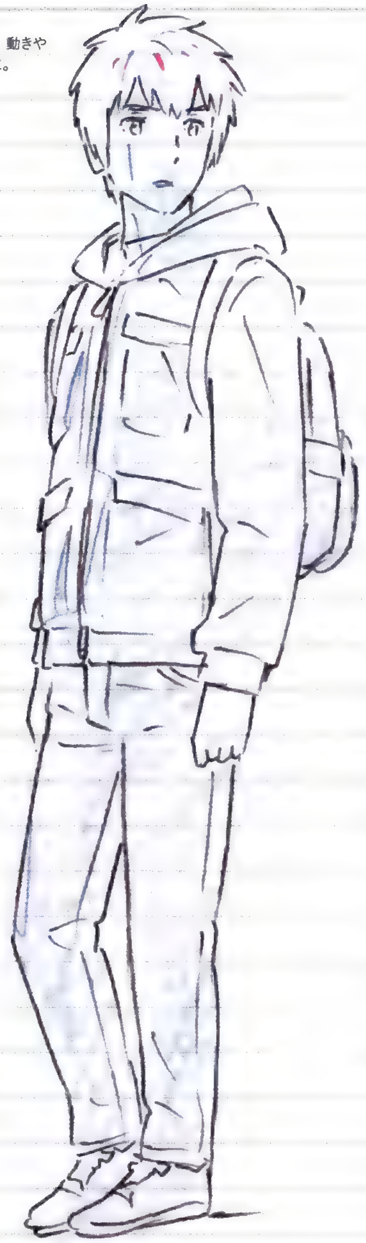


物憂げな表情をすると、一気に大人っぽく切なげな雰囲気に。真剣な眼差しも似合う男の子だ。

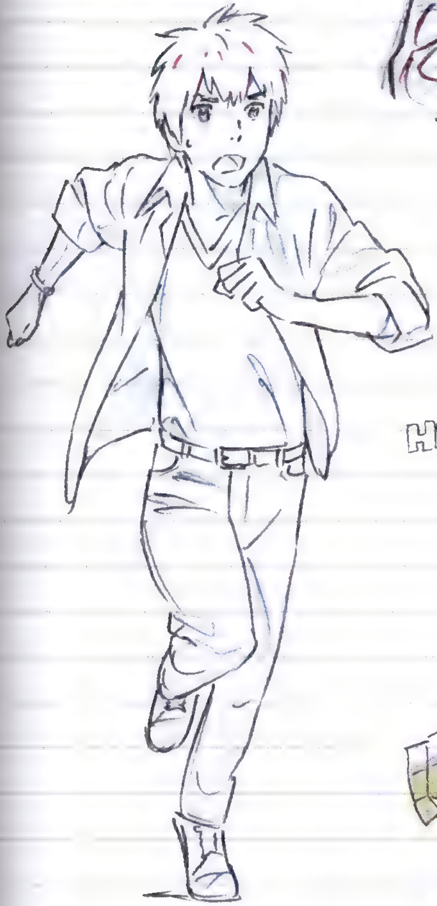


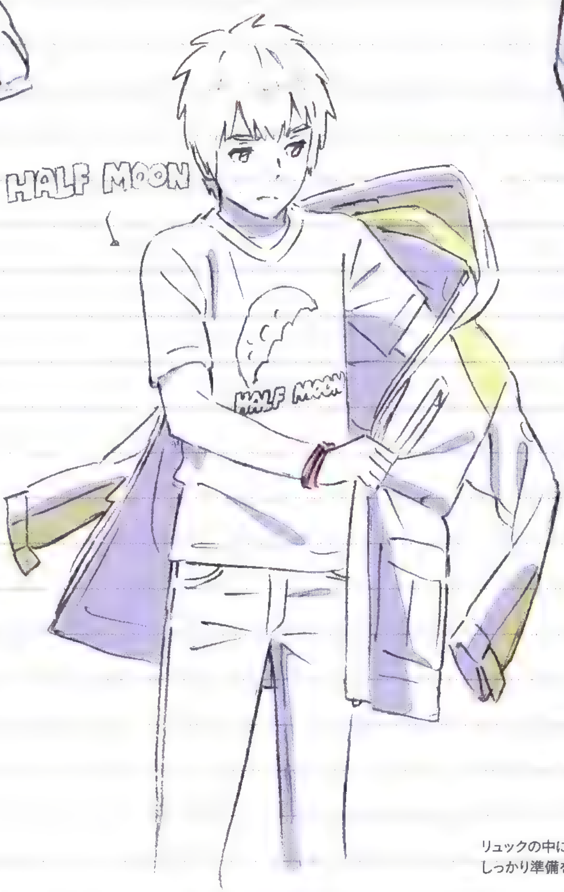


飛騨へ旅に出るときには、動きやすいアウトドア系の服装に。



「……ずっとなにかを、誰かを、探している」

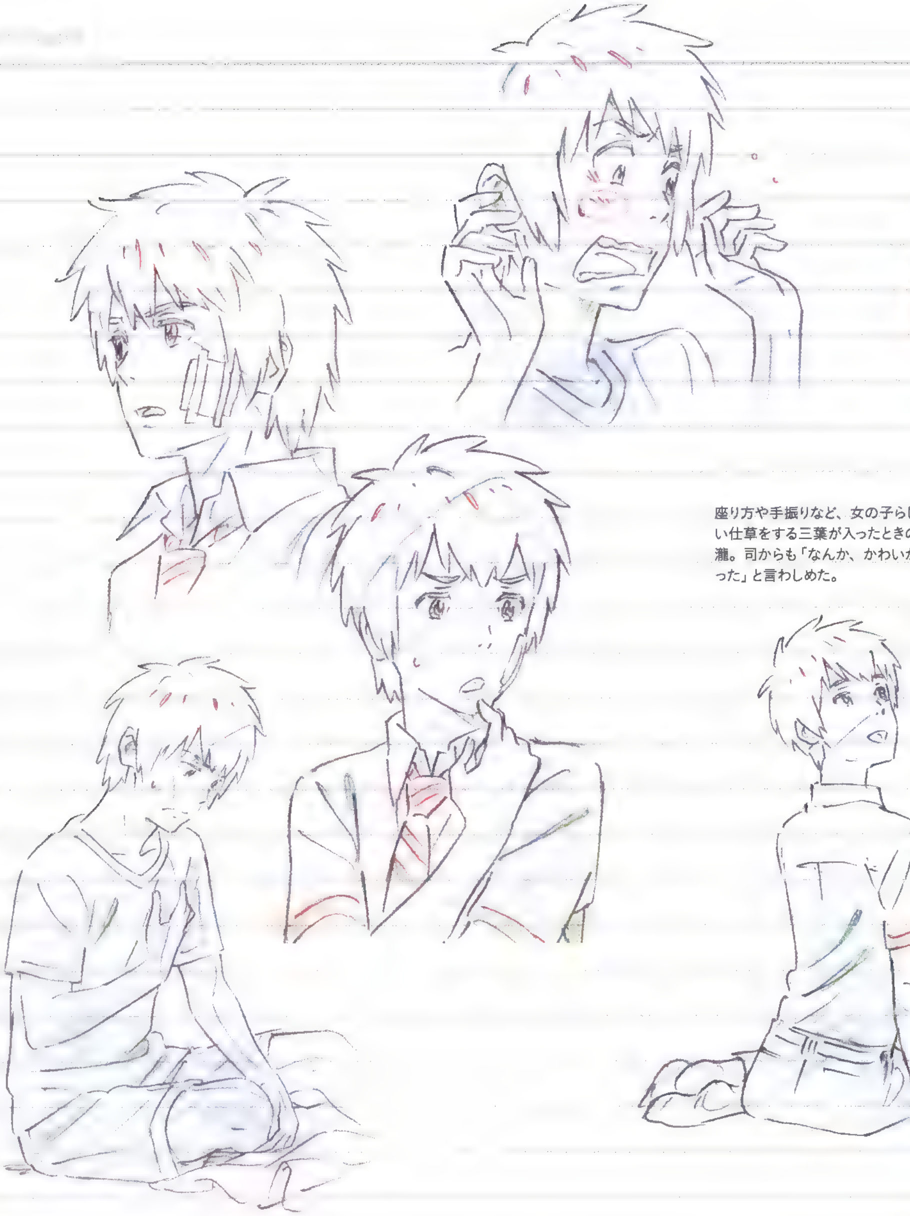






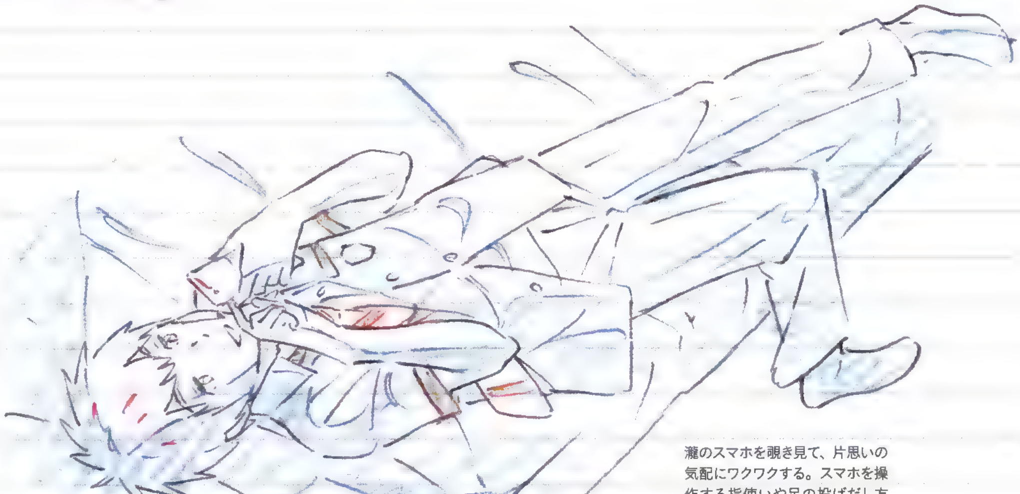
リュックの中にはスケッチブックや地図などの資料。目的に対してしっかり準備をする几帳面さも感じさせる。







座り方や手振りなど、女の子らしい仕草をする三葉が入ったときの瀧。司からも「なんか、かわいかった」と言わしめた。



瀧のスマホを覗き見て、片思いの気配にワクワクする。スマホを操作する指使いや足の投げだし方に三葉の少女らしさが表れる。



[声·上白石萌音]





宮水三葉

Mitsuha Miyamizu

山深い田舎町、糸守に住む女子高校生。宮水神社の家系に生まれ、神主である祖母の一葉と、妹の四葉と3人暮らし。母親の二葉は病気で亡くなっており、町長をしている父親のトシキは家を出ている。宮水神社に仕える巫女として、組紐を作ったり、神事には神楽を舞ったりと、その役割を真面目に果たしているが、カフェのひとつもない小さくて狭い町を嘆いて、東京の華やかな生活に憧れを抱いている。







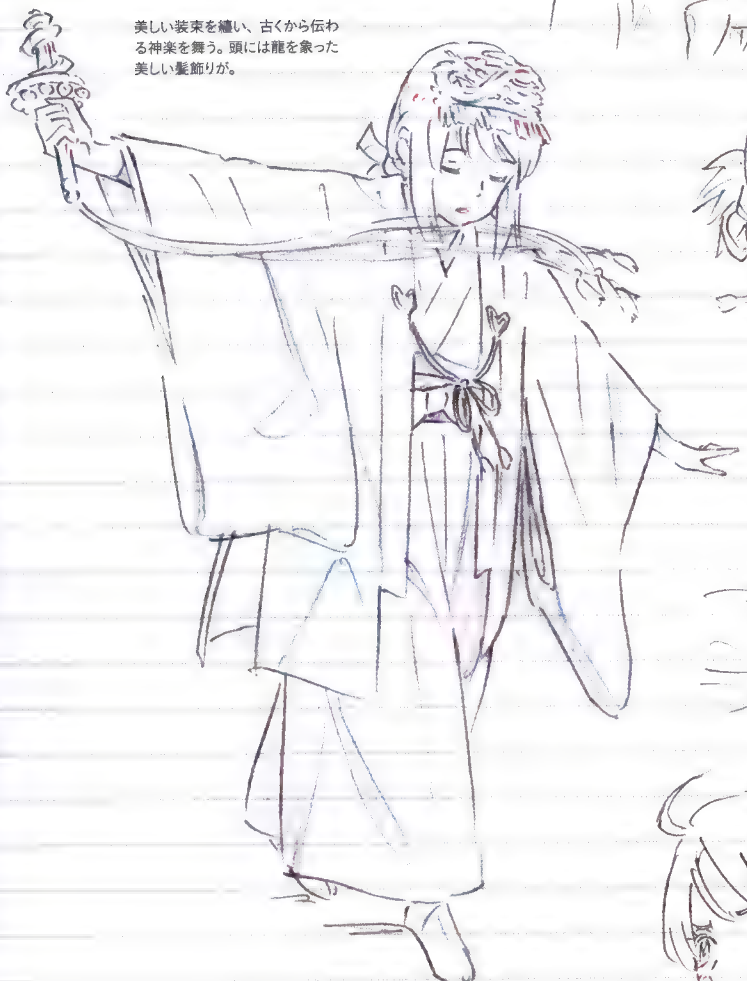




黒く艶やかで豊かな髪をまとめて組紐で結ぶスタイルがトレードマーク。はっきりした眉に強い意志が感じられる。

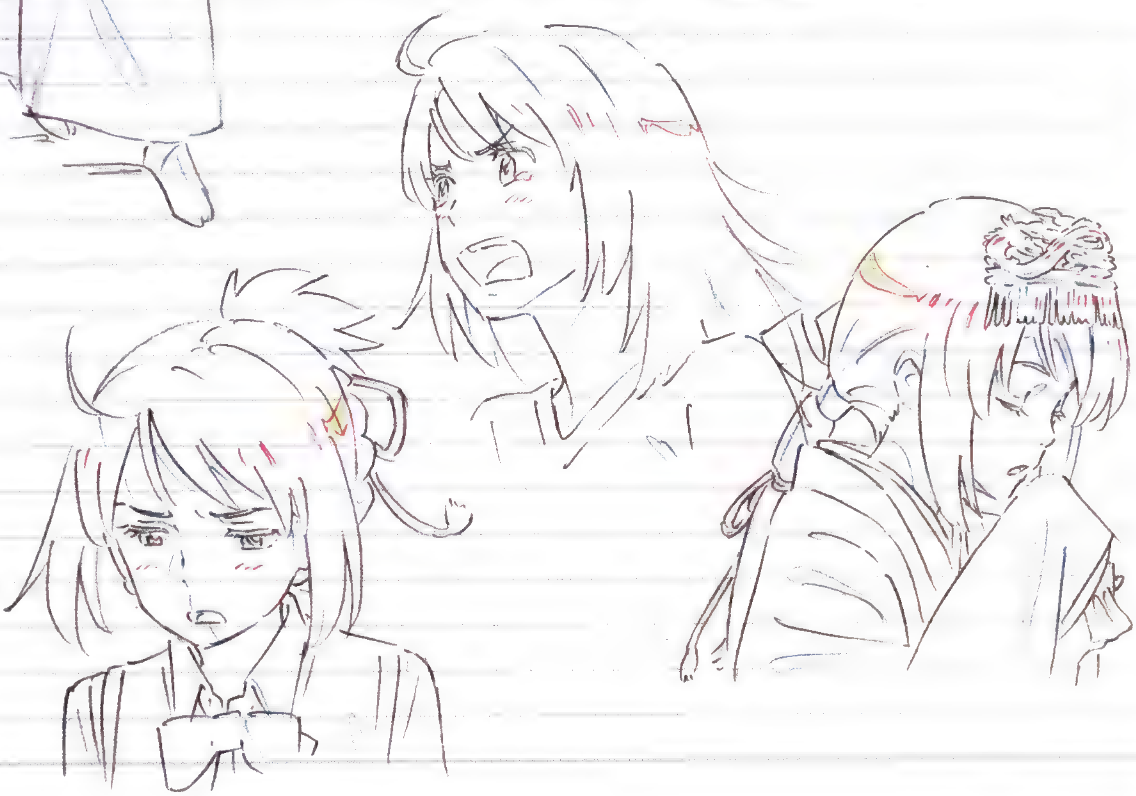


美しい装束を纏い、古くから伝わる神楽を舞う。頭には龍を象った美しい髪飾りが。

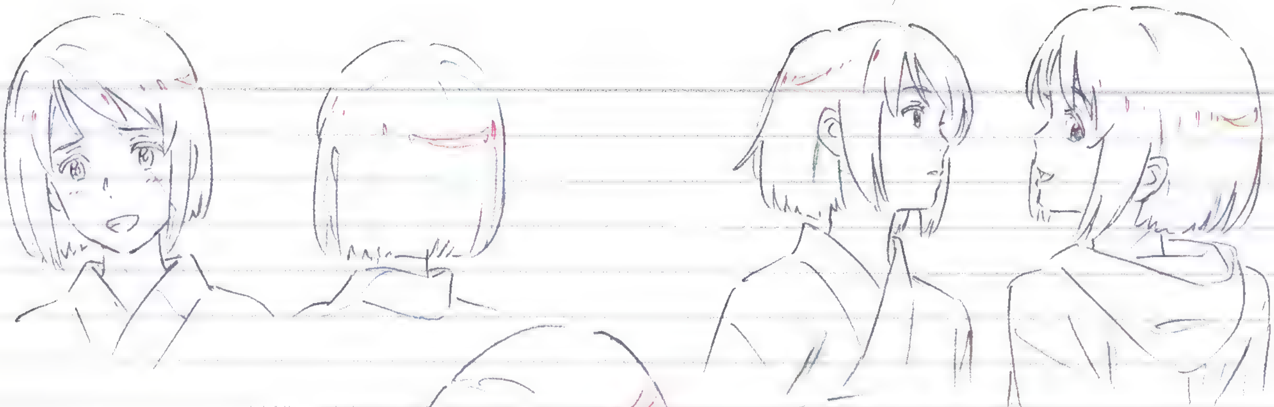


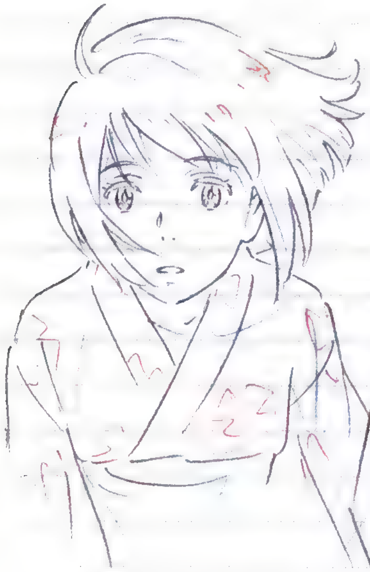






「誰かひとりを、ひとりだけを、探している」





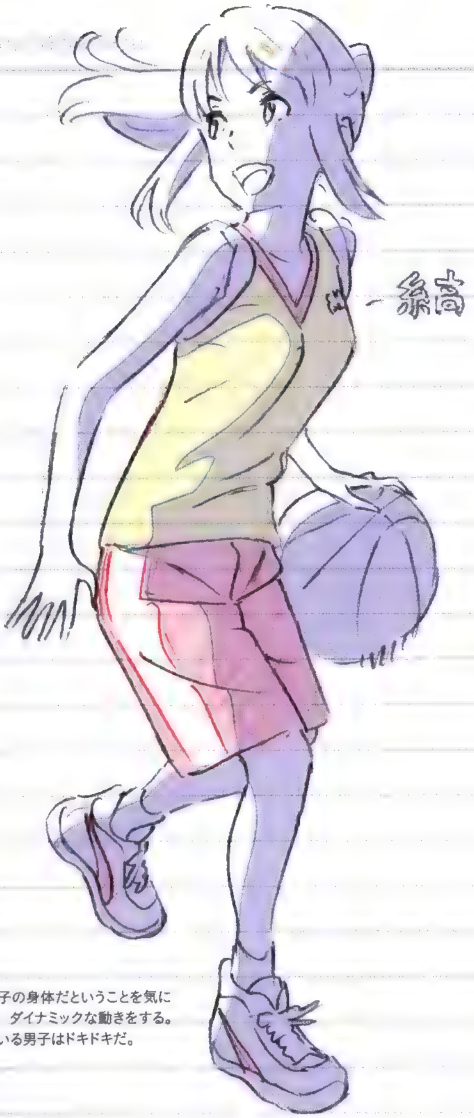


髪をばっさり切った三葉。そこには切ない気持ちが滲んでいるが、爽やかさが浴衣に似合っている。





瀧から戻ってきた組紐をカチューシャのように頭に結ぶ。瀧の反応はイマイチだったが、それでも嬉しさが溢れる。



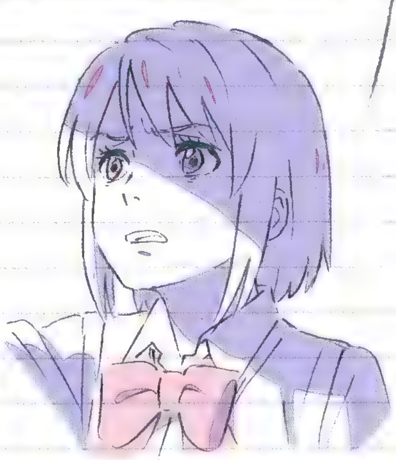


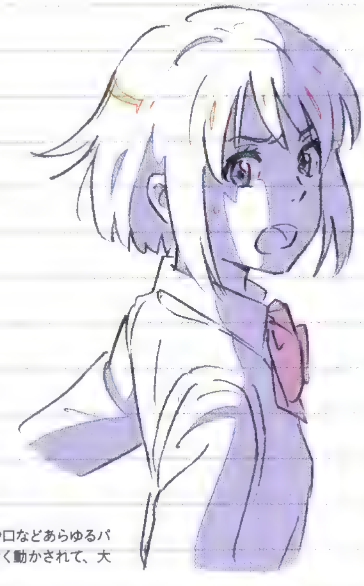


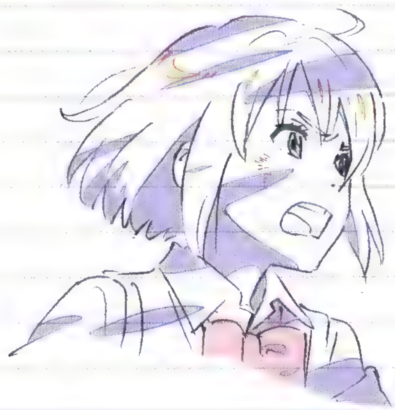
瀧が入った三葉だからおくることのできた好戦的な視線。これで謂れない陰口を蹴散らした。



女の子の身体だということを気にせず、ダイナミックな動きをする。見ている男子はドキドキだ。







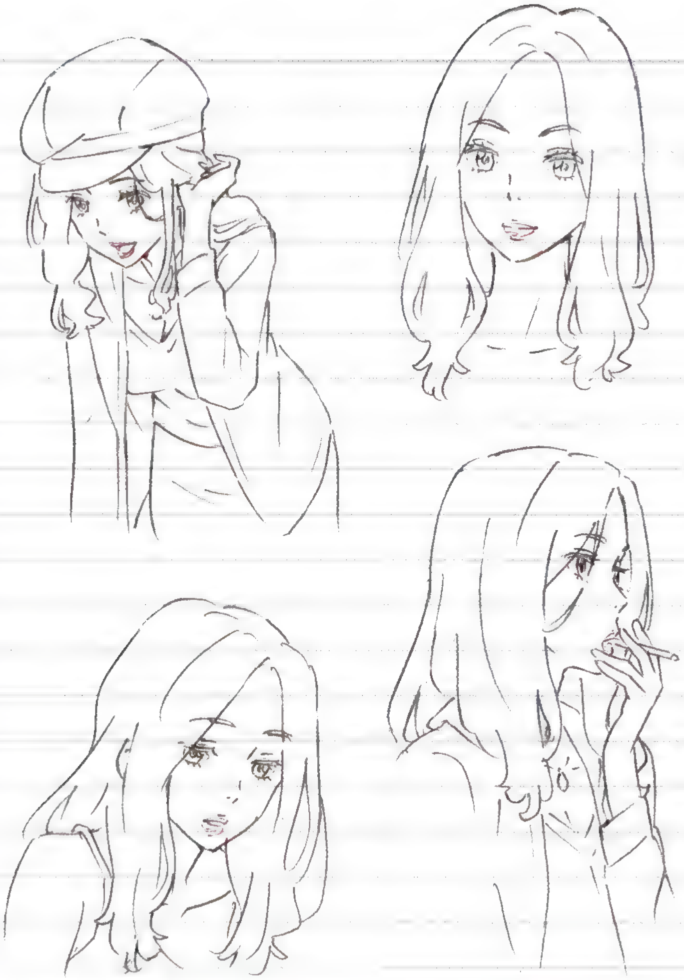


瀧が入ると目や口などあらゆるパーツがより大きく動かされて、大胆な印象に。

奥寺ミキ

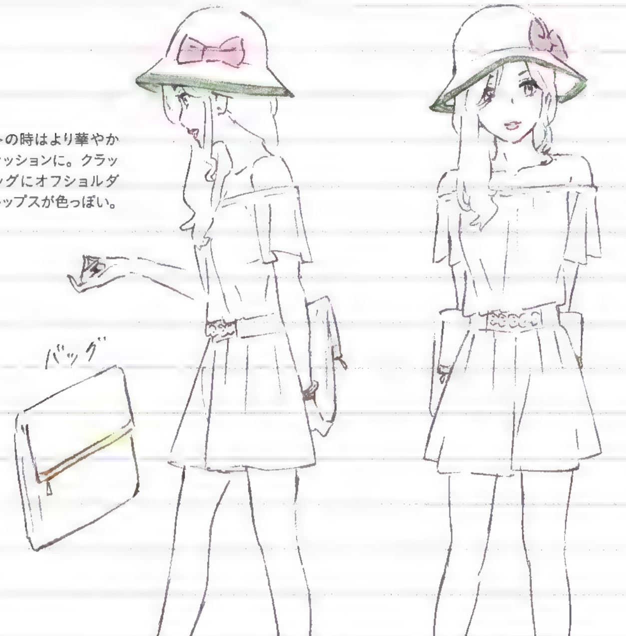
［声・長澤まさみ］

瀧のアルバイト先の先輩。美人でお洒落な大学生で、瀧も含めた男子たちみんなのマドンナ的存在。三葉が入ったときの瀧の一生懸命さに惹かれて、仲良くなっていった。瀧の糸守への旅にも司と一緒に同行する。



顔にかかる髪の毛が可憐な瞳にヴェールをかける。そのラインがアンニュイな印象をもたらしている。





デートの時はより華やかなファッションに。クラッチバッグにオフショルダーのトップスが色っぽい。



comment from 長澤まさみ

声のお仕事は、今までに何度かあるのですが、まだ難しくて掴めていないところがあったので、またチャレンジできると思ったら、すごく嬉しかったです。みんなの憧れの先輩という役だったので、大人っぽさだったり、優しさ、少しの色っぽさを出せればと思って演じました。瀧と三葉の心が少しずつ動いていく様子にすごく感動して、切ない部分は涙してしまいました。映像もとても美しくて、リアルな部分と、そうでない二次元の部分が混ざっていて、自分が今いる現代を感じながら、ファンタジーの中にも飛び込んでいける感覚が、すごく心地良い作品だなと思いました。

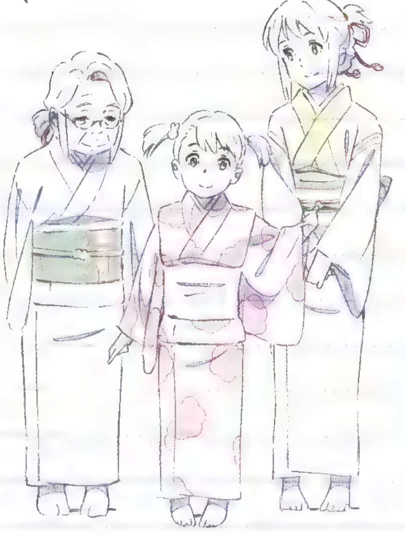
ながさわ・まさみ●1987年6月3日生まれ／2000年、第5回「東宝シンデレラ」オーディションでグランプリを獲得。『コクリコ坂から』(11年)、『映画妖怪ウォッチ エンマ大王と5つの物語だニャン！』(15年)といったアニメーション作品で声優を務めている。

宮水一葉

［声・市原悦子］

三葉と四葉の祖母であり、宮水神社の現在の神主。三葉の母親である娘の二葉を病で失い、三葉の父親である婿のトシキが家を出たため、三葉と四葉を女手ひとつで育ててきた。神社を守りながら、代々伝わるしきたりや糸守千年の歴史を孫たちに伝えていく。



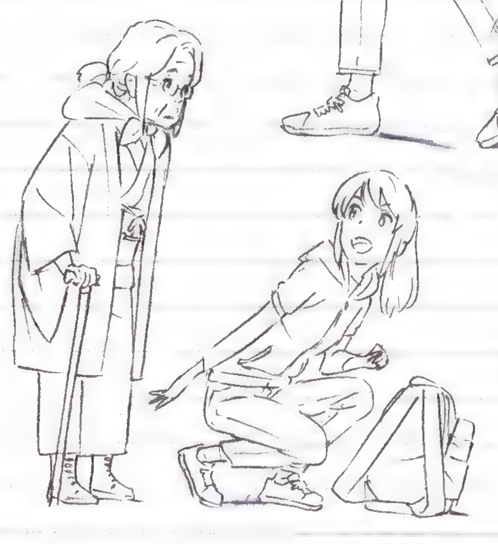




着物姿に慣れている宮水家。それぞれに合った着物や帯をこなれた佇まいで身につけている。



孫に背負われて、なんだか嬉しそうな一葉。



comment from

市原悦子



不安定で、はっきり自分の行く道が、つかめないような状態をみて、今の若者たちの状況を反映しているのかなと思って、せつなかったわね。またその反面、ものすごく求め合う強烈な心と心、その気持ちがとっても愛おしくて。なんとかうまくいってほしい、出会って、手を結び合ってほしいという願望になって、心がちょっと高揚しました。若い方たちと一緒の現場も珍しかったですね。みなさん一生懸命だし、すごくお芝居ぽくなく、ナチュラルに生理的に発声していて、それでいて存在感がでていたのもよかったです。

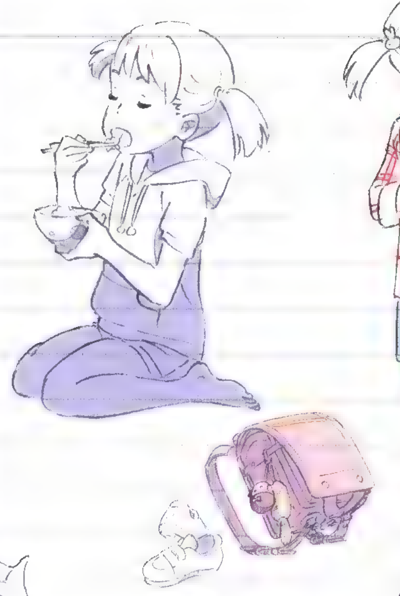
　揺れている心情、憧れもあるし、不安もあるという、その世界が、私にはとても新鮮でした。

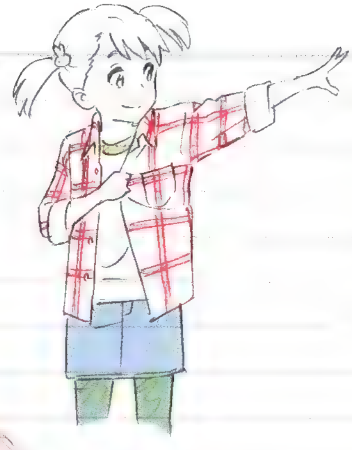
いちはら・えつこ●劇団俳優座出身／舞台『三文オペラ』『近松心中物語』、映画『黒い雨』『うなぎ』、TVドラマシリーズ『家政婦は見た！』など、長年に渡り数多くの作品に出演。アニメ『まんが日本昔ばなし』(75年〜／MBS)の語りや、ナレーション、朗読など、声の仕事も精力的にこなす。

宮水四葉

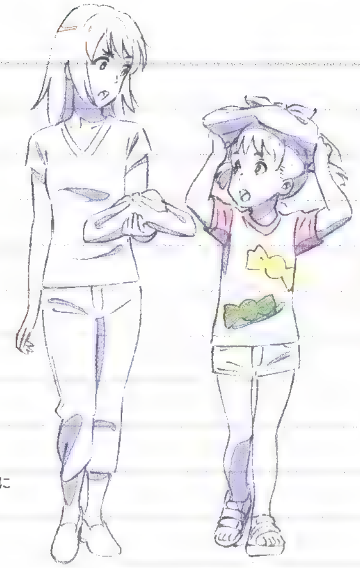
［声・谷 花音］

三葉の妹。元気でしっかり者の小学4年生で、毎朝厳しく三葉を起こすところから、その朝がはじまる。宮水神社に仕える巫女として、一葉や三葉に続く形で神社の仕事を手伝う。自分も組紐を作りたいと思っているが、一葉にはまだ早いと言われている。





普段の格好はボーイッシュだけど、ランドセルにはかわいいマスコットつき。



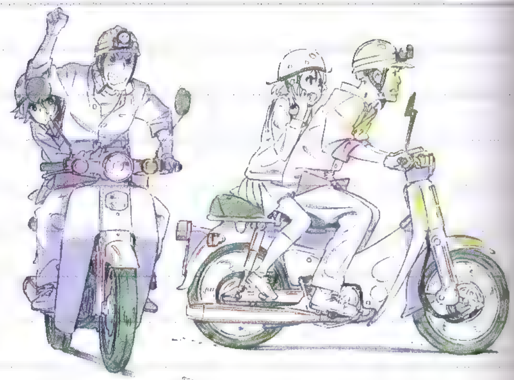


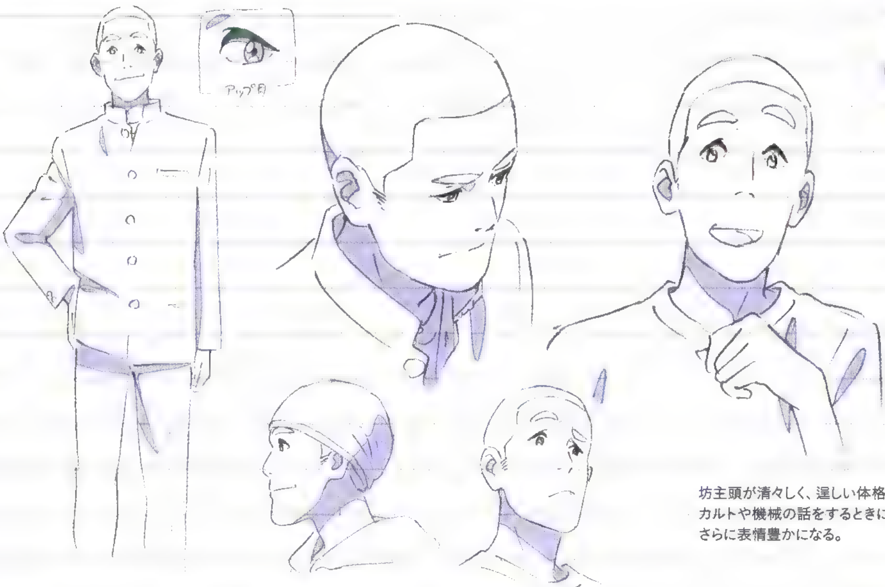
ちょっとシニカルなところもあるイマドキ少女。その表情はくるくると変わる。

勅使河原克彦

［声・成田 凌］

三葉の同級生。オカルトマニアで機械オタク。
地元で建設業を営む父に複雑な思いを抱いている。
早耶香と絡むことが多いが、実は三葉のことが気になっている。愛称はテッシー。





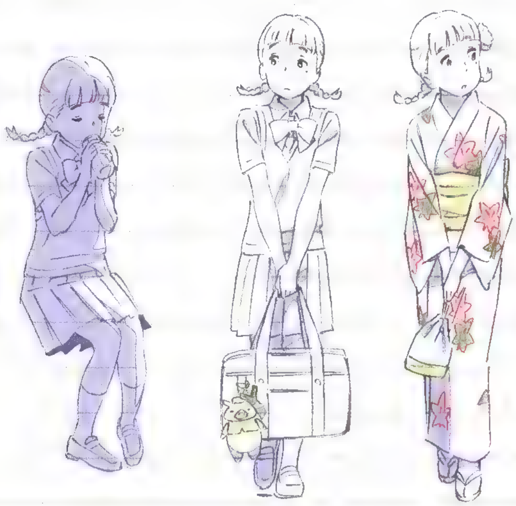


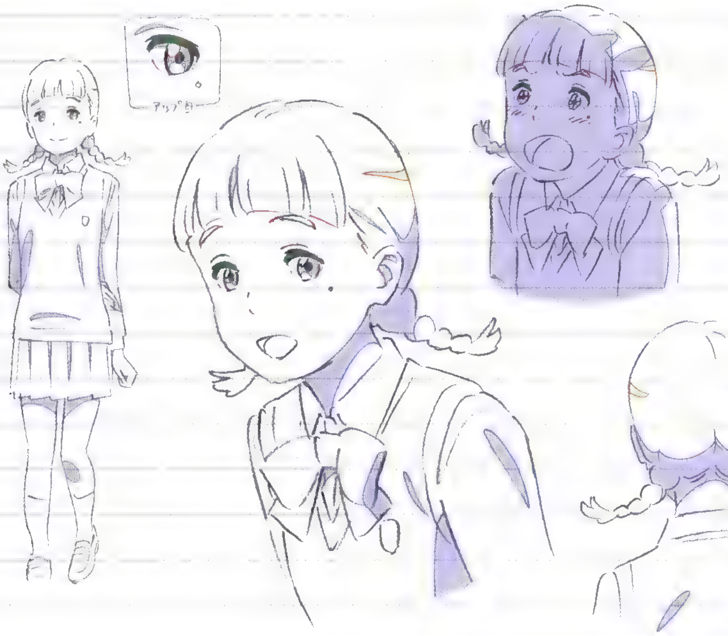
坊主頭が清々しく、逞しい体格。オカルトや機械の話をするときには、さらに表情豊かになる。

名取早耶香

［声・悠木 碧］

三葉の幼なじみで同級生。おっとりしているが常識人。
勅使河原に想いを寄せていて、彼にはよく絡む。
姉は町役場で町内放送を担当している。愛称はサヤちん。





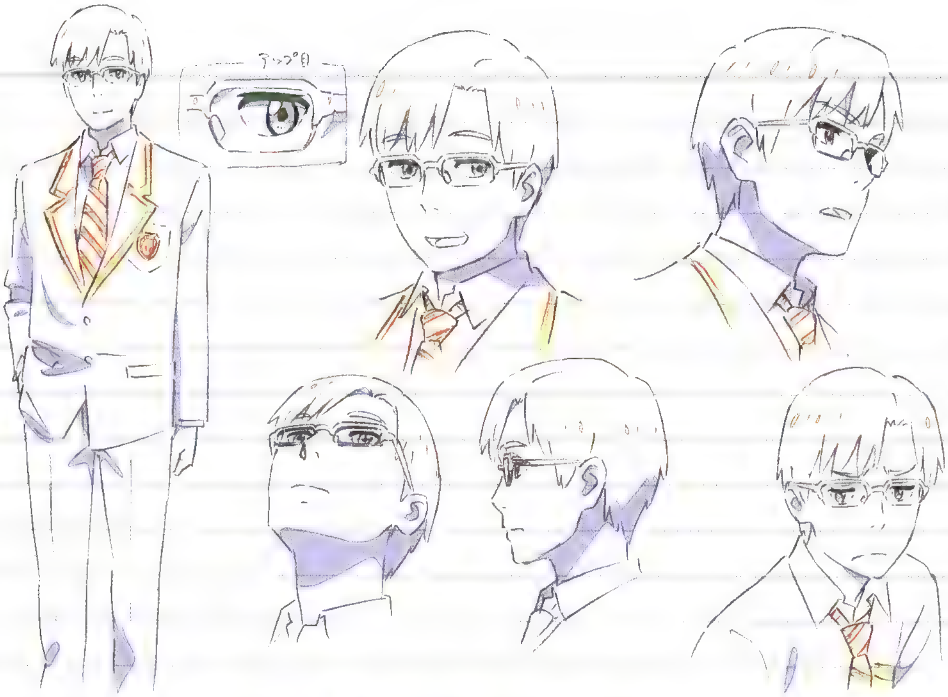


控えめで穏やかな表情がかわいい。左目の下のほくろと前髪のラウンドラインがポイント。

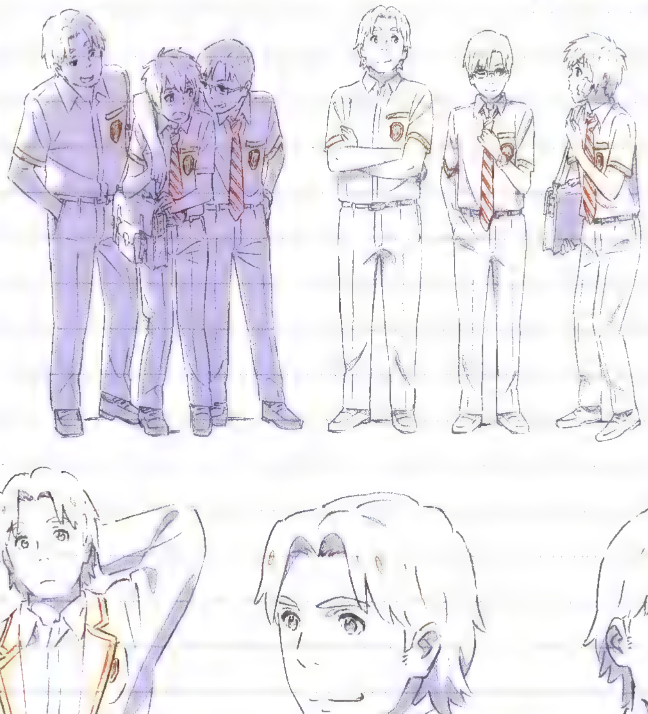
藤井 司

［声・島﨑信長］

瀧の高校の友人。クールそうに見えて、学校に遅刻しそうな瀧にメールを送って発破をかけたりと世話好きな一面も。
瀧と同じく、建築に興味がある。
瀧の糸守への旅に奥寺先輩を連れて押しかけた。



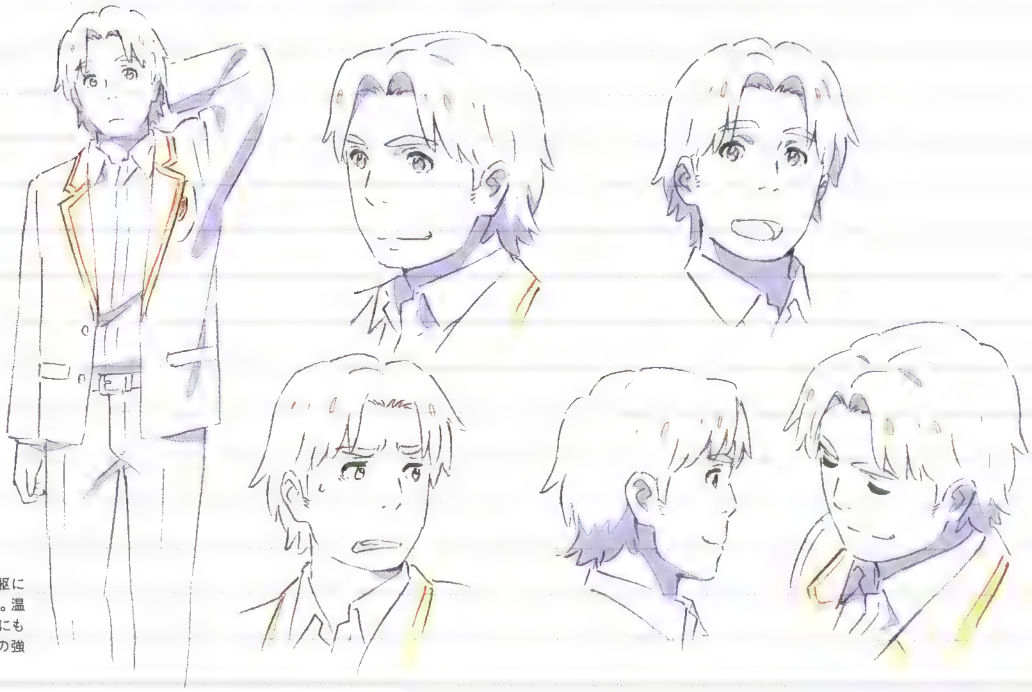
小ざっぱりとした髪に眼鏡の姿が理知的な印象。レンズの奥には優しそうな瞳がある。



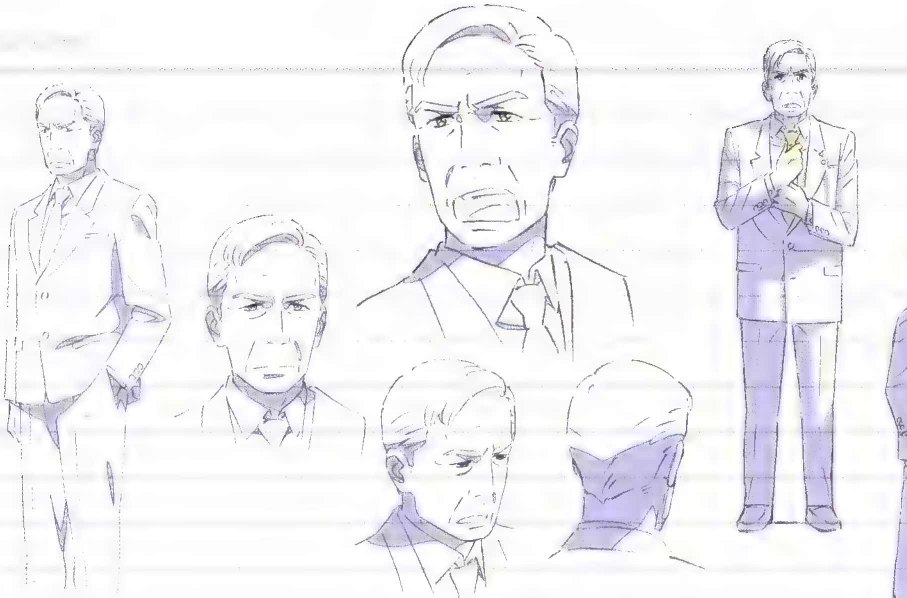
高木真太

［声・石川界人］

瀧の高校の友人。大柄でさっぱりした性格。
バイトの代行も食事と引き替えにしっかり引き受ける。
放課後は瀧や司と一緒にカフェ巡りをしている。



がっちりとした体躯に太めの眉がポイント。温厚そうだが、何事にも動じないような芯の強さも感じさせる。





宮水俊樹

［声·てらそままさき］

三葉の父親であり、糸守の現在の町長。
妻の二葉を亡くし、神を信じられなくなり、
神職を捨て婿に入った宮水の家を出た。

勅使河原の父

［声・茶風林］

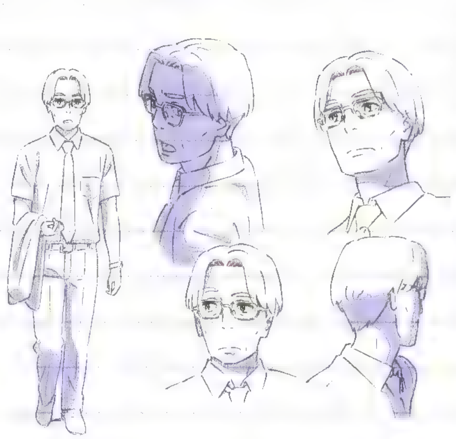
勅使河原の父親。建設業を営む。
選挙運動期間には三葉の父親をバックアップしている。



瀧の父

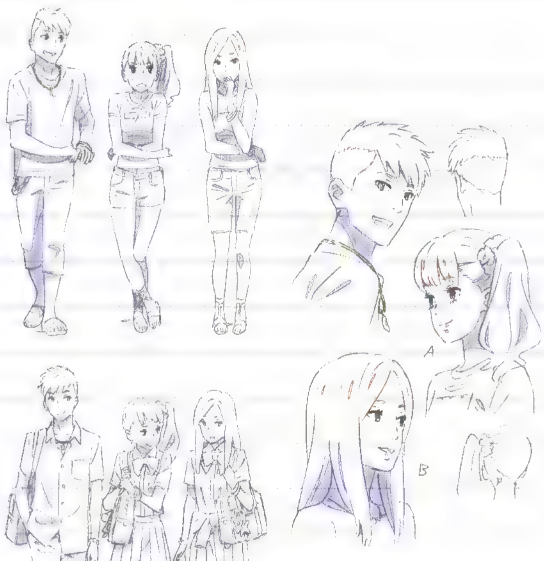
［声・井上和彦］

瀧の父親。霞ヶ関に務め、瀧と家事を分担しながら、
マンションでふたり暮らしをしている。



三葉のクラスメイト

三葉の同級生。神社の家系で町長の娘である三葉をしばしば揶揄してくる。

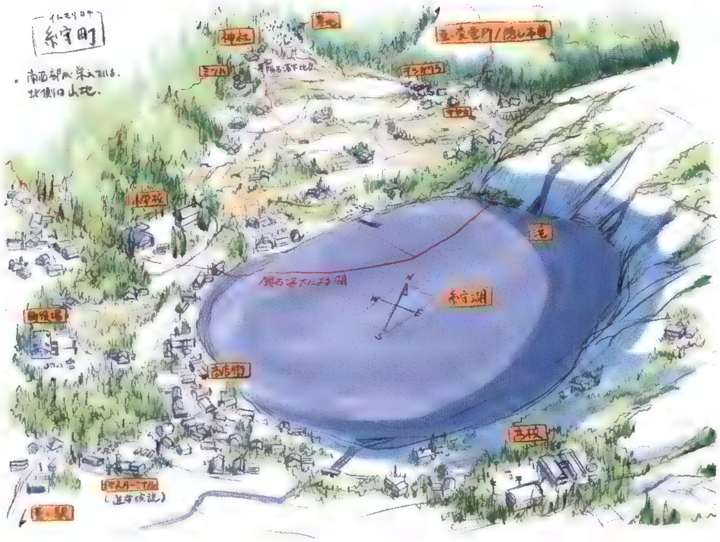




ラーメン屋の夫婦

瀧が飛騨で入ったラーメン屋で出会うふたり。
瀧が探していた三葉の暮らす町、糸守を知っていた。

美術設定
art design

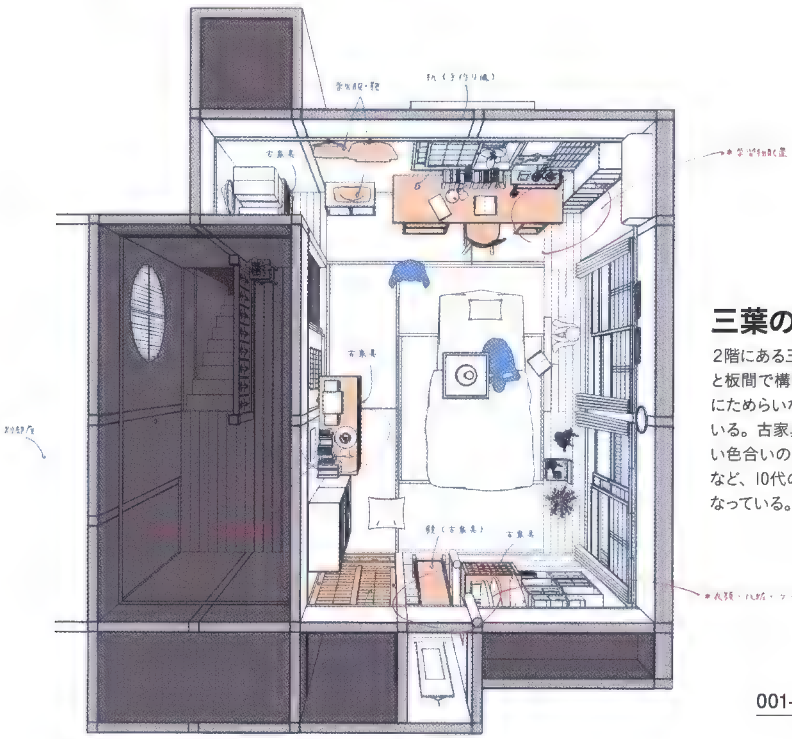


000-01　糸守町全景

※初期イメージボードより

糸守町

日本の古きよき風景をミックスさせたような、懐かしく美しい糸守の町。宮水家と神社の位置関係や三葉の部屋、高校など、糸守の設定をご紹介。



三葉の部屋

2階にある三葉の部屋。畳の部屋と板間で構成されており、畳の上にためらいなく学習机が置かれている。古家具がある一方で、明るい色合いのカラーボックスや小物など、10代の女の子らしい部屋になっている。

001-02　三葉部屋



001-03　三葉部屋



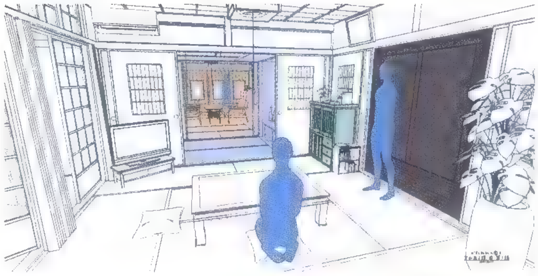
001-02　三葉部屋

宮水家居間

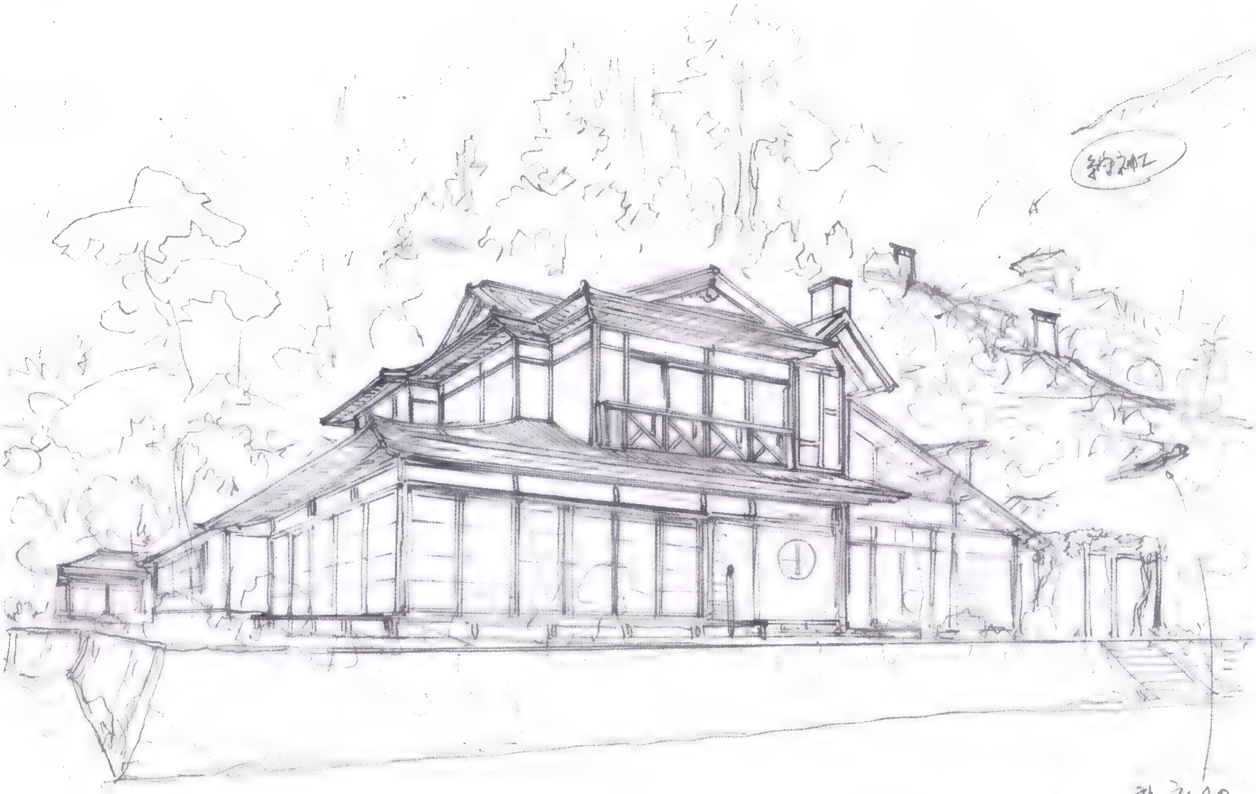
三葉たちが食事をする居間は太陽光が多く降り注ぎ、いつも明るい。古い家にしては珍しい外開きの窓がなんともおしゃれ。外から見て部屋の奥が廊下で、右手にはキッチンがある。



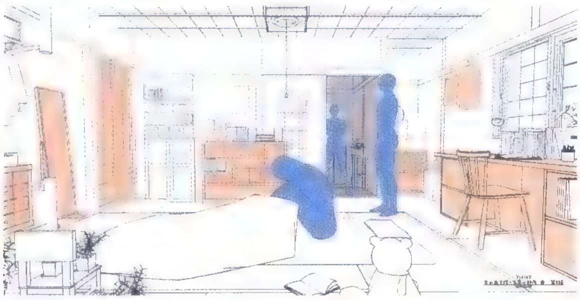
003-02　宮水家／食堂



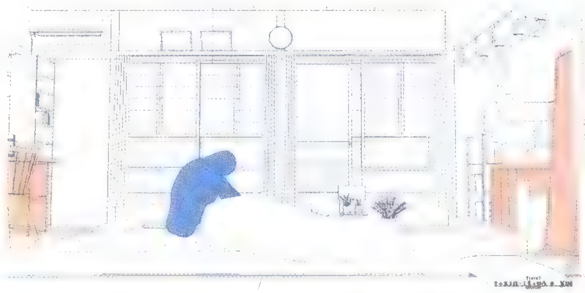
003-01　宮水家／食堂



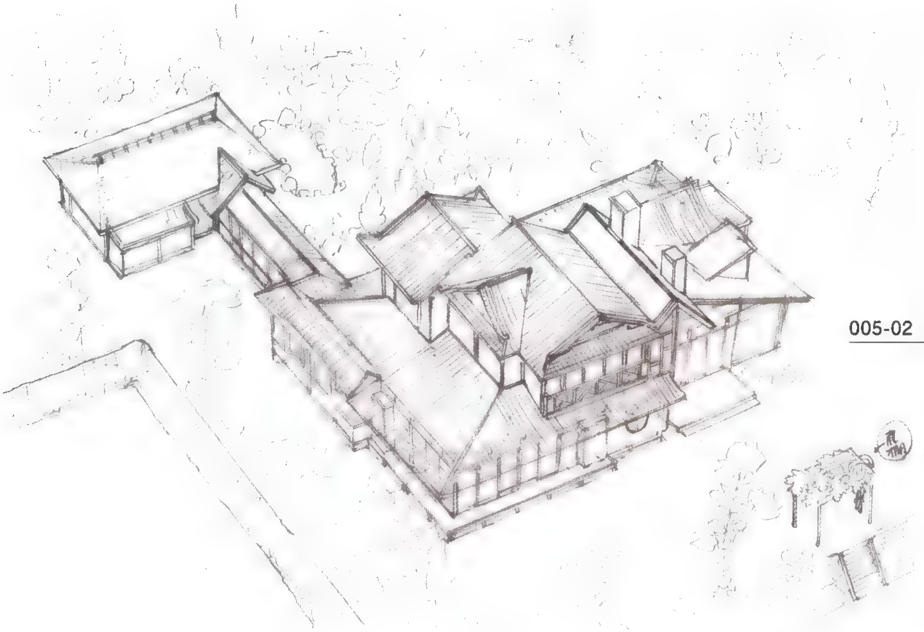
005-01　宮水家／外観



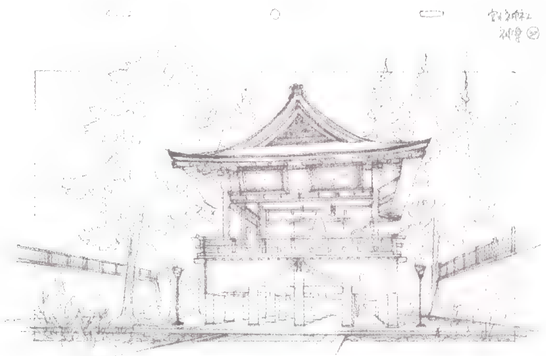
001-05　三葉部屋



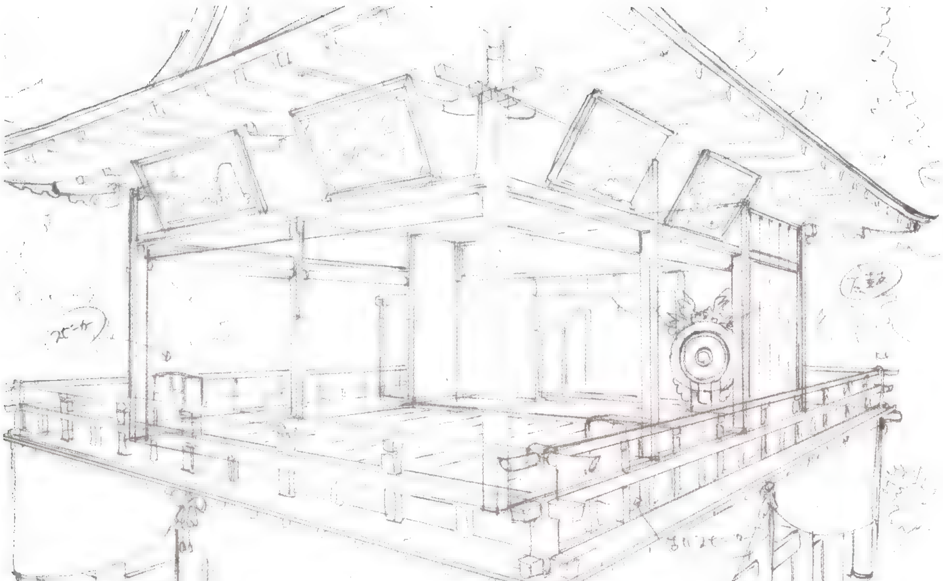
001-04　三葉部屋



005-02　宮水家／外観



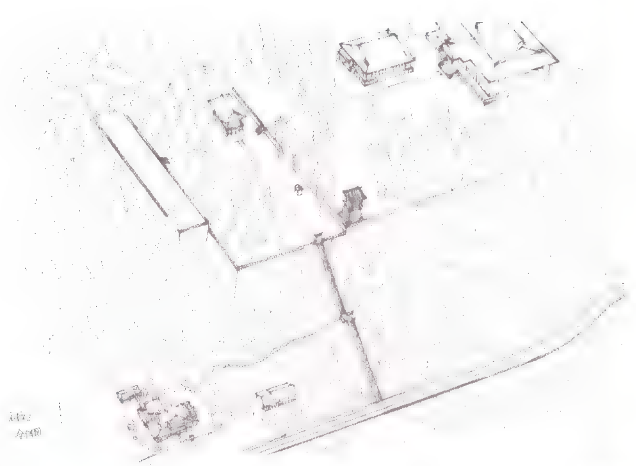
007-03　宮水神社／神楽



007-04　宮水神社／神楽舞台

宮水家／宮水神社

離れもある宮水家はまるで老舗旅館のよう。宮水地区の全体図を見ると、ほかの隣家に比べて大きいのが分かる。荘厳な装飾が施された神楽殿を含む宮水神社は家から少し離れた高台にある。



007-01　宮水神社／全体図

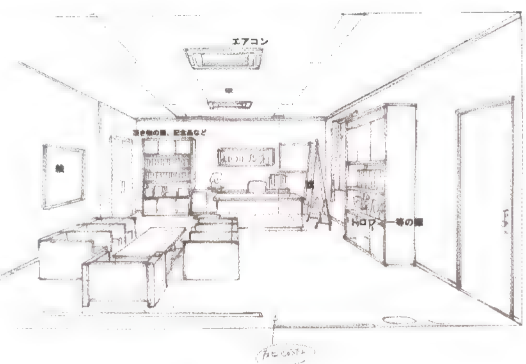


007-02　宮水神社／宮水地区全体図

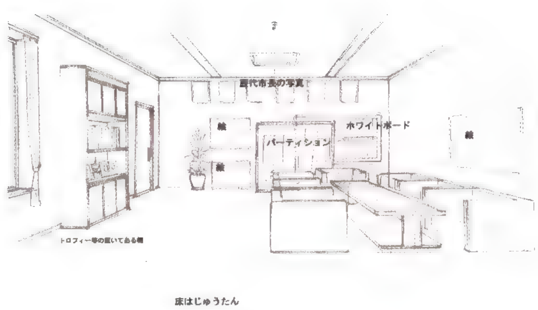
※初期イメージボードより

町長室

父親の性格が分かるようなプライベートなものは一切置かれていない。
なお机の後ろの『光乃川和』の文字は、本編では『不撓不屈』となっている。



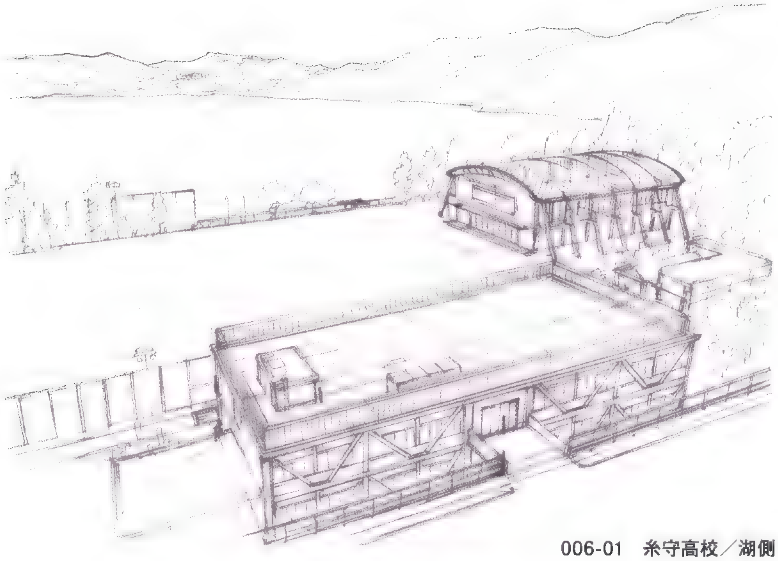
014-01　町長室



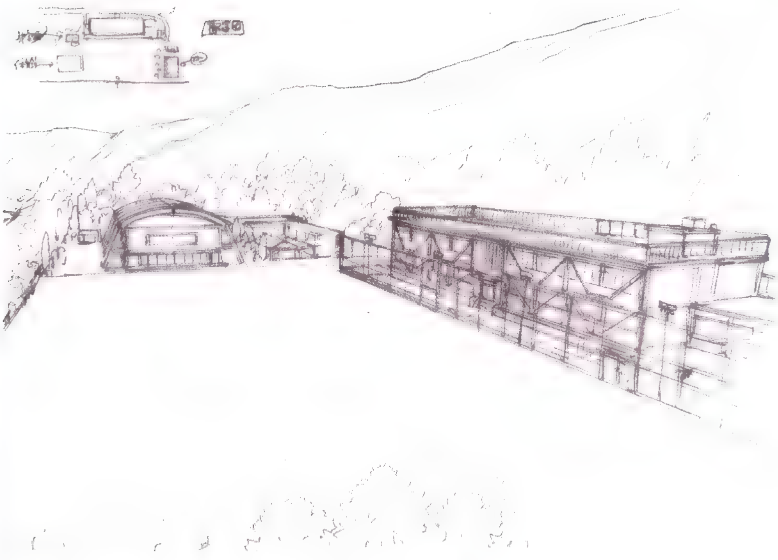
014-02　町長室／切り返し

糸守高校

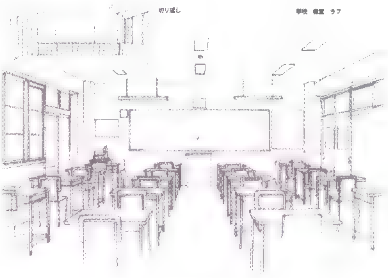
湖と山を臨む糸守高校。山の斜面を切り拓いた場所に建ち、道路に面した校舎の2階部分に昇降口がある。



006-01　糸守高校／湖側



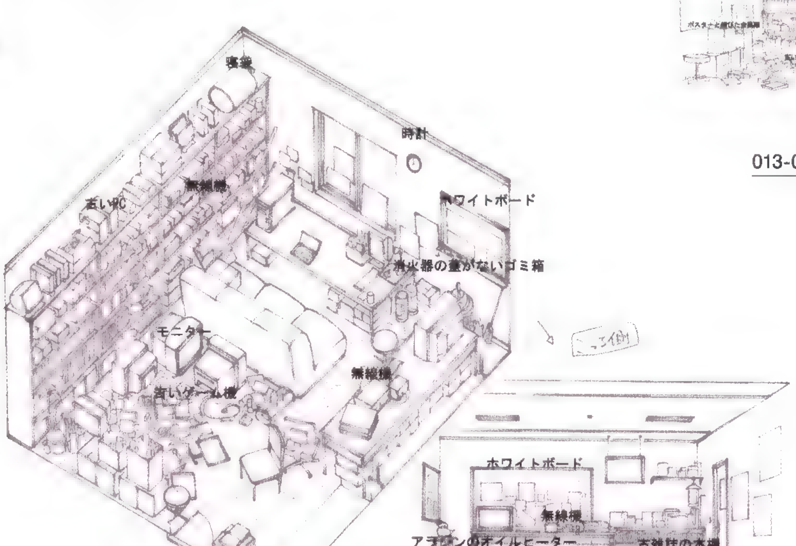
006-02　糸守高校／校舎側



006-03　糸守高校／教室



013-02　糸守高校／部室



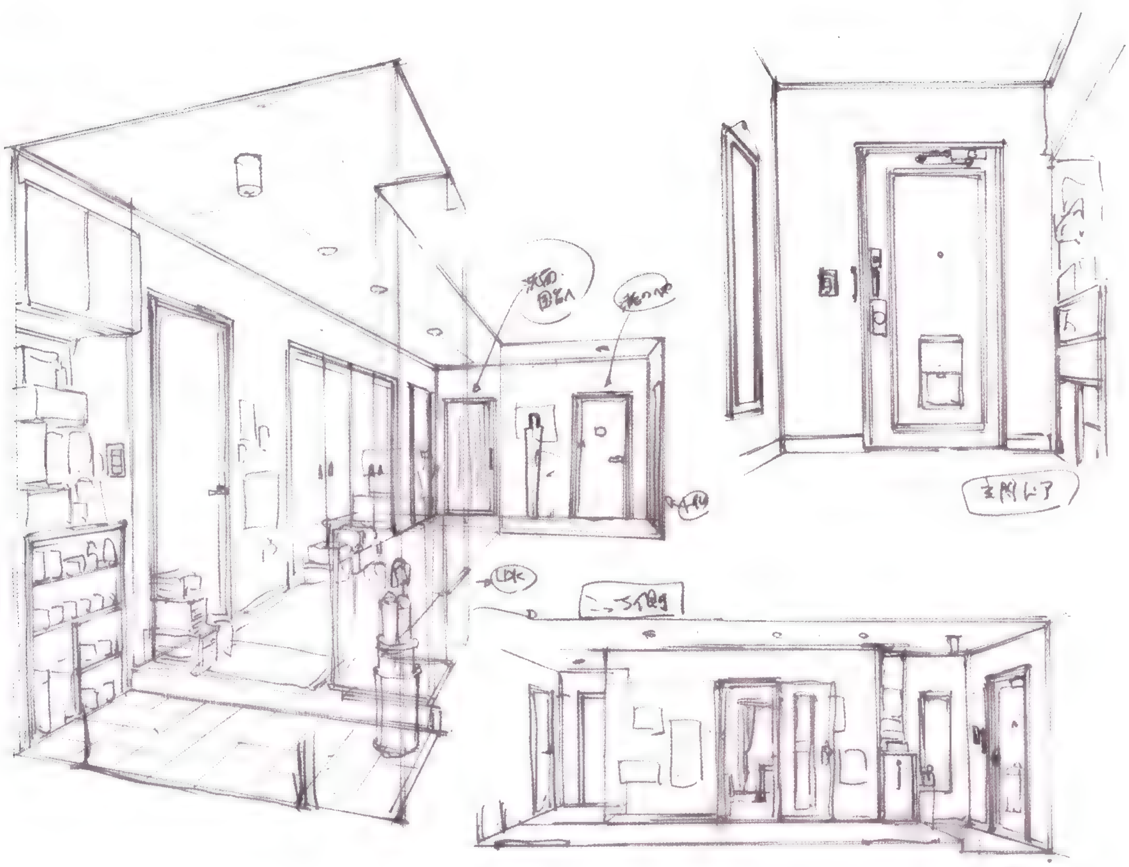
013-01　糸守高校／部室

東京

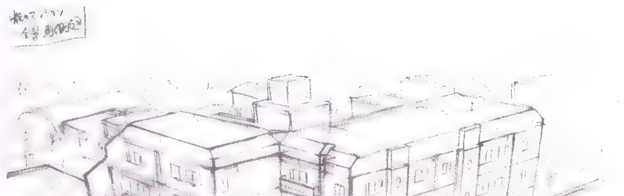
瀧の家は新宿区若葉にある設定。
近くに四ツ谷駅があるなど東京の中心的な場所であり
このエリアの中では高台になっているため選ばれた。
瀧の家と高校を紹介。

立花家

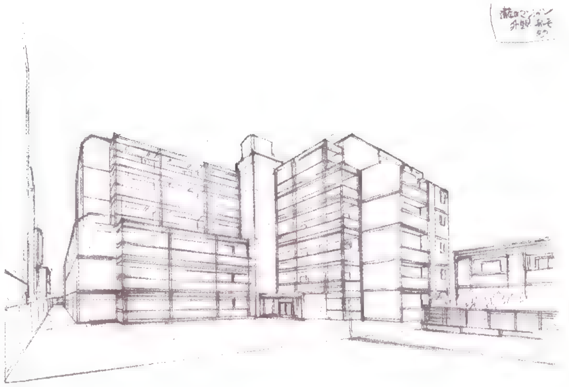
マンションの大きさや間取りをみると2人暮らしにはやや広めだが立花家は一般的な中流家庭だと推測できる。



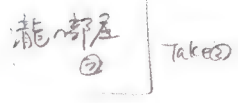
008-02　立花家／玄関／廊下

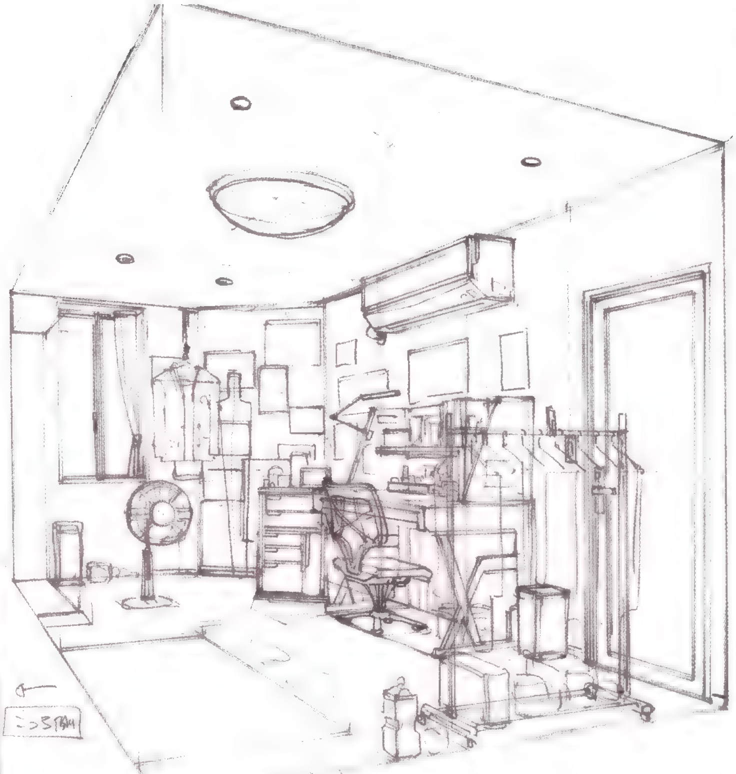


009-01　立花家／マンション外観

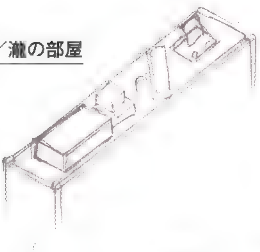


009-01　立花家／マンション外観





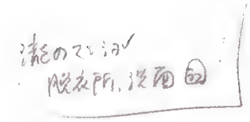
008-04　立花家／瀧の部屋





瀧の部屋

建築に興味を持つ瀧らしく、決して広くはない部屋の中は必要なものだけが整然と配置されている。また飾り気のない脱衣所からは、男２人のシンプルな生活ぶりがにじみ出ている。







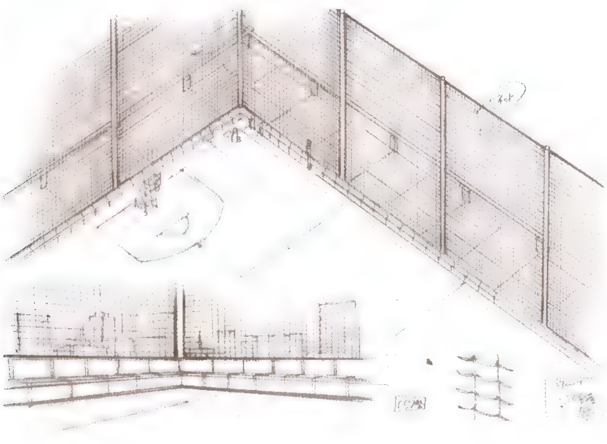
008-03　立花家／脱衣所／洗面所

神宮高校

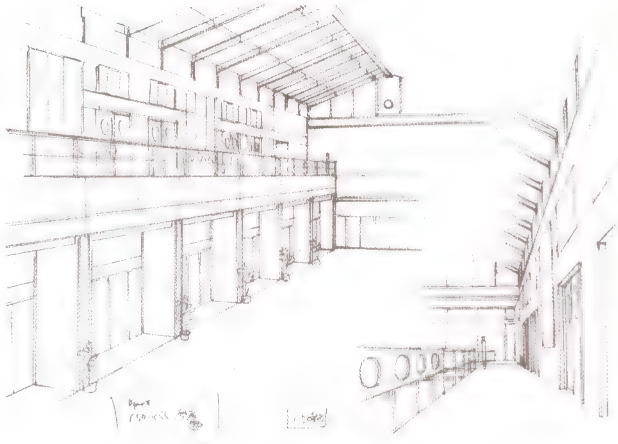
瀧が通う高校は窓ガラスを多く取り入れた開放的な雰囲気。吹き抜けになった校舎内やバスケットボールができる屋上など、三葉が憧れる東京の高校生活を具現化したかのような造りになっている。



010-01　神宮高校／外観



010-02　神宮高校／屋上

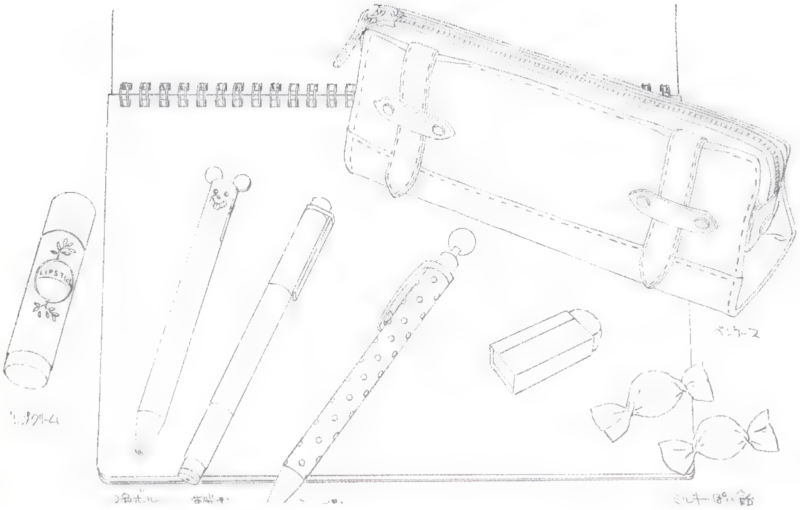


010-03　神宮高校／廊下

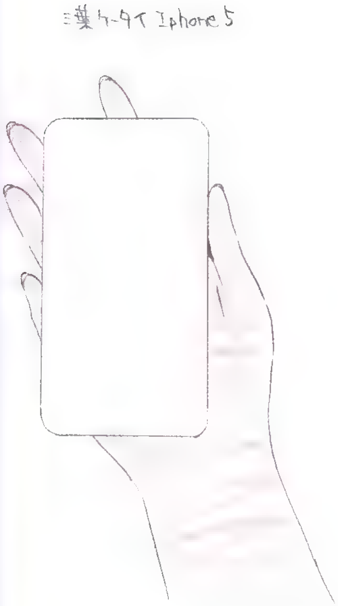
小物設定

props

**ここでは三葉と瀧の高校生らしい
小物を中心にセレクト。
本編の重要アイテムである
三葉バージョンの組紐と
瀧バージョンの組紐の決定稿も掲載。**



002-01　三葉／文房具／決定稿



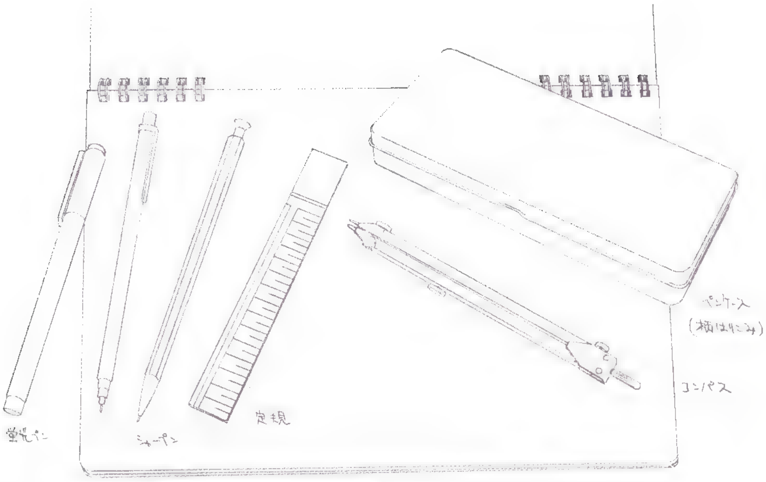
003-01　瀧・三葉／携帯対比／決定稿



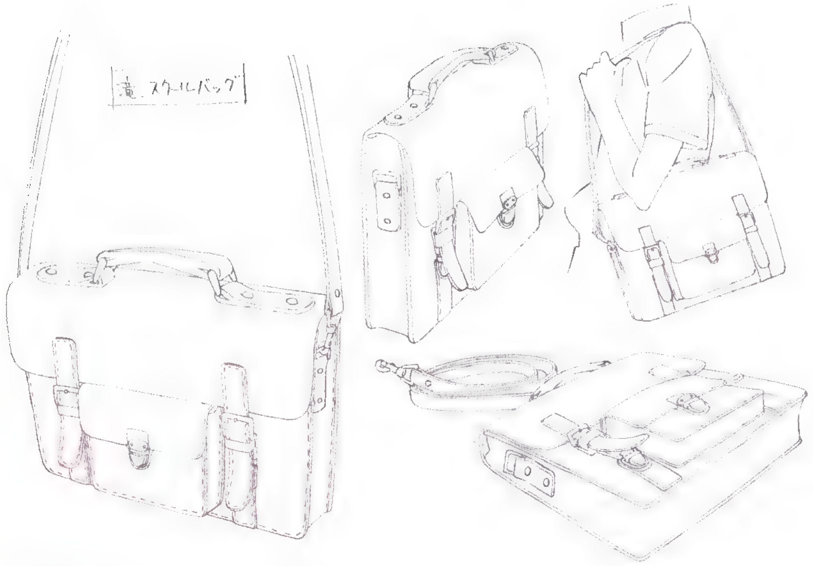
001-01　三葉／スクールバッグ／決定稿



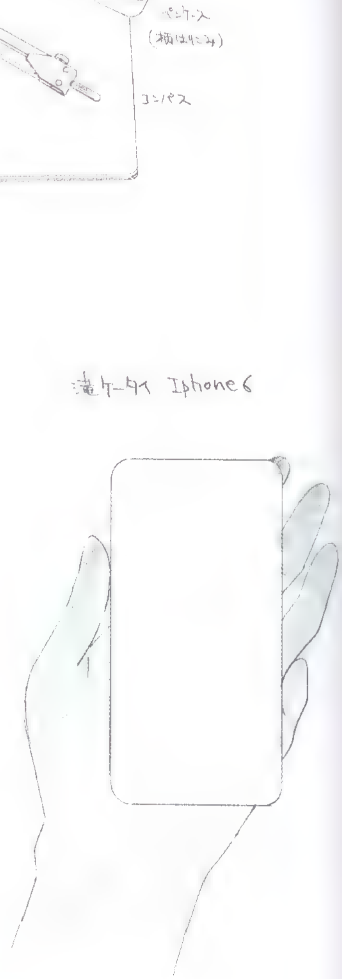
005-01　組紐／決定稿



002-03　瀧／文房具／決定稿



001-02　瀧／スクールバッグ／決定稿



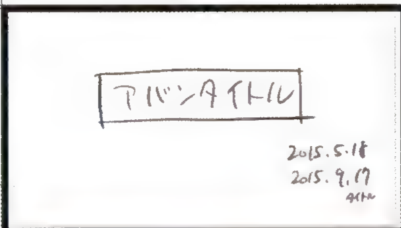
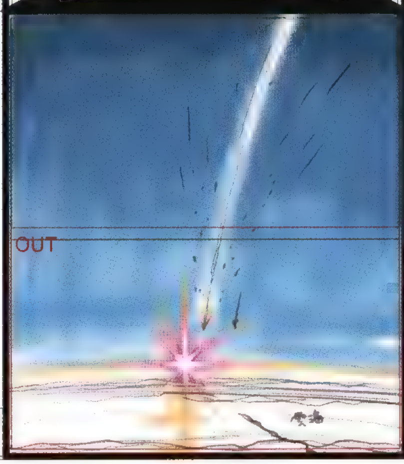


005-03　組紐／決定稿

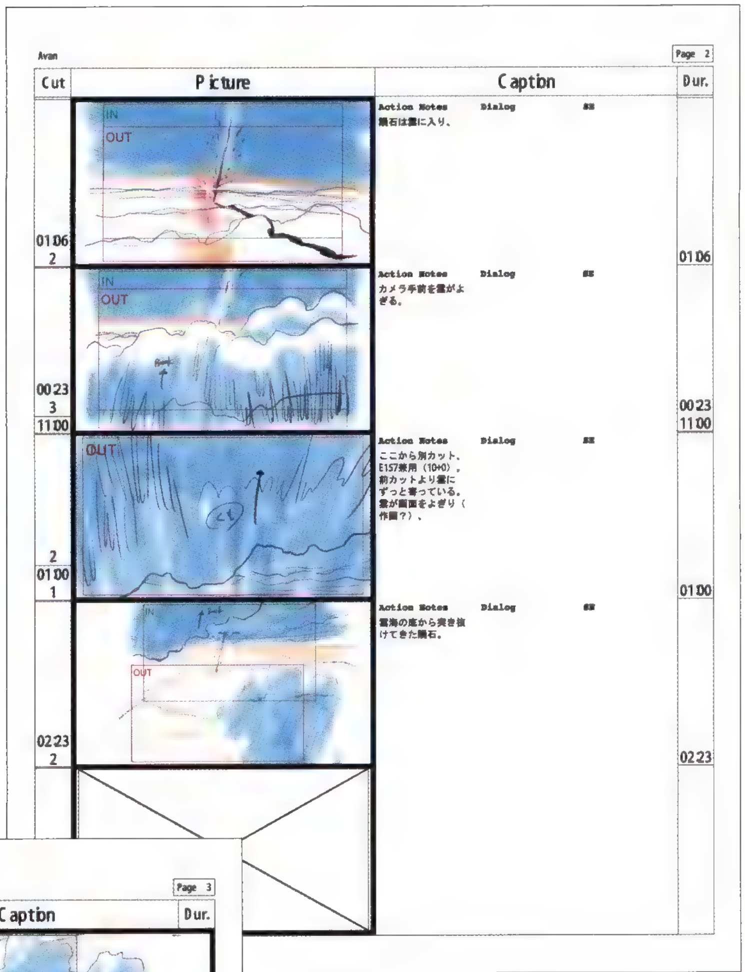
アバンタイトル

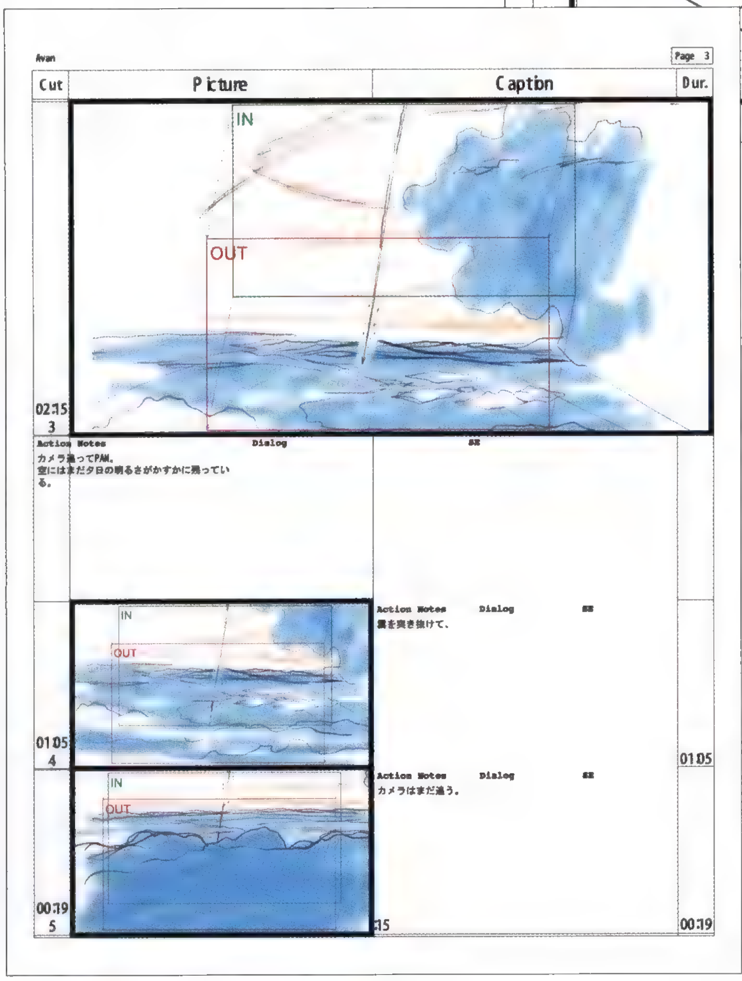
絵コンテは作品の大事な設計図。画面の構図、キャラクターの動きやセリフ、それらの演出意図など、監督の思いが詰まっている。ここではその一部を紹介しよう。

Avan　　Page 1

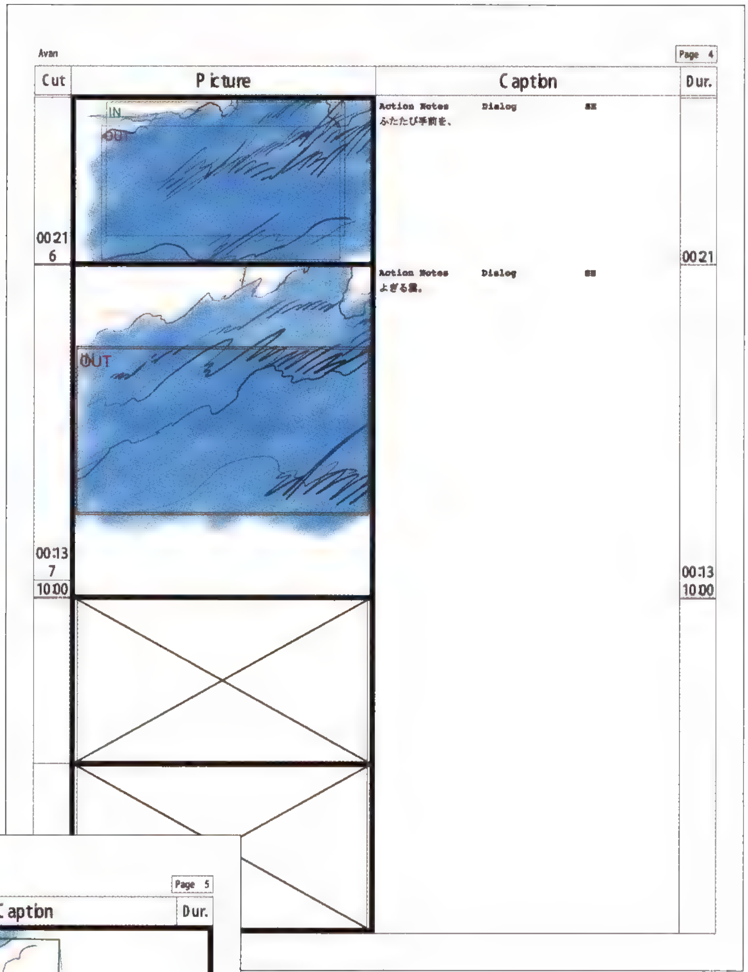
Cut	Picture	Caption	Dur.
0 01:12 1	 	Action Notes　Dialog　SE アバンの多くは本編中の兼用です。 新規作画カットは、AV03、AV07、AV09、AV10、AV11、AV13（一部兼用）、AV14、AV22（一部兼用）、計8カット。	01:12
03:00 2 04:12 Dissolve 01:12		Action Notes　Dialog　SE 風を切る音が先行イン。	03:00 04:12
1 08:19 1	 	Action Notes　Dialog　SE E156（7+0）兼用。 1+12かけてF. I. 濃紺に近い青を、白い煙が横切っている。 その周囲には、燃えては消える塵。 落下を追ってカメラPANダウンすると、落ちていく隕石。雲海にくっきりと煙の影が落ちている。 （大気にも影を落とすか？）	08:19

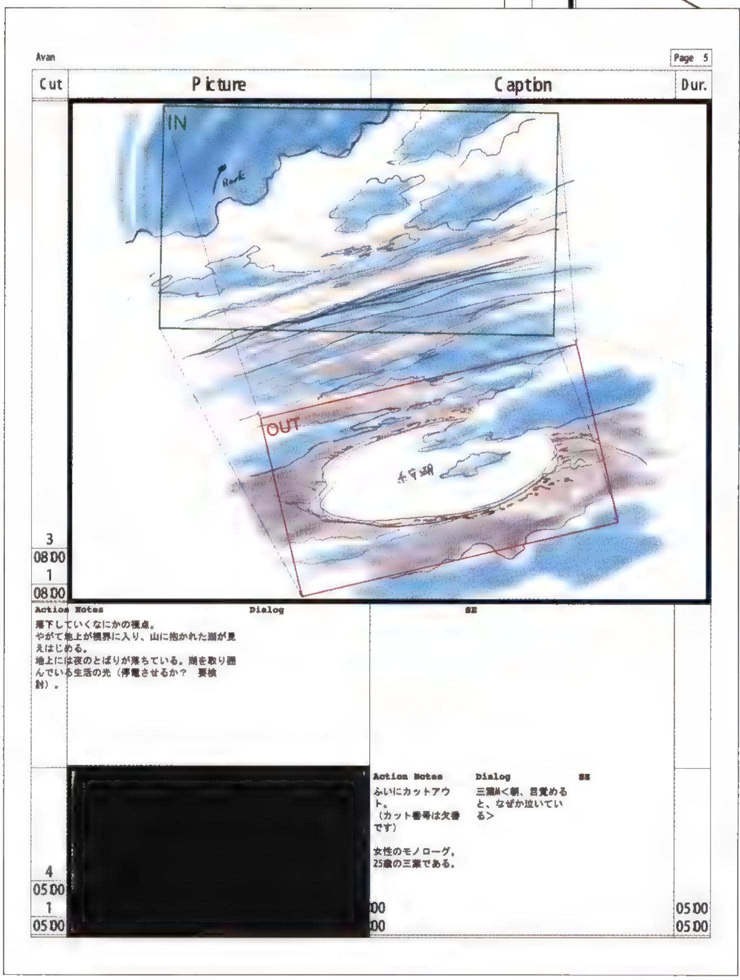
導入部は映画本編に観客をひきつけるための大事なパート。特報でも登場した彗星落下のシーンは、作品の壮大なスケールを感じさせる。





いくつもの雲を突き抜けていく様子が、絵コンテからも隕石が落下するスピード感が伝わってくる。

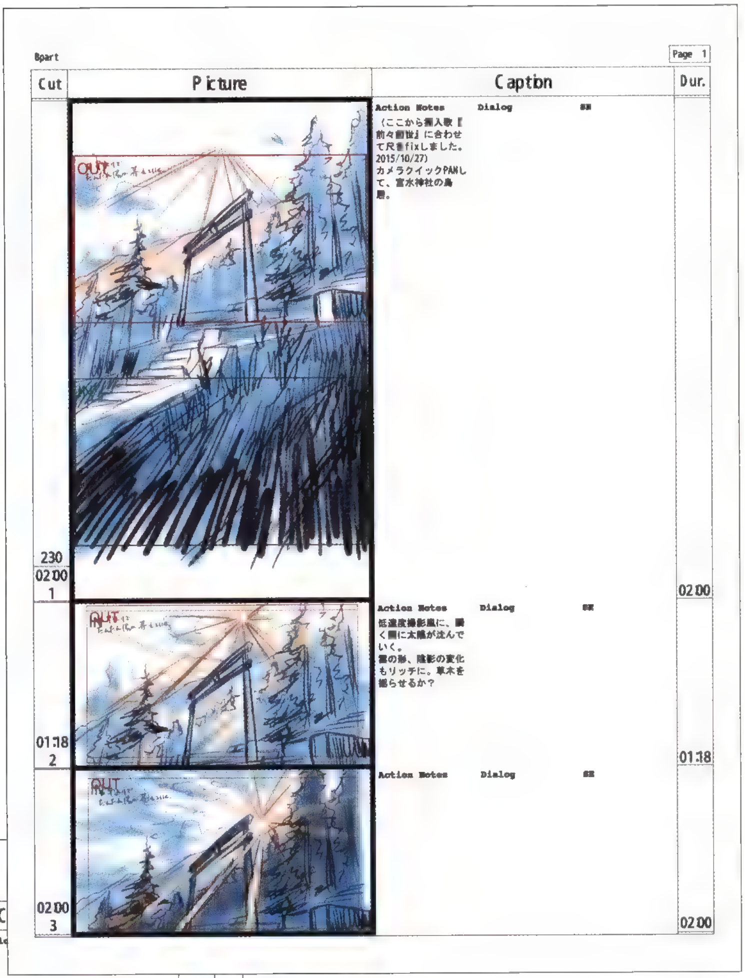


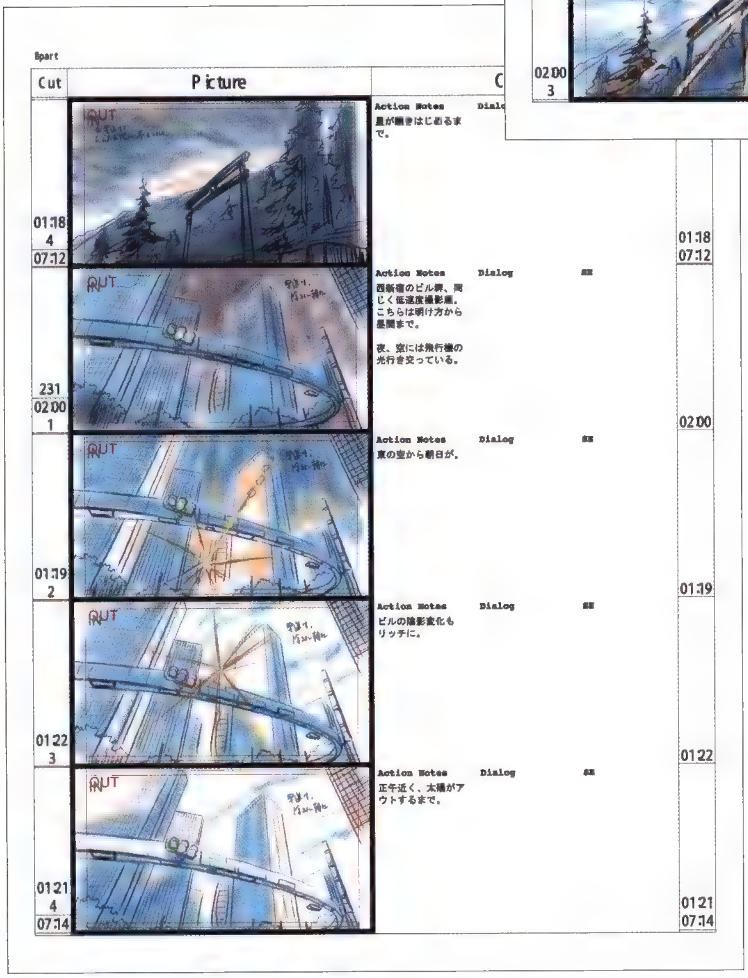


糸守湖が見えたところでカットアウト。
落下の瞬間を見せないことで、これから始まる物語への想像をかきたてる。

音楽との連動

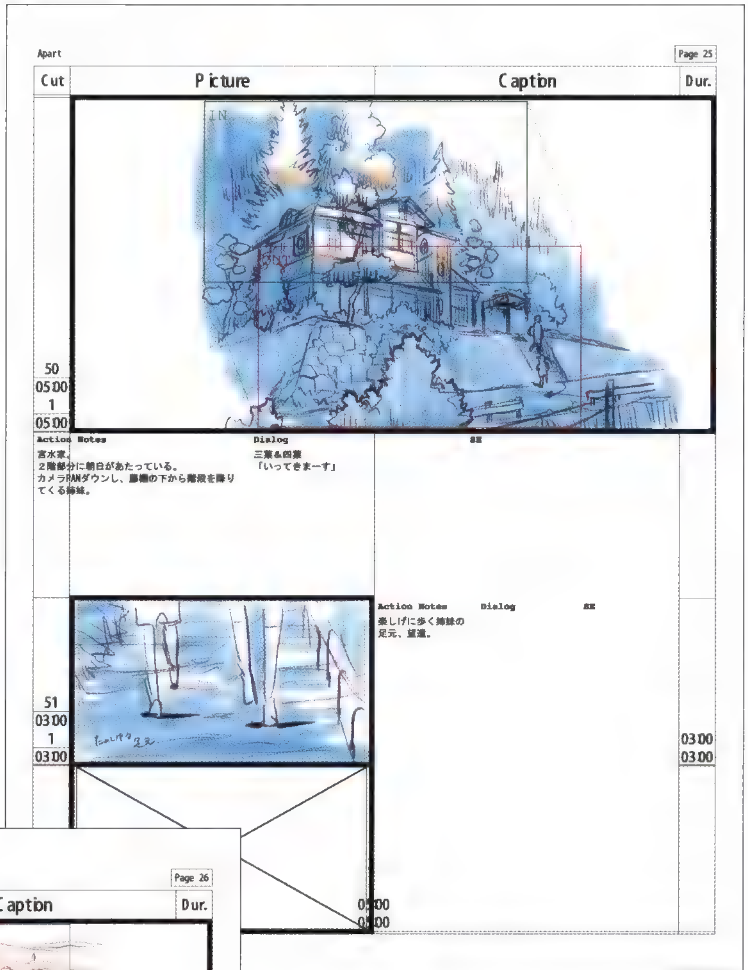
このシーンはRADWIMPSの曲が入ることを想定し、曲を尊重してどう映像を見せていくのかを考えながら描かれていることがよくわかる。

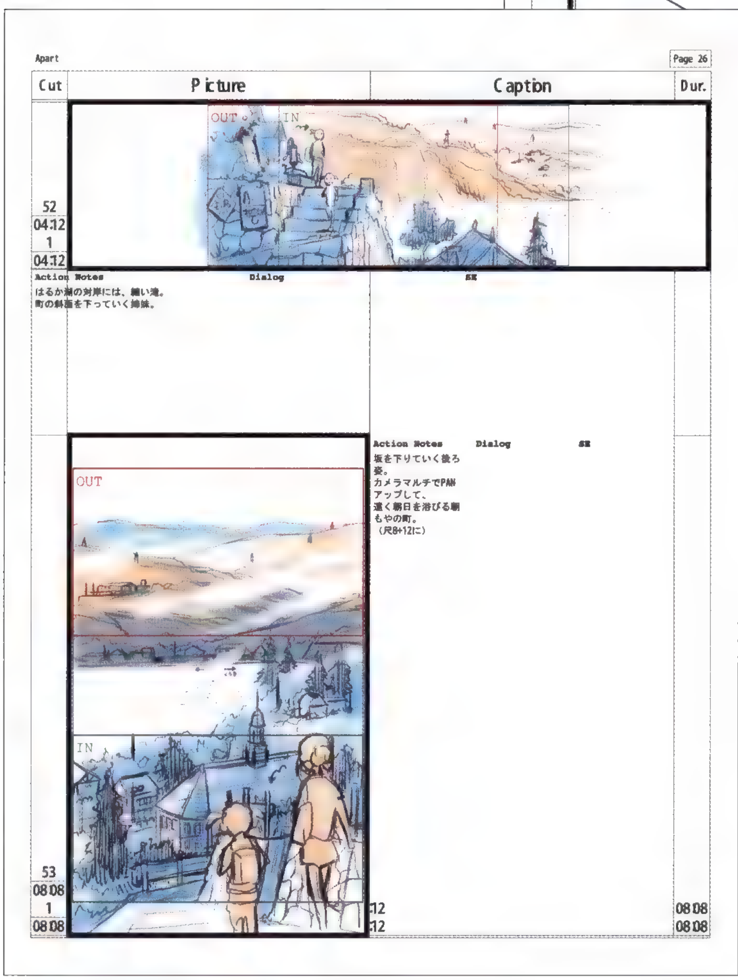




疾走感あふれる『前前前世』の曲に合わせて糸守の日没と東京の夜明けを描いたシーン。

「はるか湖の対岸には、細い滝」、「遠く朝日を浴びる朝もやの町」などが絵コンテに書かれている。カメラの動きにも注目だ。





背景の描きこみ

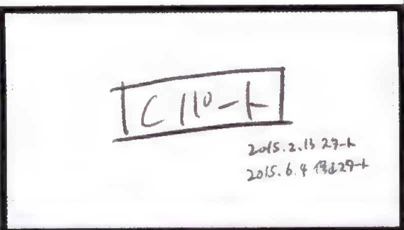
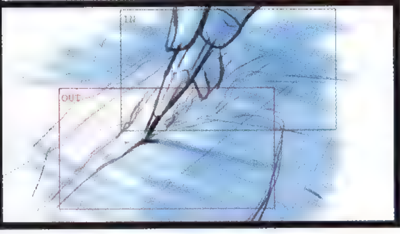
絵コンテには、背景も具体的に描きこまれており、朝日の光や町の様子をイメージして詳細まで描かれている。

セリフ・効果音

**セリフや効果音のタイミングなど、
細かい指示が書きこまれている。
時には実際の写真画像を使って、具体的なイメージを伝えることも。**

Cpart

Page 1

Cut	Picture	Caption	Dur.
0 01:00 1		**Action Notes** ・セリフ・効果音のタイミングは、強い意図がない限りはVコンを基準としてください。VコンのカットTCを参照し、そこからタイミングを割り出してください。 ・カメラの動きの尺指定がありませんので、こちらもVコンでご確認ください。 **Dialog** ・カットナンバー欄の数字は、 1．カットナンバー 2．絵コンテコマのVコンでの尺 3．絵コンテコマのそのカット内での番号です。 **SE** 以上、分かりにくくて申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします！（新海）	01:00
1 01:06 1		**Action Notes** ざーっと引かれていく鉛筆の描線。 **Dialog** **SE**	01:06
01:05 2		**Action Notes** なにかのスケッチなのか、他にも何本もの線がある。鉛筆の先を追うようにPAN。フォーカスも移動していく。 **Dialog** **SE**	01:05
01:13 3 04:00		**Action Notes** 奥までざーっと一本引いて、ザッザッザッ、と短いストロークを繰り返すか？尺分の動きをお願いします。 **Dialog** **SE**	01:13 04:00
2 02:12 1 02:12		**Action Notes** 別の角度から、スケッチをしている鉛筆の先。湖の岸辺の形を探っているらしい。 例えば4回ほど速く短いストローク、1回ゆっくりと線を引く、とか。 カメラ、フォーカス、手持ちのブレ。 **Dialog** **SE**	02:12 02:12

「分かりにくくて申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします！（新海）」と書かれているが、非常にわかりやすい指示だ。



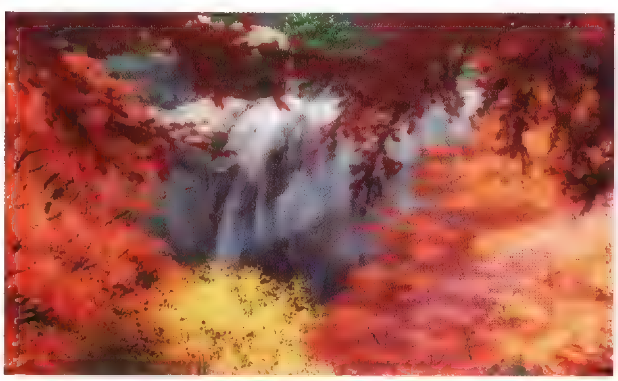
歴史ある宮水の家はまるで自然の中に溶け込んでいるようだ。

背景

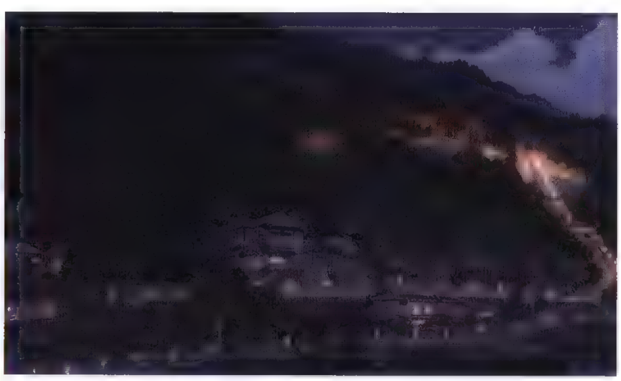
background

日本の原風景のような糸守町の景色。
その大自然の瑞々しい美しさに負けることなく美しく描かれた東京。
新海監督の手にかかれば、こんなにも美しい。

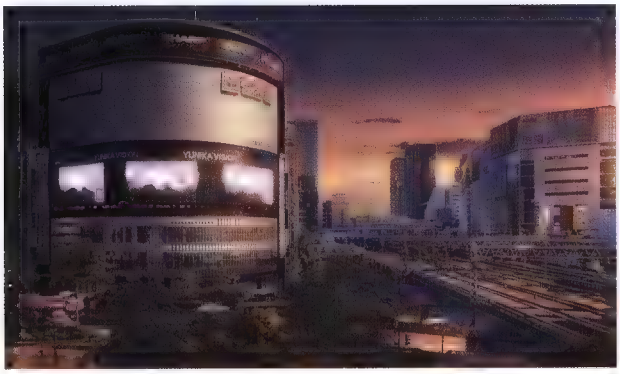
糸守町と東京



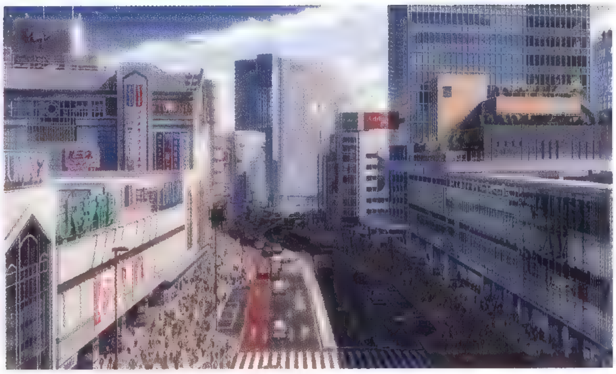
糸守は燃えるような紅葉など、四季を感じさせてくれる美しい自然にあふれている。



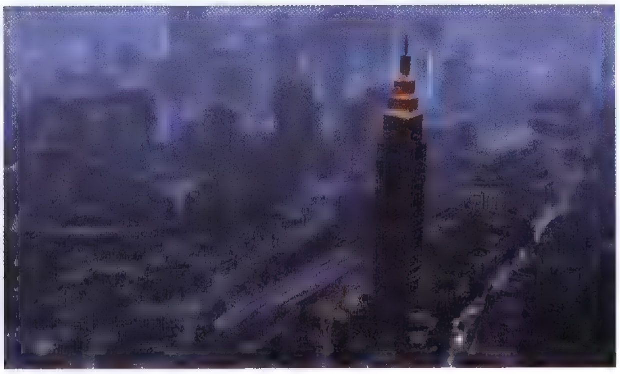
秋祭りの夜。町を照らす灯りが郷愁を誘う。



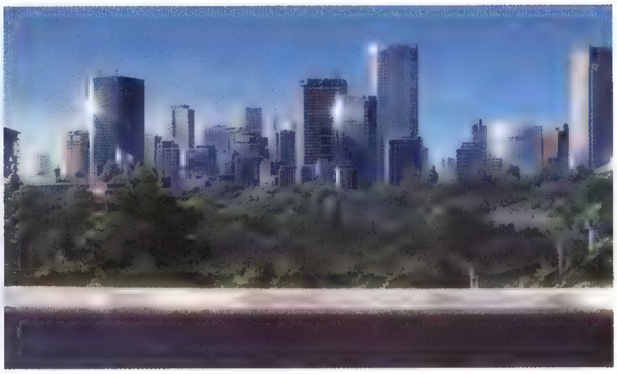
日暮れとともに明滅するネオンが浮かび上がる新宿の街並み。



新宿南口の街の様子。多くの人でにぎわうターミナル駅だ。



新海作品ではよく登場する、新宿のランドマーク的なタワー。



同じ自然の緑も都心と糸守とでは違ったものに感じられる。



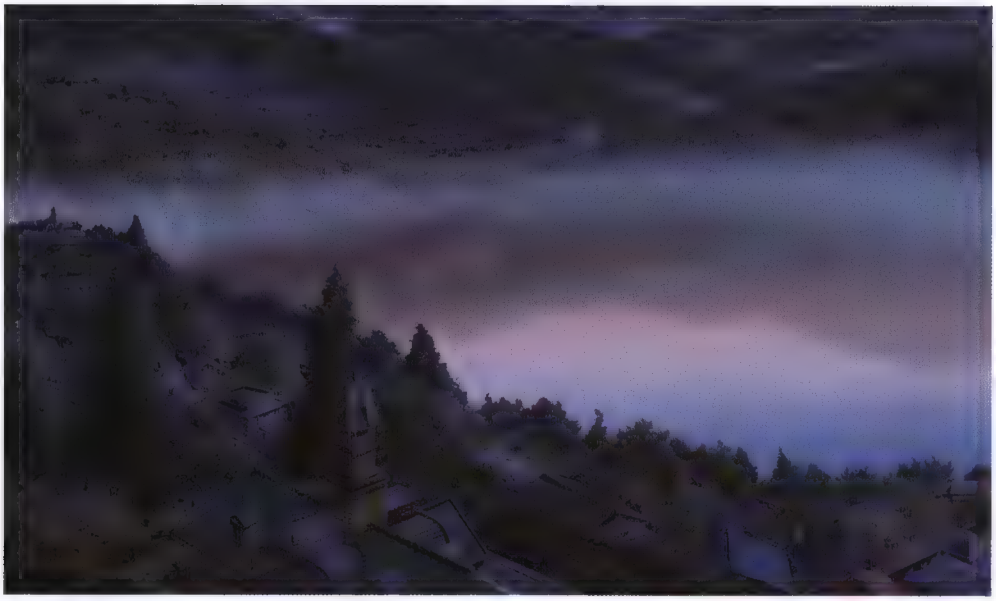
地下鉄の四ツ谷駅の出口周辺。

光と時間

映像では一瞬で描かれる景色だが、こんなにも微妙な変化を経て、時間の流れを光の変化とともに丁寧に描かれている。



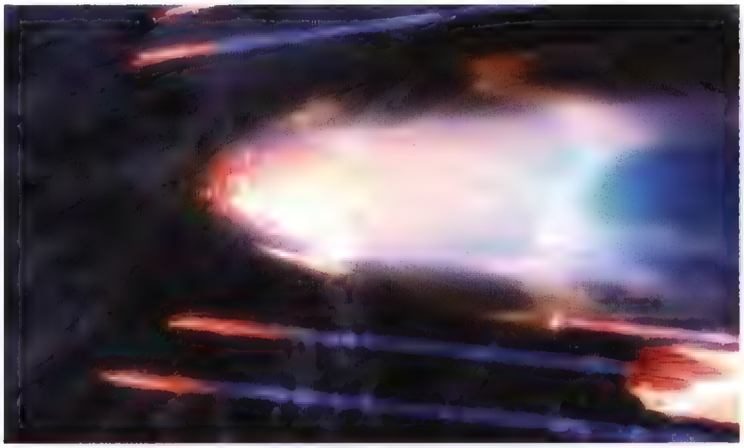
無機質な都会のビル群が朝日に照らされていく様は、巨人が深い眠りから目覚めていく姿のようにも感じられる。

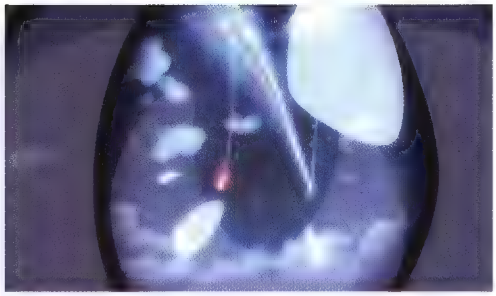






水面にかかる朝霧、太陽光によってきらめく湖面など、糸守湖は時間とともに刻々と表情を変えていく。





糸守の上空を割れながら落ちていく彗星の欠片。夜の空に雲の形を浮かび上がらせるほど明るい光を放ち、その光景は三葉の瞳にも幻想的に映る。

彗星描写

落下する彗星の恐ろしい程の美しさ……。
それらを映し出す空や雲も様々だ。
その圧倒的な光、彗星のパワーに
思わず感嘆の声をあげずにはいられない。



町を包み込むように広がる雲海を突き抜け落ちる彗星。



落下する直前の彗星の光が湖面に映し出されている。





静かな青空に引っかき傷のように伸びる煙と、地球の上を猛スピードで流れていく彗星たち。同じ隕石の落下でも描写の仕方によってまるで違った印象を与える。



まるでオーロラのような彗星の光の残像。直後に大きな被害をもたらすだけに、この美しさが逆に恐ろしく感じてしまう。



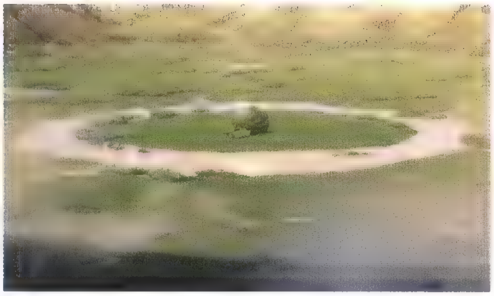
「糸をつなげること、人をつなげること、時間の流れ。それらをすべて“ムスビ”といい、すべて神の力である」とは祖母・一葉の言葉。

糸守町の伝承

**組紐は結びの神。宮水神社の神意は
組紐の様式に託されていた……。
糸守の伝承と伝統をご紹介。**



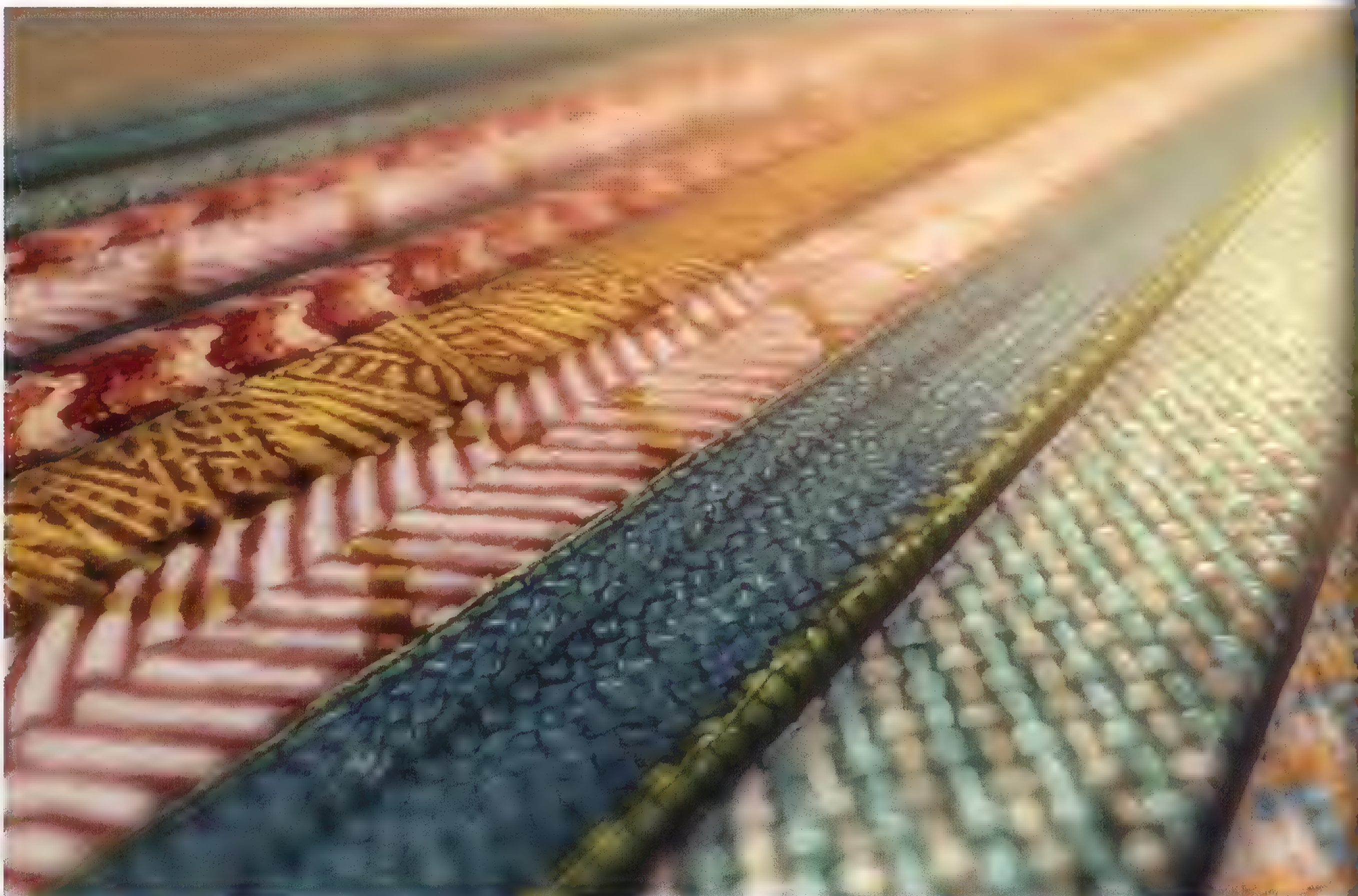
御神体に向かう山中にある御神木。こうした光景からも、いかに糸守に古より神の信仰が根付いているかが分かる。



窪地の中は湿原になっていて、御神体を中心に小さな川が流れている。この川は隠り世（あの世）と此岸（現世）を分ける境界線でもある。



口噛み酒を奉納するために御神体のある山頂まで歩いてきた三葉たち。頂上は窪地になっており、外側から御神体を見つけることはできない。



彩り豊かな組紐。豊穣祭などの儀式で使用する組紐は、巫女である三葉たちが自分の手でひとつひとつ組んでいく。



組紐の文様には糸守の千年の歴史が刻まれている。しかし、その意味は200年前の火事とともに失われてしまった。



瀧が記憶を手繰り寄せながら描いた糸守の風景画。この絵がきっかけで、やがて瀧と三葉は時空を超えて邂逅する。

青木 優佳　安藤 のぞみ　入江 千尋　小山 知子
小松 亜理沙　鈴木 咲絵　武田 仁基　比嘉 あきの
藤原 道乃　堀内 菜央　斎藤 弘史　木下 美佳
橋本 侑香里　村瀬 瞳美　角 美智子　沼田 千晶
都丸 陽子　近藤 亜豊　岩崎 静夏　原田 和也
大枝 優斗　渡辺 郁也　大田 晃　中野 夏帆
千葉 涼香　池田 優華　鴨原 絢子　若井 あゆ
岸下 真紀　玉木 千春　角 智美　遠藤 絵翔
松浦 友紀　佐藤 博美　佐藤 はじめ　芦澤 友紀
高橋 聖美　杉山 智恵　中原 あゆみ　内海 太暉
加藤 笑子　丸山 香　加藤 友美　湊 大樹
文聖勳　安鍾愛　鄭恵羅　李賢貞
崔秀庚　田燦珠　金銀姫　李娟珠
韓明錫　Kim Hee Jung　Seok Young Suk　Gang Nam E
Lee Yoo Kyoung　Oh Jin Hee　Kang Hee Kyoung　權五淑
權英錦　朴ユリ　李賢善　李珍姫
金美正　金旼正

撮影チーフ　福澤 瞳

撮影　三木 陽子　李 周美　藤田 賢治
津田 涼介　八木 晶彦　岩井 和也
新海 誠

撮影協力　江藤 慎一郎　末 守貞　岡 淑子
江上 玲　土屋 康次　梅藤 直樹
高瀬 静　田中 英里那

テクスチャー　市川 愛理　小野 麻美　清水 由香
三木 陽子　落合 千春

3DCGチーフ　竹内 良貴

3DCG　宮原 満　河合 完治　山元 隼一

音響監督・録音　山田 陽

音響効果　森川 永子
効果助手　林 佑樹

録音　八巻 大樹
録音助手　相原 ひかる

音響制作　サウンドチーム・ドンファン

方言指導　かとう 有花

キャスティング　増田 悟司　大口 晴子
有馬 加奈子

アフレコスタジオ　studio Don Juan

ダビングステージ　東宝スタジオ
東宝スタジオコーディネート　西野尾 貴明　立川 千秋
スタジオエンジニア　竹島 直登
スタジオアシスタント　佐野 優介
テクニカルサポート　菊地 秀徳　越 真一郎

「君の名は。」
(ユニバーサル ミュージック/EMI Records)

主題歌

「夢灯籠」
RADWIMPS
作詞・作曲　野田 洋次郎

「前前前世 movie ver.」
RADWIMPS
作詞・作曲　野田 洋次郎

「スパークル movie ver.」
RADWIMPS
作詞・作曲　野田 洋次郎

「なんでもないや movie ver.」
RADWIMPS
作詞・作曲　野田 洋次郎

劇中使用曲

「星影舞」
作曲：村山 二朗

「in a little while」
作曲：藤井 隆仁

「古いオルゴール」
作曲：藤井 隆仁

「春NewVer」
作曲：牧野 奈津子
© 2004 サウンドフォーラム
Licensed by スイッチ

「高原」
作曲：UNI-PEX
© ユニペックス
Licensed by スイッチ

音楽プロデューサー　成川 沙世子

音楽ミキサー　菅井 正剛　澤本 哲朗
Tom Lord-Alge　長谷川 巧
音楽ディレクター　山口 一樹
ストリングス協力　徳澤 青弦
音楽エディター　金真 周一郎
アーティストリレーションズ　田島 顕　渡辺 雅敏
堀越 智恵　綱嶋 杏子
桂川 寛一　佐藤 夕香
音楽協力　藤沢嵐子保存会　深澤 亜咲香

編集　新海 誠

デジタルラボ　IMAGICA

オンライン編集　増永 純一
カラーマネジメント　由良 俊樹
デジタルシネママスタリング　新谷 彩　浅井 亜衣
ラボコーディネーター　河野 紅美子
営業ラボマネージャー　小川 穂　水谷 真理

制作プロデューサー　酒井 雄一

制作進行　岡村 慎治　遠藤 周平　横田 祐
堀 雄太　LEOW LEE WON

アニメーション制作協力　アンサー・スタジオ
制作プロデューサー　木舘 由香里　鶴持 耕平
制作デスク　中目 貴史
制作進行　吉橋 慶太　富岡 翔大

制作協力　Production I.G　スタジオカラー　TROYCA

CLIP+BISON LLC　スタジオシャムロック
シャフト　アニメ TORO TORO　オープロダクション　マッドハウス
ゴンゾ　中村プロダクション　オレンジアニメーション　HANJIN
マア・モビックス　すたじおかぐら　テレコム・アニメーションフィルム
ライジングフォース　和風アニメーション　ゼクシズ　スタジオ・マーク
M.S.C　スタジオギムレット　アニタス神戸　アングル　イングレッサ
キャンディーボックス　作楽クリエイト　ラインファーム　オフィス フウ
D-COLORS　T2studio　スタジオ・タージ　ライトフット　DR MOVIE
Alpaca Pictures　ファインカラーズ　スタジオエル　マウス　デファー
プロダクション・アイ　クリーブ　インスパイアード　TYOアニメーションズ

東宝ミュージック　ちゅらサウンド　サウンドインスタジオ
ユニークブレインズ　三交社

取材協力　井上 史也　吾妻 あや子　松本 恩
平田組紐　シェアードテラス　四谷 須賀神社
国立新美術館　森ビル

協力　栄光ゼミナール　大塚商会　学研プラス 月刊ムー編集部
すかいらーく　東京スクール・オブ・ビジネス　福美人　ヤマダ電機
明治　YUNIKA VISION　Z会

東宝スタジオ　東宝スタジオサービス　togetter
東宝ポストプロダクションセンター　ZENRIN　Mapion

宣伝プロデューサー　鶴澤 康弘　濱崎 友子　水木 雄太
宣伝　秋山 智美　下薗 章　飯島 満春
坂内 一男　福地 雄士　中内 麻友
篠原 麻由子　松成 憲二　西村 公佑
橋本 尚樹　川口 晴子

宣伝デザイン制作　落合 千春　市川 愛理

オフィシャルライター　渡辺 水央
予告編ディレクター　依田 伸隆
予告編制作進行　高橋 英一郎　岩崎 友佳
グラフィック制作　BALCOLONY.
公式サイト制作　BALCOLONY. & TRIBALCON.
メイキング制作　ナカマオフィス

書籍編集　関口 靖彦
出版・商品協力　吉良 浩一　今井 理紗　長山 俊明
遠藤 美希　井坂 香美　石井 千香子

海外営業　菊地 裕介　竹田 晃洋　中澤 小枝　町田 瑠衣
商品化窓口　田中 敬子

助成　文化庁文化芸術振興費補助金

スペシャルサンクス　岩井 俊二　三坂 知絵子　松下 慶子
石井 朋彦　阿部 良弘　白鳥 貴子
岡島 暗敏　宗宮 一樹　加藤 友宜
水野 晶　藤枝 信吾　倉田 幸則

プロデューサー　武井 克弘
伊藤 耕一郎

「君の名は。」製作委員会

共同製作　井上 伸一郎
弓矢 政法
畠中 達郎
善木 準二
坂本 健

東宝　山内 章弘　上田 太地　小野田 光　鎌田 周平
大島 孝幸　藤田 剛毅　大浦 俊将　高橋 敦司
コミックス・ウェーブ・フィルム　角南 一城　小川 智弘　武田 真理子
KADOKAWA　堀内 大示　菊池 剛　工藤 大丈　鳥島 康文
ジェイアール東日本企画　相原 徹　土生 宏昌　飯岡 浩司
アミューズ　千葉 伸大　遠藤 日登思　久保 美夏
voque ting　塚原 聡
ローソンHMVエンタテイメント　飯谷 尚也　長田 史郎　柳田 貴彦　広瀬 春奈　津田 健太郎

制作　コミックス・ウェーブ・フィルム

監督　新海 誠

立花 瀧 神木 隆之介

宮水 三葉 上白石 萌音

勅使河原 克彦 成田 凌

名取 早耶香 悠木 碧

藤井 司 島崎 信長

高木 真太 石川 界人

宮水 四葉 谷 花音

宮水 トシキ てらそま まさき

宮水 二葉 大原 さやか

瀧の父 井上 和彦

勅使河原の父 茶風林

勅使河原の母 かとう 有花

ユキちゃん先生 花澤 香菜

寺崎 裕香 小野塚 貴志 滝川 洋平
辻 美優 浜添 伸也 佐藤 美美
合田 慎二郎 菊池 康弘 ひなた たまり
山根 希美 新 祐樹 村上 達哉
長谷川 暖 バロン 山崎 珠希 美碧
井上 優 宇佐美 沙子 森嵜 美穂
南鳥 毅 大前 茜 山口 智大
中務 貴幸 松川 央樹 根来 彰子
大南 悠 嶋 愛美 田端 美保
松坂 優子 富岡 英里子 山本 栄司
ラヴェルヌ 知輝 大川 春菜 池田 優音
兼光ダニエル真 C.Elliott Wong スタンザーニ・ビーニ龍文京
Chris McKenna 桑原 彰 武田 祐介

奥寺 ミキ 長澤 まさみ

宮水 一葉 市原 悦子

製作 市川 南 川口 典孝 大田 圭二

企画・プロデュース 川村 元気

エグゼクティブプロデューサー 古澤 佳寛

原作・脚本・絵コンテ 新海 誠

キャラクターデザイン 田中 将賀 安藤 雅司

音楽 RADWIMPS

作画監督 安藤 雅司
井上 俊之
土屋 堅一
廣田 俊輔
黄瀬 和哉

演出 居村 健治

原画
稲村 武志 濱洲 英喜 本間 晃
井上 俊 土屋 堅一 廣田 俊輔
田中 敦子 賀川 愛 箕輪 博子
西村 貴世 岩崎 たいすけ 岸野 美智
小林 直樹 田澤 潮 高士 亜衣
古川 尚哉 中村 悟 松尾 真理子
竹内 旭 松永 絵美 鶴岡 耕征
水野 良亮 河原 奈緒子 土屋 亮介
松村 祐香 大橋 実 荒木 裕
渡辺 裕二 齋藤 直子 山本 早苗
竹内 一義
太田 玄美 千葉 崇洋 末富 慎治
竹縄 利名 福田 さちこ 春日 広子
小西 紗希 奥野 治男 五反 孝幸
下妻 日紗子
松本 憲生 沖浦 啓之 橋本 敬史

オープニング作画監督 田中 将賀

オープニング原画 錦織 敦史 谷口 淳一郎 岩崎 たいすけ
滝本 祥子 大籠 康二 落合 瞳
田中 将賀

隕石シーン演出・原画・撮影 四宮 義俊

特殊効果 皆川 真紀 室岡 侑奈 島田 美菜子
松田 大介 MATEUSZ URBANOWICZ

3DCG 吉野 耕平 金子 哲 竹内 良貴

脚本協力 加納 新太

プロップ設定 岩崎 たいすけ

巫女舞創作・振付 中村 壱太郎

動画検査 玉腰 悦子
真野 鈴子
大村 まゆみ
手島 晶子
大橋 実

動画
中込 利恵 秋田 雅子 林 佳枝 松浦 絹
松田 裕美 松岡 理恵子

鈴木 香理 黒田 亜理沙 深沢 純怜 山本 晃弘
土岐 弥生 横田 喜代子 東 誠子 富沢 恵子
村松 さつき 矢地 久子 藤島 まや 大谷 久美子
椎名 律子 長命 幸佳 玉置 雅代 安東 雅代
古木 優 田名部 節也 宮川 かおり 田中 立子
熱田 幸永 芝崎 みゆき 佐藤 哉子 楯 裕津
榎本 修斗 中嶋 智子 水野 良亮 松村 祐香
真野 鈴子 大村 まゆみ 手島 晶子 大橋 実
玉腰 悦子

谷平 久美子 山浦 由加里 小山 正清 大谷 園
齋藤 彩圭 村橋 亮佑 本田 康明 山本 芽以
岩切 君枝 辻 仁子 小川 麻衣 甲斐 順子
藤中 友里 赤坂 莉奈 大口 茜 坂詰 かよ
劉慕英 韓松熙 徐允珠 河承希
金垠愛 朴繡姫 金貞蘭 金貞順
鄭玄貞 Hwang Sun hee Jo Jee Young Ku Gyunh Yok
Hu Kyung Hee Song Tae Kwang Kim Sin Sung 黄順河
安美京 LEE BOREUM 冨田 美穂子 水口 貴美
小谷 瞳美 下平 夕子 戸井田 恵 根本 奈実
岸井 沙織 吉村 千秋 池田 遥 合田 良太
山田 哲文 福富 絢子 陸井 優花 澤井 毅
森 慶彦 小保方 千奈 渡辺 真紗子 飯盛 夏子
川口 理佳 千葉 大輔 与澤 桂子 北條 由美子
須崎 かおる 関 夏実 張相美 仙波 里至
山口 なつみ 菅原 菜津美 田崎 茜 國分 瑞生
柳澤 彼方 原科 大樹 大山 神 田中 壱樹
藤原 舞似子 原田 靖 市村 友美佳 和田 凜花
高野 靖司 豊田 創 山本 彩加 大曾根 唯
堀内 正康 櫻井 加乃子 和泉 晃那 橋本 穂高
岡野 結 中原 奈緒美 奥 舞 佐藤 加奈
太田 慎之介 中川 三由紀 衛藤 千広 清原 寮
崔容吾 金福心 金成范 張智程

美術監督 丹治 匠
馬島 亮子
渡邉 丞

美術設定 高橋 武之

美術設定協力 滝口 比呂志

美術背景
廣澤 晃 瀧野 薫 泉谷 かおり
MATEUSZ URBANOWICZ 友澤 優帆 小原 まりこ

宇佐美レオナルド健 中島 健太 斉藤 未来
上田 瑞香 中村 琪利子 本田 敬恵
島田 美菜子 渡邉 丞 馬島 亮子
丹治 匠

後藤 香澄 松田 大介 里見 篤
室岡 侑奈 松本 吉勝 長澤 康子
中右 智博 黒澤 成江 侯 荻
森川 みず穂 小幡 健二 上遠野 祥子
増山 修 木下 富輔 加藤 紗乃
小山 真和 妹尾 慧 石島 静佳
西口 早智子 金晧燦 申鉉真

色彩設計 三木 陽子

色指定検査 仲條 貴子

色指定補佐
忍那 亜実 久力 志保 関根 里枝子
日比野 仁 渡辺 恵子 佐藤 加奈子 大野 千鶴
川上 優子 村田 幸々

デジタルペイント
野口 幸恵 高谷 知恵 原田 裕作 田中 英里那
倉田 咲 黒澤 友哉 永嶌 春樹 飯島 理恵
早川 恵美 斉藤 あや子 及川 真由美 橋本 千春
藤井 さつき 山崎 あかね 西田 みのり 富次 美和
竹下 瑞絵 石倉 瑞久 松田 悠樹 井浦 祥子
牛山 裕美 刹根川 友紀 相澤 里佳 福田 友理恵
安藤 佳奈恵 佐藤 恭子 田村 貴子 堀川 麻美
宮原 奈緒子 斉藤 龍介 小柳 寿志 畑中 章行
横瀬 貴幸 中平 香織 田中 悠勝 末葉 明佳

STAFF

Designer
加藤寛之

Writer
渡辺水央
ワダヒトミ
倉田モトキ

Photographer
ホンゴユウジ（P54～58）
首藤幹夫（P50～53、P66、P69～70、P72、P74～80）
コミックス・ウェーブ・フィルム
（P56、P59、P62～63, P65、P68、P72～73）

Editor
岸本亜紀
加藤芳美
平野智子

Editorial cooperation
コミックス・ウェーブ・フィルム
市川愛理
植田　祐
遠藤陽平
小野麻美
福島洋心
LEE WON LEOW

Editorial supervisor
東宝
武井克弘
秋山智美

コミックス・ウェーブ・フィルム
落合千春

Special Thanks
新海　誠

衣装協力
ADONUST MUSEUM（03-5428-2458）
ALLSAINTS（03-6433-5159）
HIGH BRIDGE INTERNATIONAL（03-3486-8847）
Honor gathering（03-3409-3015）
licht bestreben（03-5697-1525）
lot holon（03-6418-6314）
THEE OLD CIRCUS（03-6277-2947）
TROVE（03-3476-0787）



新海誠監督作品

君の名は。

公式ビジュアルガイド

2016年8月26日　初版発行
2016年9月20日　3版発行

発行者　郡司　聡

発行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
電話 0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）
受付時間 9:00～17:00（土日 祝日 年末年始を除く）
http://www.kadokawa.co.jp/

監督　新海　誠

監修　東宝、コミックス・ウェーブ・フィルム

編集　角川書店

印刷・製本　図書印刷株式会社

ISBN 978-4-04-104780-4 C0076

JASRAC出 1609440-603



KADOKAWA

ISBN978-4-04-104780-4
C0076 ¥1600E

定価：本体 1,600円（税別）

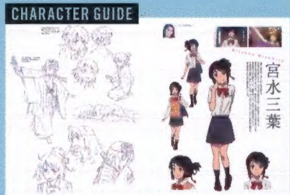
KADOKAWA





VISUAL STORY

CHARACTER GUIDE





SPECIAL CROSS TALK